

福岡市西部地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

# 徳永古墳群 3

— H群 2次調査 —

## 女原上ノ谷製鉄址

福岡市埋蔵文化財調査報告書第436集

1995

福岡市教育委員会

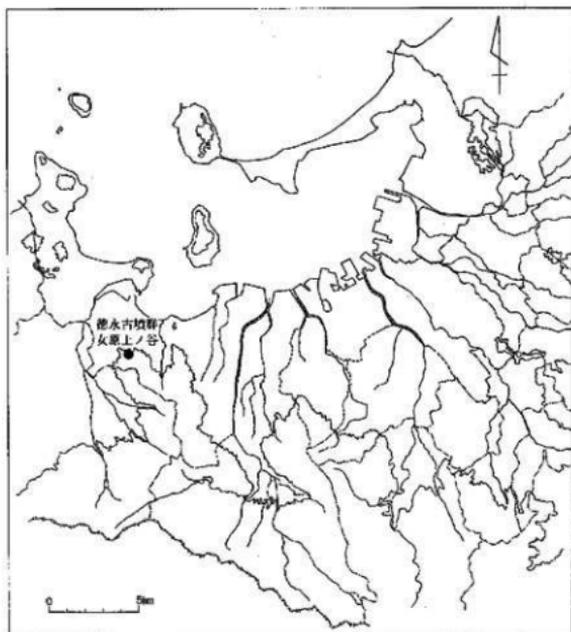
TOKU NAGA

# 徳永古墳群 3

MYOJ BARU I'E NO TANI

## 女原上ノ谷製鉄址

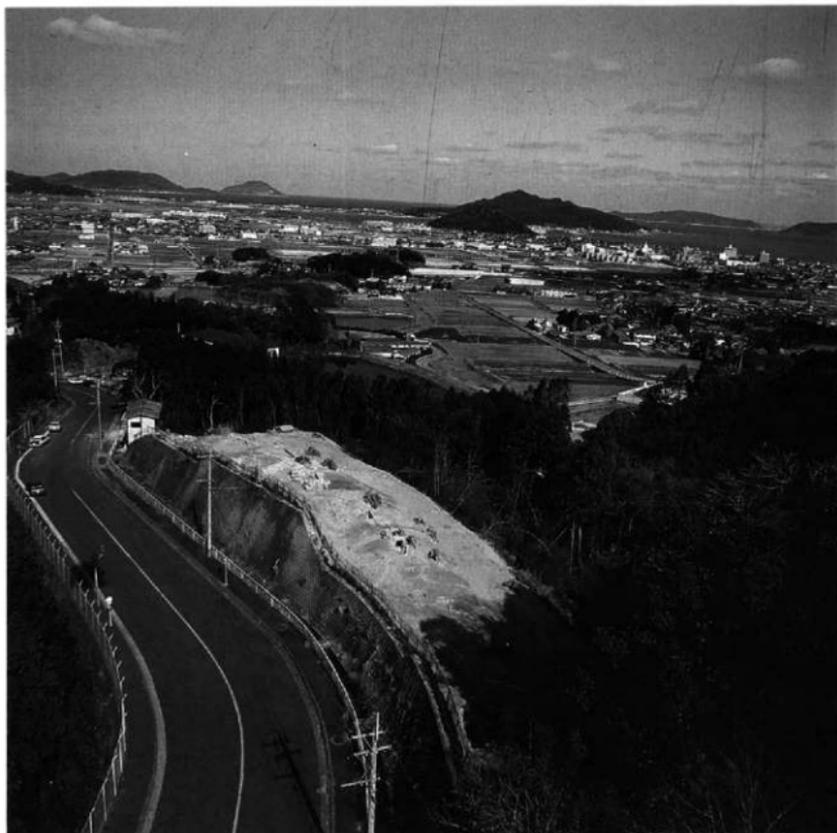
福岡市埋蔵文化財調査報告書第436集



徳永古墳群H群 2次 遺跡調査番号9235  
遺跡略号 TTK-H-2  
女原上ノ谷遺跡 1次 遺跡調査番号9337  
遺跡略号 MBU-1

1995

福岡市教育委員会



調査区南から今宿をのぞむ

## 序

福岡県の北西部、玄界灘に面して位置する福岡市には、豊かな自然と歴史遺産が残されてきました。それらを残し後世に伝えていく事は、言うまでもなく私どもの務めであります。しかし、近年の福岡市のいちじるしい都市化により、それらが失われつつあることも事実です。

福岡市教育委員会では、これらの開発にともないやむを得ず失われていく遺跡について、事前に発掘調査を行い、記録保存に努めております。

本書は、山林造成にともない調査した徳永古墳群H群2次、女原上の谷遺跡1次調査の記録を報告するものです。調査では縄文時代から近世に至る遺構と遺物を発見しました。この結果、この地区の歴史、および他地域との交流についての問題についても明らかになりつつあります。

本書が埋蔵文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くのかたがたのご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表する次第であります。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

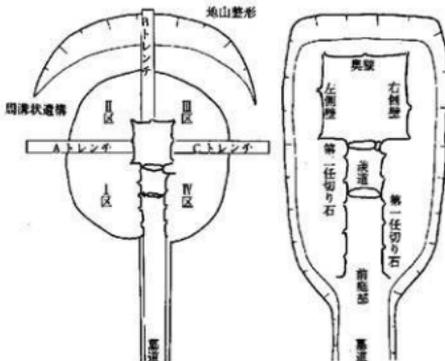
## 例 言

### 徳永古墳群H群2次

- 1 本項は西区女原377において福岡市教育委員会が1992年度に実施した徳永古墳群H群第2次調査の報告である。これまで徳永古墳群について2冊の報告が刊行されている(8頁参照)。本報告はこれらに続くものとして「徳永古墳群3」とした。
- 2 本稿で使用する方位は磁北である。
- 3 遺構の実測は池田祐司、屋山洋、榎本義嗣が、遺物実測は平川敬治、池田が行なった。
- 4 挿図の製図は上田保子、戸畑智恵子、前田みゆき、池田が行った。
- 5 写真撮影は遺構を池田が、遺物を主に平川が、一部池田が行った。
- 6 本書作成にあたっては先に挙名した他、井田まゆみの協力を得た。また、埋蔵文化財課の各氏をはじめ多くの方々からは調査、報告にあたり様々な御教示を頂いた。
- 7 本稿に関わる図面、写真、遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、保管される。
- 8 本文の執筆は、編集は池田が行った。また、大澤正己氏には鉄器、三次利一氏には胎土分析の調査報告を頂き、付論として掲載することができた。

### 女原上ノ谷製鉄址

- 1 本項は西区女原18-1において福岡市教育委員会が1993年度に実施した女原上ノ谷製鉄址第1次調査の報告である。明確な製鉄遺構は検出できなかったが、分布図に従い製鉄址としておく。
- 2 本稿で使用する方位は磁北である。
- 3 遺構、遺物の実測は池田祐司が行ない山口亨の援助を得た。
- 4 写真撮影は遺構を池田が、遺物を平川敬治が行った。
- 5 本稿に関わる図面、写真、遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、保管される。
- 6 本文の執筆、編集は池田が行った。また、大澤正己氏には鉄滓の調査報告を頂き付論として掲載することができた。



# 本文目次

第1章	立地と環境	1
第2章	徳永古墳群II群の調査	5
I	はじめに	5
1	調査に至る経緯	5
2	調査組織	5
II	調査報告	5
1	調査概要	5
2	I区の調査	9
(1)	6号墳	9
(2)	7号墳	16
(3)	8号墳	24
(4)	9号墳	29
(5)	26号墳	34
(6)	27号墳	38
(7)	28号墳	43
(8)	その他の遺物	47
(9)	土坑	48
(10)	石組状遺構	50
3	II区の調査	52
(1)	遺構と遺物	52
第3章	女原上ノ谷製鉄址の調査	55
I	はじめに	55
1	調査に至る経緯	55
2	調査組織	55
II	調査報告	55
1	調査概要	55
2	遺構と遺物	56
3	小結	60
第4章	おわりに	61
附編	1 徳永古墳群出土土器の蛍光X線分析	三辻利一 69
	2 女原上ノ谷遺跡出土鉄滓と徳永古墳群H群26号墳出土 三葉環頭人刀の金属学的調査	大澤正己 71

## 挿 図 目 次

Fig 1 周辺の遺跡	Fig 41 9号墳石室跡敷図 (1/40) .....32
Fig 2 徳永古墳群分布図	Fig 42 9号墳石室掘方実測図 (1/40) .....32
Fig 3 調査地点周辺図	Fig 43 9号墳遺物出土状況図 (1/40) .....32
Fig 4 調査前現況図 (1/400) ..... 6	Fig 44 9号墳出土遺物実測図1 (1/3) .....33
Fig 5 墳丘遺存状況図 (1/400) ..... 7	Fig 45 9号墳出土遺物実測図2 (1/2) .....34
Fig 6 6号墳墳丘遺存状況図 (1/200) ..... 9	Fig 46 26号墳墳丘土層断面図 (1/80) .....35
Fig 7 6号墳地山成形状況図 (1/200) ..... 9	Fig 47 26号墳石室実測図 (1/40) .....35
Fig 8 6号墳石室実測図 (1/40) .....10	Fig 48 26号墳閉塞状況図 (1/40) .....36
Fig 9 6号墳墳丘土層断面図 (1/80) .....11	Fig 49 26号墳石室跡敷図 (1/40) .....36
Fig 10 6号墳閉塞状況図 (1/40) .....12	Fig 50 26号墳石室掘方実測図 (1/40) .....36
Fig 11 6号墳石室跡敷図 (1/40) .....12	Fig 51 26号墳遺物出土状況図 (1/40) .....36
Fig 12 6号墳石室掘方実測図 (1/40) .....12	Fig 52 26号墳出土遺物実測図1 (1/3、1/2) .....37
Fig 13 6号墳遺物出土状況図 (1/40) .....13	Fig 53 27号墳墳丘遺存状況図 (1/200) .....38
Fig 14 6号墳出土遺物実測図1 (1/3、1/4) .....14	Fig 54 27号墳地山成形状況図 (1/200) .....38
Fig 15 6号墳出土遺物実測図2 (2/3、1/2) .....15	Fig 55 27号墳墳丘土層断面図 (1/80) .....39
Fig 16 7号墳墳丘遺存状況図 (1/200) .....16	Fig 56 27号墳石室実測図 (1/40) .....40
Fig 17 7号墳地山成形状況図 (1/200) .....16	Fig 57 27号墳石室跡敷図 (1/40) .....41
Fig 18 7号墳墳丘土層断面実測図 (1/80) .....17	Fig 58 27号墳遺物出土状況図 (1/40) .....41
Fig 19 7号墳石室実測図 (1/40) .....18	Fig 59 27号墳出土遺物実測図1 (1/3、2/3、1/2) .....42
Fig 20 7号墳閉塞状況図 (1/40) .....19	Fig 60 28号墳墳丘土層断面図 (1/80) .....43
Fig 21 7号墳石室跡敷図 (1/40) .....20	Fig 61 28号墳石室実測図 (1/40) .....44
Fig 22 7号墳石室掘方実測図 (1/40) .....20	Fig 62 28号墳閉塞状況図 (1/40) .....44
Fig 23 7号墳遺物出土状況図 (1/40) .....21	Fig 63 28号墳石室跡敷図 (1/40) .....44
Fig 24 7号墳出土遺物実測図1 (1/3) .....22	Fig 64 28号墳石室掘方実測図 (1/40) .....44
Fig 25 7号墳出土遺物実測図2 (1/3) .....23	Fig 65 28号墳遺物出土状況図 (1/40) .....44
Fig 26 6号墳出土遺物実測図3 (1/2) .....24	Fig 66 28号墳出土遺物実測図 (1/40) .....45
Fig 27 8、26、28号墳墳丘遺存状況図 (1/200) .....25	Fig 67 その他の遺物実測図 (1/1、1/3、1/2) .....46
Fig 28 8、26、28号墳地山成形状況図 (1/200) .....25	Fig 68 土坑実測図1 (1/40) .....47
Fig 29 8号墳墳丘土層断面図 (1/80) .....25	Fig 69 土坑実測図2 (1/40) .....48
Fig 30 8号墳石室実測図 (1/40) .....26	Fig 70 土坑出土遺物実測図 (1/3) .....49
Fig 31 8号墳閉塞状況図 (1/40) .....26	Fig 71 石造遺構実測図 (1/40) .....51
Fig 32 8号墳遺物出土状況図 (1/40) .....27	Fig 72 II区全体図 (1/200) .....52
Fig 33 8号墳石室跡敷図 (1/40) .....27	Fig 73 土坑実測図 (1/40) .....53
Fig 34 8号墳石室掘方実測図 (1/40) .....27	Fig 74 土坑出土遺物実測図 (1/3) .....54
Fig 35 8号墳出土遺物実測図1 (1/3) .....27	Fig 75 女原上ノ谷1次調査全体図 (1/200) .....56
Fig 36 8号墳出土遺物実測図2 (1/3、1/2) .....28	Fig 76 SK001、003、009実測図 (1/60、1/40) .....57
Fig 37 9号墳墳丘遺存状況図 (1/200) .....29	Fig 77 出土遺物実測図 (1/3) .....58
Fig 38 9号墳地山成形状況図 (1/200) .....29	Fig 78 SK002、004、005、007実測図 (1/60、1/40) .....59
Fig 39 9号墳墳丘土層断面図 (1/80) .....30	Fig 79 SK008実測図 (1/40) .....60
Fig 40 9号墳石室実測図 (1/40) .....31	

## 図 版 目 次

- P1.1 (1) 調査区全景 (南から) (2) 調査区全景
- P1.2 (1) 調査区遠景 (南西から) (2) 調査前 (南から)  
(3) 8、9、26、28号墳 (西から) (4) 調査区全景 (北から)
- P1.3 (1) 26号墳付近墳丘依存状況 (北西から) (2) 26号墳付近地山成形成面 (北西から)  
(3) 8号墳付近墳丘依存状況 (南西から) (4) 8号墳付近地山成形成面 (南西から)  
(5) 調査終了後26号墳付近 (北から) (6) 調査終了後8号墳付近 (南から)
- P1.4 (1) 6号墳地山成形成面 (西から) (2) 6号墳墳丘依存状況 (東西から)
- P1.5 (1) 6号墳閉塞状況 (南から) (2) 6号墳閉塞板石 (南から)  
(3) 6号墳開口状況 (南から) (4) 6号墳石室から (5) 6号墳地山成形成面 (南から)
- P1.6 (1) 6号墳A群 (南から) (2) 6号墳左側壁 (東から)  
(3) 6号墳aトレンチ土層 (北から) (4) 奥壁 (南から) (5) 6号墳腰石 (南から)  
(6) 石室掘方 (南から)
- P1.7 (1) 7号墳墳丘依存状況 (南東から) (2) 7号墳地山成形成面 (南西から)
- P1.8 (1) 7号墳石室跡 (東から) (2) 7号墳閉塞状況 (南東から)  
(3) 7号墳閉塞状況 (北から) (4) 7号墳石室開口状況 (北から)
- P1.9 (1) 7号墳遺物出土状況 (北東から) (2) 7号墳遺物出土状況 (北から)  
(3) 7号墳C群 (北から) (4) 7号墳A群 (東から) (5) 7号墳D群 (北から)  
(6) 7号墳F群 (北から) (7) 7号墳G群 (南から) (8) 7号墳I群 (南から)
- P1.10 (1) 7号墳奥壁 (2) 6、7号墳地山成形成面 (西から)  
(3) 7号墳墓道横断上層 (北から) (4) 7号墳墓道横断下層 (北から)  
(5) 7号墳Cトレンチ土層 (北から) (6) 7号墳腰石 (北から)  
(7) 7号墳南東隅腰石 (南東から) (8) 7号墳石室掘方 (南から)
- P1.11 (1) 8号墳墳丘依存状況 (北東から) (2) 8号墳地山成形成面 (北東から)
- P1.12 (1) 8号墳盛土内の礎 (北東から) (2) 8号墳羨道石壁  
(3) 8号墳羨道床面 (北西から)  
(4) 8号墳A群 (南東から)
- P1.13 (1) 8号墳石室跡 (南から) (2) 8号墳閉塞状況 (南西から)  
(3) 8号墳石室 (西から) (4) 8号墳板石閉塞状況 (西から)
- P1.14 (1) 9号墳墳丘依存状況 (東から) (2) 9号墳地山成形成面 (東から)
- P1.15 (1) 9号墳墳丘依存状況 (西から) (2) 9号墳地山成形成面 (西から)  
(3) 9号墳Aトレンチ土層 (西から) (4) 9号墳Bトレンチ土層 (南から)
- P1.16 (1) 9号墳Dトレンチ上層 (東から) (2) 9号墳周溝状遺構 (北東から)  
(3) 石室左側壁 (4) 石室右側壁 (5) 9号墳B群 (西から)  
(6) 9号墳A群 (南東から) (7) 9号墳石室腰石 (北から)  
(8) 9号墳石室掘方 (東から)
- P1.17 (1) 26号墳墳丘依存状況 (東から) (2) 26号墳地山成形成面 (東から)
- P1.18 (1) 26号墳地山成形成面 (西から) (2) 26号墳石室 (南から)

- P1.18 (3) 26号墳石室 (東から) (4) 26号墳入口部 (西から)
- P1.19 (1) 26号墳遺物出土状況 (西から) (2) 26号墳遺物出土状況 (北西から)  
(3) 26号墳閉塞状立石 (西から) (4) 26号墳腰石 (南から)  
(5) 26号墳石室掘方 (南から) (6) 26号墳入口部
- P1.20 (1) 27号墳墳丘依存状況 (北から) (2) 27号墳奥壁 (西から)
- P1.21 (1) 27号墳内護列石出土状況 (西から) (2) 27号墳石室 (北から)  
(3) 27号墳墳丘依存状況 (西から) (4) 27号墳内護列石 (北から)  
(5) 27号墳Aトレンチ土層 (西から) (6) 27号墳石室掘方作業風景 (南から)
- P1.22 (1) 28号墳墳丘依存状況 (北東から) (2) 28号墳石室 (東から)
- P1.23 (1) 28号墳腰石 (北から) (2) 28号墳墳丘依存状況 (東から)  
(3) 28号墳B群 (東から) (4) 28号墳B群 (南から)  
(5) 28号墳奥壁 (6) 28号墳石室掘方 (東から)
- P1.24 (1) SK001 (西から) (2) SK001 土層 (西から) (3) SK014 (北から)  
(4) SK015 (東から)
- P1.25 (1) SK010 (西から) (2) SK011 (南から) (3) SK016 (南から)  
(4) SK016 土層 (西から) (5) SK017 (北東から) (6) SK026 (西から)  
(7) SK021 (南から) (8) SK021 (北から)
- P1.26 (1) SX003、004 (西から) (2) SX005 (西から) (3) SX006 (西から)  
(4) SX007 (西から) (5) SX008 (西から)  
(6) SX009 (北西から) (7) SX026 (西から)
- P1.27 (1) II区全景 (南から) (2) II区全景 (西から) (3) SK023 (西から)  
(4) SK025 (北から)
- P1.28 出土遺物 1
- P1.29 出土遺物 2
- P1.30 出土遺物 3
- P1.31 出土遺物 4
- P1.32 出土遺物 5
- P1.33 出土遺物 6
- P1.34 出土遺物 7
- P1.35 出土遺物 8
- P1.36 (1) 調査前 (北西から) (2) 調査区全景 (北から)
- P1.37 (1) 調査区全景 (北西から) (2) SK001 (南から) (3) SK005 (西から)  
(4) SK007 (南から) (5) SK009 (北から) (6) SK009 上層 (北から)
- P1.38 出土遺物

## 第1章 立地と環境

徳永古墳群、女原上ノ谷製鉄址は、糸島平野の北東端に小さく開けた今宿平野の西端の丘陵に位置する。この今宿平野は横浜一長垂間の弓状砂丘と、南に位置する標高416mの高祖山麓の間に形成された沿海性の小平野である。東は叶嶽一長垂丘陵で早良平野と画され西は周船寺川から瑞梅川河口を端とる東西約3kmの範囲である。平野東部は叶嶽と高祖山の間に扇状地が発達し扇端が海岸砂丘近くまで延びる。西は今宿砂丘の後背湿地で、沖積地部分と江戸時代以降に干拓されたところがある。現在は広い水田地帯であるが、かつての可耕地は谷間の非常に狭いものであったと考えられる。背後の南側には早良一佐賀花崗岩を母岩とする高祖山から北流する小河川の開折により八手状に丘陵尾根が派生し入り組んだ谷地形が展開している。この丘陵上には13から15群に分かれる総数320基以上の後期群集墳と12基の前方後円墳が造営されている。徳永古墳群はこれらのこれら群の西よりに位置し若八幡、山ノ鼻1、2号墳といった前方後円墳と同じ丘陵上にある。また、高祖山、叶嶽山麓斜面には20箇所の鉄滓散布地が知られ、製鉄遺跡として6箇所が登録されている。女原上ノ谷製鉄址はその1つで徳永古墳群H群とは100m上で分岐した丘陵端の斜面に位置する。

今宿地区では、今宿バイパス、園場整備、宅地開発に伴う埋蔵文化財の調査が急増している。縄文時代以前では、今山遺跡表採の三稜先頭器<sup>10)</sup>、千里シビナ遺跡<sup>11)</sup>出土の後晩期の遺物等が知られていた。近年、飯氏遺跡<sup>12)</sup>、周船寺遺跡等<sup>13)</sup>でやはり後晩期資料の増加が見られるがまとまった量ではない。刻日突帯文期も千里シビナ遺跡、大塚遺跡<sup>14)</sup>、今宿遺跡<sup>15)</sup>等で見られる。

弥生時代では、今宿遺跡で板付1式、前期からの甕棺墓が見られる。前期末からは今山の石斧の生産が本格的に始まり、砂丘上には80基に近かったといわれる甕棺墓が設けられ、遺物は中期になって増加し石斧生産工人の定住的活動が指摘されている。扇状地部では、近年、薮崎遺跡<sup>16)</sup>で中期初頭～前葉の住居址が検出された。青木遺跡<sup>17)</sup>では円形住居、井戸、土坑が検出されている。さらに今宿五郎江遺跡<sup>18)</sup>では中期後半から後期に継続し、遺跡西端では中期末まで遡る可能性が高い掘立柱建物で構成される集落とそれを画すると思われる溝が検出されている。また、後期前半から中頃には環濠集落が成立している。小銅鐸のほか鋤、鍬の農耕具や鋤、芥柄、手網等の木製品や漁労具が多数出土している。これに対し、小規模な集落は丘陵斜面に点在し、大塚遺跡高田地区<sup>19)</sup>では後期後半から古墳時代前期の竪穴住居が30棟ほどが検出されている。また、飯氏地区<sup>20)</sup>では前期末から後期にかけての甕棺墓が出土し7号甕棺からは雲雷文内行花文鏡が出土している。

古墳時代では、高祖山北麓に沿って前方後円墳12基と、300を上まわる群集墳が集中する。前方後円墳のうち、4世紀中ごろの山ノ鼻1号墳から若八幡宮一鶴崎一丸隈山一山ノ鼻2号一今宿大塚一下谷、6世紀前半の飯氏二塚と首長墓の系譜をたどることができる。これにたいして、恩納原C14号墳、上谷B1号墳、木村A1号墳、飯氏B14号墳は群集墳に混在して分布し、6世紀後半に築造されたものであり先の首長墓の系譜とは別の階層が想定されている<sup>21)</sup>。群集墳は福岡市の遺跡分布地図によれば東から飯氏、徳永、女原、新開、谷上、相原、木村古墳群が高祖山の山麓の丘陵上に分布し、叶嶽から西北に派生する丘陵上に鶴崎古墳群が分布し、これまで鶴崎、相原、徳永古墳群で調査が行われている。

近年、古墳以外の遺構も明らかになりつつある。女原遺跡<sup>22)</sup>では5世紀前半の竪穴住居4棟、土坑、溝、6世紀～7世紀前半代の上坑、包含層を徳永遺跡<sup>23)</sup>Ⅲ、Ⅳ区では6世紀後半から7世紀前半の竪穴住居、土坑等の集落が検出され、特に後者は徳永古墳群と深い関わりがあるものと思われる。飯氏遺跡では弥生時代終末から5世紀にかけての集落が検出されている。



Fig 1 周辺の遺跡 (1/2500)

- |              |               |               |               |               |               |               |
|--------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 1. 飯氏二塚古墳    | 11. 本村 A1 号墳  | 21. 飯氏古墳群 E 群 | 31. 女塚古墳群 C 群 | 41. 谷上古墳群 C 群 | 51. 本村古墳群 A 群 | 61. 相原製鉄 C 遺跡 |
| 2. 飯氏 B14 号墳 | 12. 鶴崎古墳      | 22. * I 群     | 32. * D 群     | 42. 相原古墳群 D 群 | 52. 新開窪跡      | 62. 観山製鉄遺跡    |
| 3. 丸腰山古墳     | 13. 飯氏(党塚)古墳  | 23. * G 群     | 33. * E 群     | 43. * B 群     | 53. 清原古墳群 A 群 | 63. 堀ノ内製鉄遺跡   |
| 4. 山ノ鼻 2 号墳  | 14. 山崎古墳      | 24. 恵木古墳群 A 群 | 34. 新開古墳群 B 群 | 44. * A 群     | 54. 龜崎古墳群 A 群 | 64. ショウガ谷製鉄遺跡 |
| 5. 山ノ鼻 1 号墳  | 15. 飯氏古墳群 A 群 | 25. * C 群     | 35. * C 群     | 45. * C 群     | 55. * B 群     | 65. 鶴崎製鉄 A 遺跡 |
| 6. 若八峰宮古墳    | 16. * J 群     | 26. * D 群     | 36. * D 群     | 46. * E 群     | 56. 焼山古墳群 A 群 | 66. * B 遺跡    |
| 7. 下谷古墳      | 17. * B 群     | 27. * G 群     | 37. * E 群     | 47. * D 群     | 57. * B 群     | 67. 千早深谷製鉄跡   |
| 8. 女塚 C14 号墳 | 18. * F 群     | 28. * H 群     | 38. * F 群     | 48. * G 群     | 58. 新開製鉄遺跡    | 68. 女塚上ノ谷遺跡   |
| 9. 今宿大塚古墳    | 19. * C 群     | 29. 女塚古墳群 A 群 | 39. 谷上古墳群 A 群 | 49. * H 群     | 59. 相原製鉄 A 遺跡 |               |
| 10. 谷上 B1 号墳 | 20. * D 群     | 30. * H 群     | 40. * B 群     | 50. * J 群     | 60. * B 遺跡    |               |



●は『福岡市文化財分布地図（西部Ⅱ）』 △は『徳永古墳群』1985にのみ記載

Fig 2 徳永古墳群分布図 (1/8000)



Fig 3 調査地点 (1/1500)

また生産遺跡として、鉄、塩、須恵器の生産が活発に行われていたことが知られている。製鉄遺跡が高祖山麓に鉄滓散布地として注目されている。今宿は低チタンの良質の砂鉄を産出する花崗岩地帯であり、鉄滓は相原<sup>(9)</sup>、徳永古墳<sup>(10)</sup>群で6世紀後半の石室から出土している。この時期に製鉄遺構の存在が予想されるが今宿検出に至っていない。今山遺跡では7世紀後半の土器の中から鉄滓が出土し、大塚遺跡では12世紀前半の製鉄遺構が検出されている。また今宿遺跡では相当量の製塩土器が出土しており、布留期に土器製塩が行われていたことが確認されている。須恵器窯としては新開窯があげられる。窯跡規模、存続期間等ははっきりしていないが生産の開始が第Ⅰ式期に通ることが明らかになっている。

注)

- |  |  |
|--|--|
| <p>(1) 今山遺跡調査班『今山遺跡現地説明会パンフレット』1984</p> <p>(2) 田中寿夫他『千尾シビナ遺跡』福岡市教育委員会1982</p> <p>(3) 松村道博編『飯氏遺跡群Ⅰ』福岡市教育委員会1993</p> <p>(4) 1984福岡市教育委員会調査</p> <p>(5) 古武学編『大塚遺跡・女原遺跡』福岡市教育委員会</p> <p>(6) 折尾学編『今山・今宿遺跡』福岡市教育委員会1981</p> <p>井澤洋一編『今宿遺跡』福岡市教育委員会1994</p> <p>(7) 長家伸『動先遺跡Ⅰ』福岡市教育委員会1994</p> <p>(8) 佐藤一郎編『青木遺跡』福岡市教育委員会1987</p> <p>小林義彦『青木遺跡Ⅱ』福岡市教育委員会1993</p> <p>(9) 小畑弘巳『今宿五郎江遺跡』福岡市教育委員会1986</p> <p>二宮忠司編『今宿五郎江遺跡』福岡市教育委員会1988</p> | <p>(10) 『今宿高田遺跡』『今宿遺跡関係埋蔵文化財調査報告』第2集 福岡県教育委員会1971</p> <p>(11) 松村道博編『飯氏遺跡群Ⅱ』福岡市教育委員会1994</p> <p>(12) 梅沢一男編『九張山古墳』福岡市教育委員会1986</p> <p>(13) 1994年福岡市教育委員会調査</p> <p>(14) 『相原古墳群』福岡市教育委員会1976</p> <p>田中寿夫編『相原古墳群Ⅱ』福岡市教育委員会1993</p> <p>(15) 田中寿夫編『徳永アラタ古墳群』福岡市教育委員会1980</p> <p>下矢信行編『徳永古墳群』徳永古墳群調査会1985</p> <p>(16) 松村道博編『徳永遺跡Ⅱ』福岡市教育委員会1992</p> |
|--|--|

## 第2章 徳永古墳群H群2次調査の記録

### I はじめに

#### 1 調査に至る経緯

徳永古墳群は1970年に県教委によって「アラタ古墳群」として確認され、1978年の市教委の分布調査の際「徳永古墳群H群」として登録された周知の遺跡である。

平成2年、西区女原377番に武石勝久氏による植林に伴う造成が計画され、埋蔵文化財課に埋蔵文化財事前調査願が提出された。埋蔵文化財課では、この地が徳永古墳群H群に位置することから現地踏査を行ったところ古墳4基が確認され、また新たな古墳の存在も予想された。これによって、市教委は武石氏との間で、協議を持ったが造成による古墳の破壊は避けられず、発掘調査による記録保存の処置をとることとなった。調査は平成3年9月9日より、途中中断を挟んで平成4年3月3日まで行った。

#### 2 調査組織

調査委託 武石勝久

調査主体 福岡市教育委員会教育長 尾花剛

調査総括 文化財部長 後藤直

埋蔵文化財課長 折尾学

埋蔵文化財課第1係長 飛高憲雄(前任) 横山邦嗣

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 中山昭則(前任) 内野保基

事前審査 埋蔵文化財課第1係 荒牧宏行

調査担当 埋蔵文化財課第1係 池田祐司

調査作業 池弘子 因ヨシ子 大場憲子 鬼塚正之 小金丸ミネ子 小柳和子 倉光アヤ子 柴田シズノ 末松昭子 末松孝枝 末松タツエ 末松信子 末松美佐子 権宏子 岳美保子 當早苗 徳重コマキ 徳永千鶴子 徳重忠子 中村昭市 西田マキエ 鍋山千鶴子 間セツ子 波多江喜代子 平野直枝 福原 古井モモエ 真鍋キミエ 三苫ヒサノ 森友ナカ 結城千賀子 結城信子 山本靖人

整理作業 上田保子、前田みゆき

調査協力 金載昊 趙胤宰 李元光 裴聖煥

### II 調査報告

#### 1. 調査の概要

**立地とこれまでの調査** 徳永古墳群は高祖山から派生した八手状の丘陵のうち、現在の徳永の集落の西よりの狭い谷あいを含み丘陵上に位置し、AからH群からなる。そのうちAからG群までは飯氏との境をなす大きな丘陵から東側斜面に延びる文尾根上に1基から3基ごとくに散在する。これに対しH群は、東側の瘦せ尾根上の標高30mから85mのうち、やや傾斜の緩くなった個所に2群ほどのまとまりをなして28基が営まれている。さらにこの瘦せ尾根は1次調査地点付近でやや北に向きをかえて大小の起伏を繰り返しながら続き、下の谷、若八幡古墳、山の鼻1、2号墳等の前方後円墳が営まれた丘陵でもある。

徳永古墳群ではこれまで2度の調査が行われている。1975、6年には九州大学を主体とする調査会により古墳3基が調査されている。そのうち1、2号墳は6世紀後半とされている。1979年には福岡

市教委によりH群のうち下半の7基が徳永アラタ古墳群として調査され、4基が6世紀後半、1基が7世紀と批定されている。また、焼土坑を含む13基の土坑も古墳の周囲から検出されている。これらの報告書では調査した古墳に番号が与えてあるが、その後、福岡市教委により遺跡分布図が1980年に発行され、古墳群、番号についても整理がなされた。その結果、調査会による調査は、1、2号墳がD群の2、1号墳、3号墳はE群、市教委によるアラタ古墳群はH群となり、番号も再編されている。また、調査会の報告では独自に分布調査を行っており、詳細な報告がなされている。そのなかには市教委の分布調査時には消滅したり、破損を受けたものがある。これらの対象を Tab. 1 に示した。

今回の調査地点には、分布地図によると、6号から9号墳が知られていた。H群のうち南半の北よりの地域にあたる。北半との間には顕著な鞍部で隔たりのある。もともと狭く両側に急に落ちる尾根上に古墳が営まれていたが、調査区の西側には1975年以降に築かれた道路により大きく削平され、古墳も大小削られている。9号墳下の鞍部から斜面にかかる箇所からは尾根筋に向かって古墳の東側をかすめて作業路が掘削されており墳丘を一部破壊している。また、東側の谷部に至る斜面も対象地ではあったが、表面観察では古墳を確認できず、今回の造成もおよばないため踏査に止めた。また、伐採、表土剥ぎの過程で新たに3基が検出され、分布地図の末尾の番号に続けて26、27、28号墳とした。

**調査の方法と経過** 調査は墳丘周辺の伐採からはじめ、現況測量に平行して盗掘坑から石室内部を掘り下げを行った。またこの時点で表土上に露出した石組遺構の検出、記録を行った。次いで墳丘トレンチ掘削、墳丘依存状況、地山整形面の検出、閉塞状況、墓道等の外部施設、石室掘方の検出、記録を行った。伐採の際にあきらかとなった2基は26、27号墳とした。表土の掘削は、墳丘トレンチの観察の後、墳丘については人力で行ったが、それ以外については重

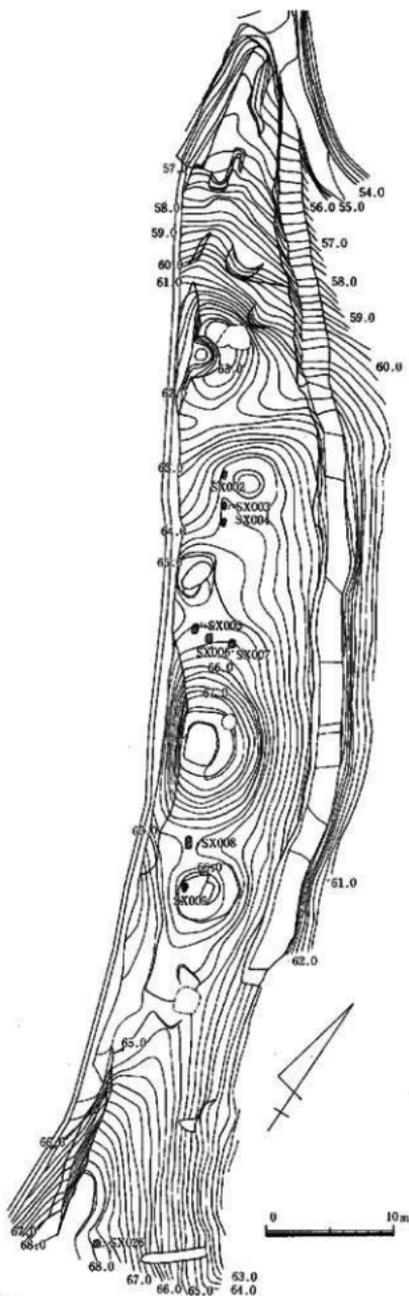


Fig 4 調査前現況図 (1/400)

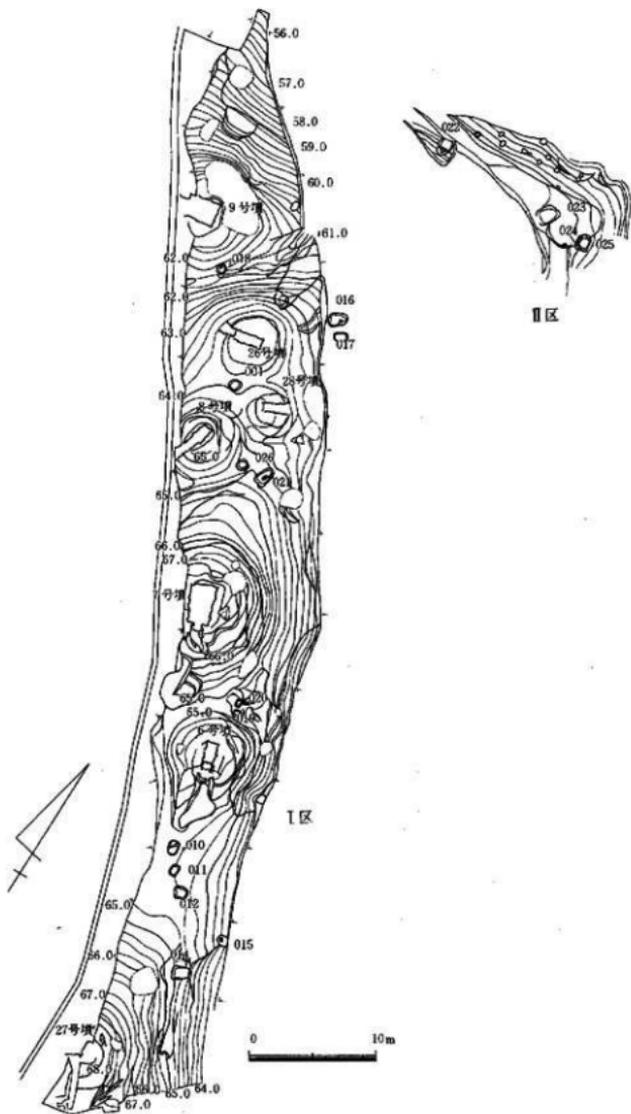


Fig 5 墳丘遺存状況図 (1/400)

機を使用した個所もある。その際、現況では緩斜面であった部分で石室を検出し、28号墳とした。また、現況測量、墳丘依存状況、地山整形面については25cm毎の等高線による測量図を作成し、さらに8号墳から26号墳の墳丘依存状況については、墳丘の高低差が小さいため10cm毎の等高線をいれた。(Fig. 27) 古墳は石室等の図面、写真が終了した後、27号墳を除いて石を取り除き石室掘方の掘削状況について観察を行った。

トレンチは、石室主軸方向とそれに直交する横軸を玄室中心部で設定し、石室に向かって時計回りに左からAトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチとし、それぞれの壁面で土層断面図を作成した。また、墳丘の調査にあたってはトレンチ間を石室に向かって左より、1区～4区とし、遺物の取り上げを行った。図を例言に掲載している。

また、調査も半ばにさしかかった頃、旧地権者の三島正氏より進入路掘削の際、炉跡らしきものがあつたとの話を聞き、その地点にトレンチを開けたところ、焼土坑を検出した。このため周辺を広げ調査を行った。

本報告では記述の都合上、古墳が主に分布する尾根上の調査区をⅠ区、新たに開けた調査区をⅡ区とした。また、古墳以外の遺構はⅠ区、Ⅱ区を通じて001より通し番号を付けた。

Tab. 1 徳永古墳群 古墳番号対象表

- ・ 1は1984年「福岡市文化財分布地図」、2は下條信行他'85、3は田中寿夫'80記載の番号を示す。
- ・ 備考覧の「消滅」はいずれかの分布調査時に確認されていたものが未調査のまま消滅しているもの。「調査」は「75」が下條他'85、「79」が田中寿夫'80、「92」が今回報告のものである。
- ・ ( ) は記述からは、いずれの古墳か判断し難い。

群	1	2	3	備 考	群	1	2	3	備 考	群	1	2	3	備 考
A	1				H	6	15		調査'92	H	23	—		
	2					7	16		◇		24	—		
B	1				8	(17)			◇	25	—			
	2				9	18			◇	26	—			調査'92
C	1	32			10	19				27	14			◇
	2	31			11	23				28	—			◇
D	1	1		調査'75	12	20			半壊			4		消滅
	2	2		◇	13	21			半壊			5		◇
E	1	3		◇	14	22			消滅			7		消滅
F	1				15	1	6		調査'2			8		◇
G	1	6			16	(25)	5		◇			9		◇
	2				17	(26)	4		調査'79			10		?
	3				18	(27)	3		◇			11		
H	1	11		消滅	19	28	2		◇			13		?
	2				20		7		◇			24		消滅
	3	12			21	29	1		◇					
	4				22	30								
	5													

1980 田中寿夫 「徳永アラク古墳群」福岡市教育委員会

1984 「福岡市文化財分布地図(西部)」福岡市教育委員会

1985 下條信行他「徳永古墳群」徳永古墳群調査会

## 2. I区の調査

### (1) 6号墳

#### 1) 位置と現状

北に向かって落ちる尾根の傾斜が弱まり鞍部を形成する。鞍部からは7号墳が築かれる小さな高まりへの登り勾配となる。6号墳はこの鞍部からの登り勾配の部分に位置する。石室は盗掘を受け天井石が抜かれている。墳丘は西側の裾部が道路工事により、東側は進入路により削平を受けていた。1975年の踏査の時には15号墳とされ、報告書には石室の略測図が掲載されている。その図と現況を比べると石室の依存状況に変化はない。本調査中では石室の残りが最も古い古墳である。墳丘のI区、II区には石組の遺構 SX007、008があった。

#### 2) 墳丘

**地山整形** 尾根筋に併せて石室を構築し、前述した鞍部に向かって開口する。墳丘の上層を見る限りでは旧地表面は残っていない。I区からIV区にわたって半径約2mを削り、平坦面をつくる。7号墳との間はかなり勾配があったと思われるが、周溝状のくぼみにより隔たれている。両墳が築造された時点で掘削し、6号墳の地山成形時にはII区、III区において墳裾を削出している。I区は岩脈が走り花崗岩の風化土壌が露出するが、成形面は直線的で縦長な地形を成し、不自然感がある。II区は弧状に墳裾を削出する。墓道部も地山を掘削して形成するが、どの段階で掘削が行われたか明らかにならなかった。

**墳丘** 崩壊、流出の度合いが大きい。残存する盛り土は削平面をほぼ基底とする。盛り土は地山と同じ花崗岩の風化土を主に用いており地山との区別さえも困難をともなった。まず最初に石室の裏込めを兼ねた盛り土を行う。この段階の層は均一な土が埋められよく締まっている。掘方から上部は盛り土の細かい単位が観察される。石室の構築過程と関わりがあるものと考えられる。Bトレンチでは15層から27層が盛り土と考えられ、8、9層は盗掘時等の流出土と思われる。墳丘の現存最高部は、基底面より0.6m石室基底より1.4mを測る。側壁はさらに数cmほど残っておりさらに0.5m以上の盛り土が築かれていたものと思われる。

墳丘の裾は南北が北側の直線部をいれると19mの楕円形、弧を描く部分から推定すると14m程の円形を成す。東西は東側が削平を受けるが14m程度となる。14m前後の円形の墳丘に墓道がつくと考えた方が自然であろう。

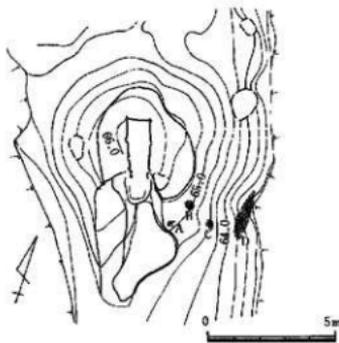


Fig 6 6号墳墳丘遺存状況図 (1/200)

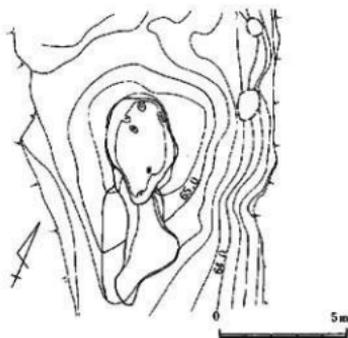


Fig 7 6号墳地山成形状況図 (1/200)

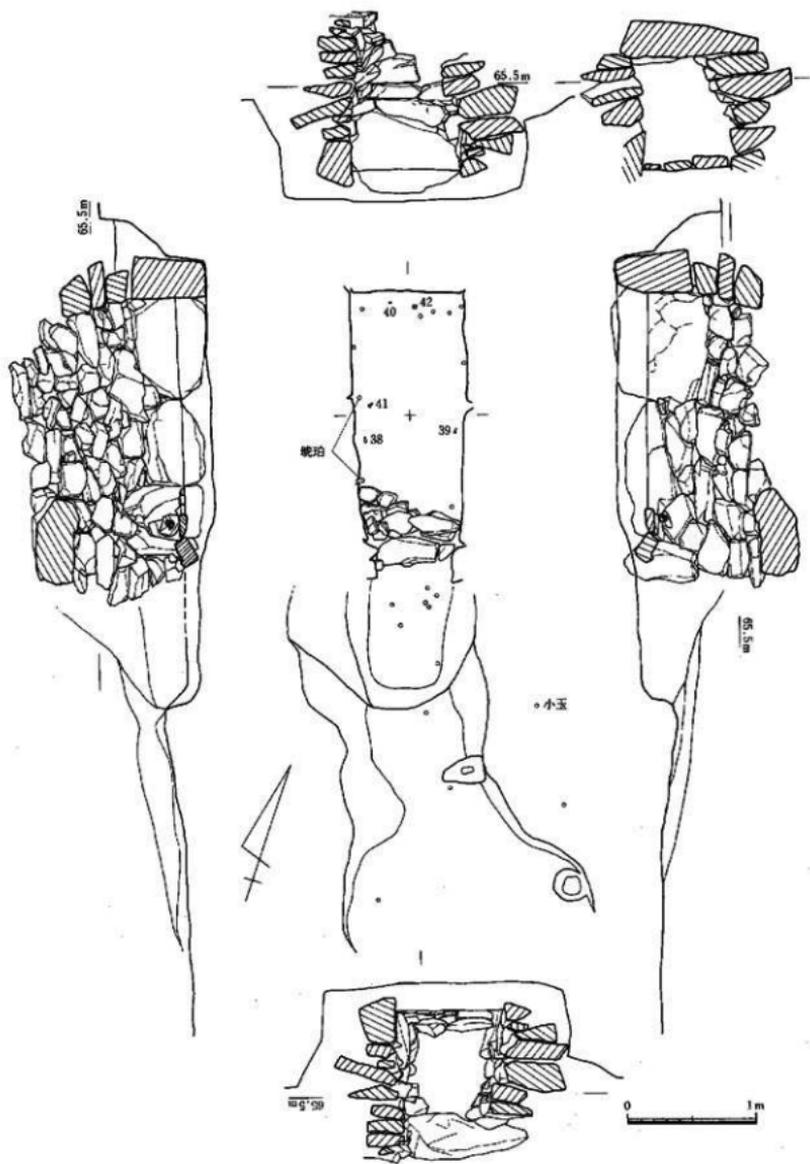


Fig 8 6号填石室实测图 (1/40)

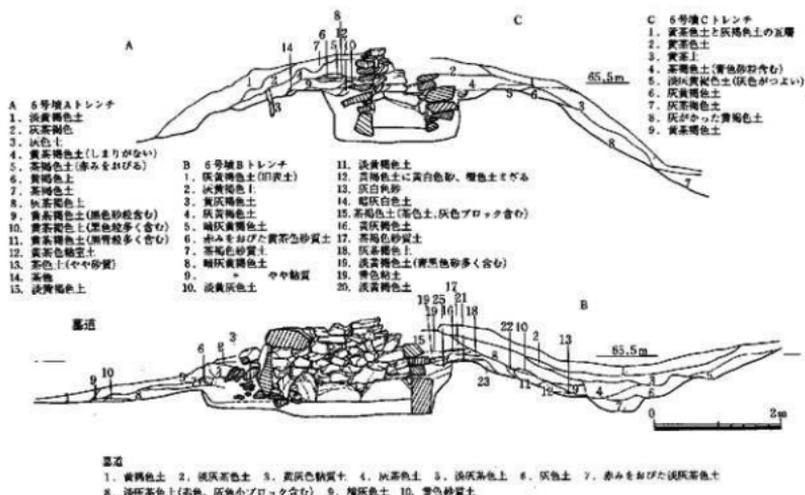


Fig 9 6号墳墳丘土層断面図 (1/80)

### 3) 石室

本墳の埋葬施設は主軸をN-20°-Wにとり尾根の山側に向かって開口する両袖単室の横穴式石室である。石室は玄室部の天井石、側壁と奥壁の上部を失っている。

石室は長方形のプランのがわずかにすぼまりながら入口部に至る。入口部側壁の端より20cm程玄室側に仕切石を置き、それを根石にして閉塞施設が見られる。石室全長は右壁で2.33m、左壁で2.4mを測る。石材は花崗岩で、転石、割石が使用されている。

**石室堀方** 地山整形で得られた高まり上に尾根筋に長軸を持つ不整形楕円形を案照し、墓道部が張り出す。部分的にくぼみがみられるが石の重量によると思われる。墓道は玄室部との間に20cm強の段を形成し、玄室入口部は床面を同じにする。堀方は急で高さ80cmを測る。稜をもって傾斜が変わる部分があるが高さは一定していない。玄室の奥壁と入口部では腰石が堀方にいっばいに置かれるのに対し、側壁部では余裕がある。基底面は面は仕切石付近から入口部へ緩やかに上がる。玄室部は入口部を測って長さ3.83m、幅は最大で2.83mを測る。

**玄室** 側壁は入口部まで直線的だが、仕切石の両側に縦長の石をたて、わずかに内側に入る。袖を意識したと思われる。玄室長は奥壁から仕切石までが1.95m、奥幅0.9m、前幅0.72mを測る。左壁長は4.05m、右壁長は4.03mを測る。腰石はいずれも大きな石を使い、奥壁は幅85cm、高さ7cm、厚さ35cmの大きめの石を1つ置く。側壁は右に2石、左に3石を配す。奥壁よりの腰石は両側共に奥壁と同じ規模を有す。袖よりの腰石は高さ40cmで奥より低い。腰石より上は、奥壁、側壁奥壁寄りには60cmから40cm大の横長の礫を持ち送る。側壁袖寄りには20cmから30cm大と小さ目である。奥壁の両コーナーは2段目から側壁から斜めに共有した礫を重ねる。天井石は入口部に長さ1.14m、幅0.65m、厚さ0.3mの石を仕切石から0.83mの高さに残るのみである。玄室部の側壁はこの天井石の上にさらに重ね、床面からの高さは1.3から1.7m程度であったと思われる。

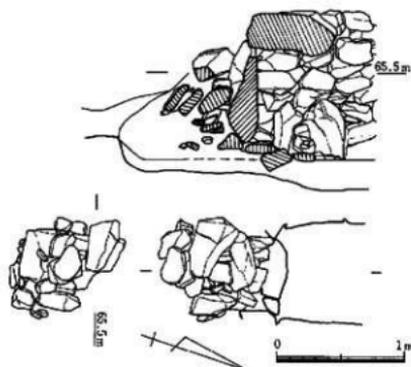


Fig 10 6号墳閉塞状況図 (1/40)

縦、横断面を切って上層観察を行ったが、顕著な不整合は見られない。3層から上は閉塞石とかみ合っており最終閉塞時に埋められたものと考えられる。そうすると墓抗の大部分が埋まる事になる。4層は閉塞石の下にあたり、板状の閉塞石の下に小石がかみ、上面でガラス小玉が出土した。最低1度の追葬が行われた事が判る。

#### 4) 遺物出土状況

玄室からはほとんど遺物の出土はなく、追葬、盗掘時に遺物は抜かれたものと思われる。床面直上

入口部は両袖で、袖石の高さ0.6mを測るが幅は0.3mと縦長で、両袖間は0.47mを測る。袖石の外は左側壁側に20から30cm大の石を1列積む。

床は堀方に20cmほどの土を盛り、敷石を詰めたと考えられる。

**閉塞施設 前提部 墓道** 入口部に密着して閉塞施設が存在する。長さ0.75m、幅0.5m、厚さ0.2mの板状の石を天井に立てかけ入口をほぼ密閉する。さらにその外側には、下部に土を盛った後30cm大の石で覆って構築している。

墓道は墓抗から連続して南へ延びる。長さ2.4mが確認できた。断面は浅い皿を呈し、幅1.07mから2mを測り外へ広

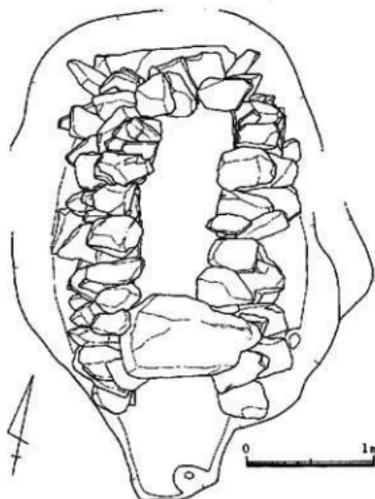


Fig 11 6号墳石室跡断面図 (1/40)

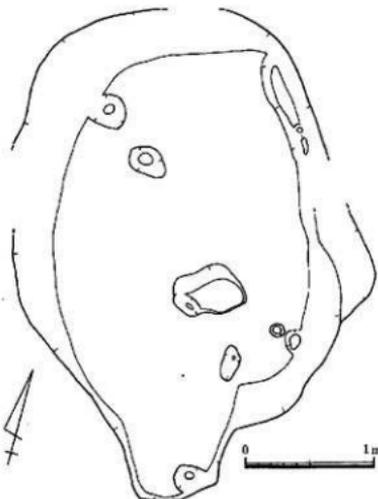


Fig 12 6号墳石室掘方実測図 (1/40)

でガラス小玉、馬具等の鉄片が出土している。小玉は奥壁部にやや固まったものが現位置に近いと推測される。13～24のうち13から15は床面近くの土の水洗により検出し、16から22は床面での検出である。24の1点が土玉で他の10点はガラス製である。12の勾玉は入口部の床から40cmほど浮いて出土した。盗掘時に動いたものが再度石室内に入ったものか。鉄片はいずれも細かな破片であり動いている。この他琥珀片が出土している (PI 28)。土器の出土はない。

墓道と閉塞施設の下からは先述したように最下層より小玉24から37が出土した。37は土玉で他はガラス製である。玄室内のものが追葬時の掻き出しにより墓道全体に散ったものと思われる (Fig 8)。上部からは須恵器の杯1と土師器の高杯2が出土している。

墳丘IV区からはややまとまった遺物の出土を見た。A群は前底部すぐよこにⅢb期の須恵器の蓋杯が2セット並んでいた。左側のセット3、4は返りを持つ器形のものゝ蓋になり、杯は直口の器形を持つ。これに対し右側のセット5、6は逆になっていた。中には何も残っていない。B、C、D群は主に須恵器の甕11、12が散乱したもので、破砕したものが流れおちたと思われる。C群に口縁部等が集まっている。他に高杯等 (7～9) が出土している。

1は杯で返りの部分が欠ける。底の2/3をヘラ削りしている。焼きがあまり、淡い褐色を呈す。2は土師器の高杯で脚部内面に刷毛目調整が残る。以下須恵器である。3は意識的かは判らないが受け部の両端が3.5cmずつ欠ける。内面には粘土巻き上げ痕が見られる。また、受け部に重ね焼きの痕跡がある。4とは大きさは合うが嘴み合わない。3は外面の回転なでが強く、中位にくほみができる。3、4とも完存品で1/2強に回転ヘラ削り調整を残す。5は6の上で割れた状態で出土した。3よりも回転ナデが強いが、ほぼ同じ大きさである。6は浅めでシャープな感がある。重ね焼きの痕跡が

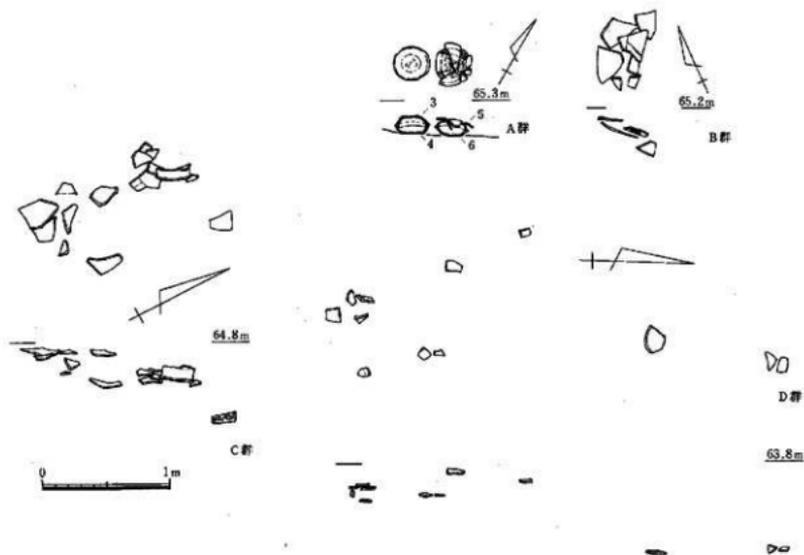


Fig 13 6号墳遺物出土状況図 (1/40)

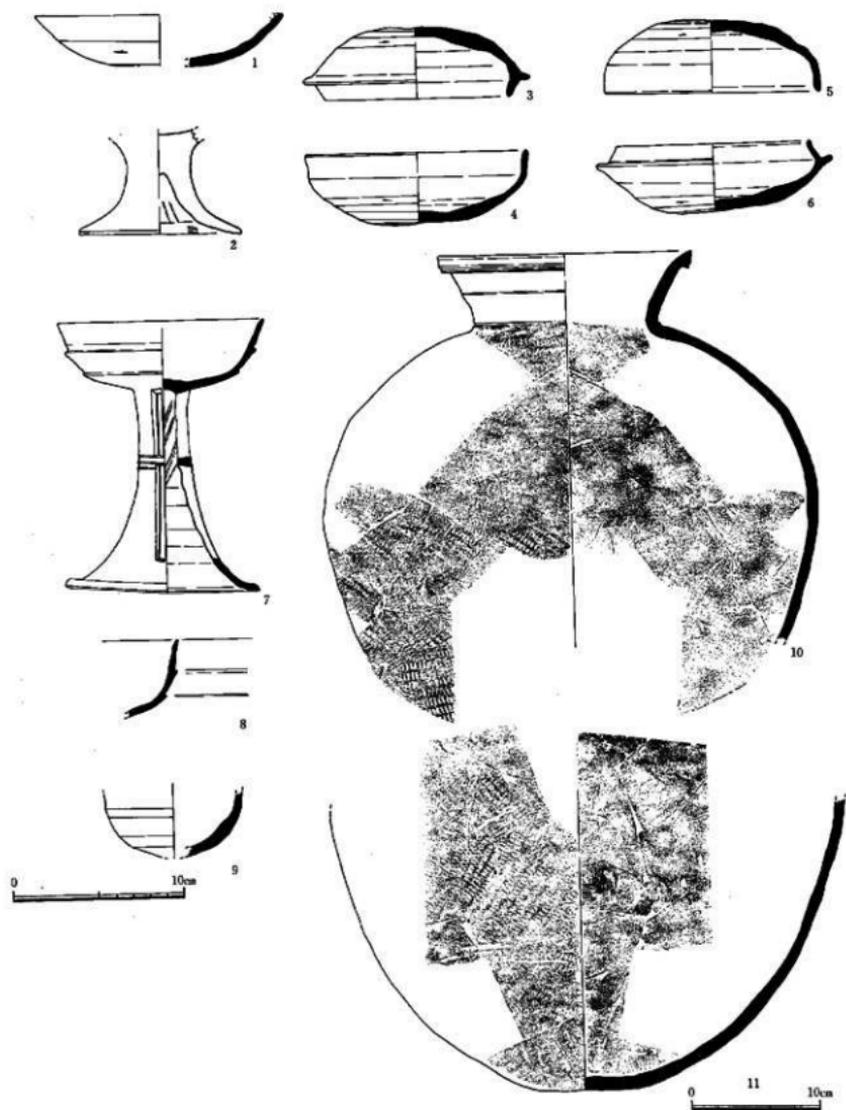


Fig 14 6号墳出土遺物実測図1 (1/4)

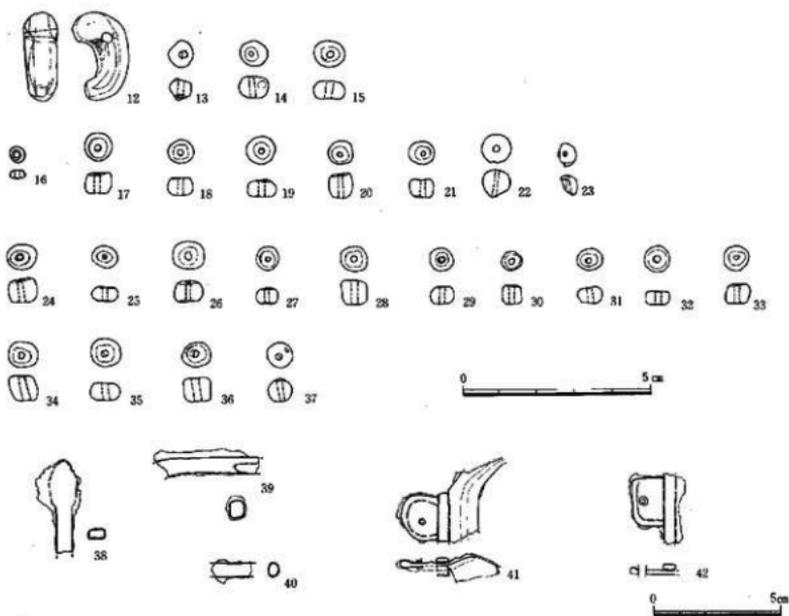


Fig 15 6号墳出土遺物実測図2 (2/3、1/2)

ある。3よりもやや大きく5とは大きさが合わない。5が割れた原因でもあろう。5、6とも1/2強の回転へら削りを施す。7はA、B、C群の破片が接合した須恵器の高杯である。脚の部分は歪む。脚部には細長い透かしがあり、3方向に開くと思われる。中位にはへら状工具による沈線が3条施される。内面脚端にも1条の浅い沈線がめぐる。杯部には2個所に段が見られ、いずれもシャープである。8は高杯の口縁部でB群の出土である。7と同様の器形になると考えられる。9は厚手で、外面半径3cmに回転へら削りを施す。E群の出土である。10は主にC群で1点のみE群が接合した。口縁部下部に1条の沈線を施す。頸部は中央には浅い沈線がめぐる。肩部には不明瞭な稜がつく。頸部と肩部との境には断面半球状の沈線が見られる。肩部から胴部上位にかけては格子目叩きが極わずかに残るがナデ消される。胴部は下部ほど叩きが残る。内面は当て具痕をきれいにナデ消す。11はC群が接合した。10とは接合しないが同一個体であることは間違いないであろう。わずかに平底がある。胴部には主に斜方向の叩き調整が残るが、ナデによりややはやける。内面はナデしており、所々に工具の木口痕らしきものがある。E群の破片も同様の調整で同一個体と考えらるが接合するものが少ない。12はめのう製の勾玉で頸部は茶色、尾部は淡黄色を呈す。研磨による面がみられ、孔は一方からあけられる。13から37の玉類は13、22、23、37が土玉で、あとはガラス玉である。ガラス玉には透明度の高い紺色、青色、透明度が低い暗紺色のものがある。また、琥珀の粒が2個出上しているが形を成していない。38は鉄旗で39、40はその頸部と思われる。38の頸部は薄手の断面長方形を呈す。41、42は委珠の破片と思われる。

(2) 7号墳

1) 位置と現状

尾根は6号墳が築造された鞍部からの登り勾配となり狭い高まりとなる。7号墳はこの自然の高まりを利用して築造される。墳丘は西側のほとんどが道路工事により削平を受けていた。石室は盗掘を受け陥没している。天井石および側壁のかなりの部分が抜かれていた。1975年の段階では両袖が現れるとの記載があり、その後の工事による破壊が大きいと思われる。

2) 墳丘

**地山整形** 尾根筋に沿って石室を構築し、鞍部に向かって開口する。a、b、c各トレンチで、地山直上に3から4cmの厚さで炭を含む灰色土が観察される。炭はcトレンチの上層で多量に含み、平面的にもIV区に於いて明確な広がりを検出する事ができた。また同じ面で、墓道の左側に焼土が広がる。炭、焼土は石室堀方内には特に見られない。おそらく地山成形時の何らかの祭祀行為、もしくは伐採した雑木等を燃やしたものと思われる。また、炭混じりの層を旧表土と考え、少なくともIV区は自然の地形を生かしたものと思われる。

6号墳との間は元は斜面でつながっていたと考えられる。古墳築造後の周溝状のくぼみは6号墳時だけでなく7号墳築造時に於いても墳端を削出したものと思われる。墓道も地山を掘り込むが、盛土の後によると思われる。

**墳丘** 崩壊、流出の度合いが大きい。盛土は地山と同じ花崗岩の風化土を主に用いているが、腐食土の混ざり具合や色、質の違いで分ける事ができる。まず第1段階として石室の裏込めを兼ねた盛り土を行う。この段階の層は均一な土が埋められよく締まる。堀方から上部は盛土の細かな単位が観察できる。b、cトレンチではまず堀方から1mの幅に40cm程の高まりを盛り、石室を構築しながら

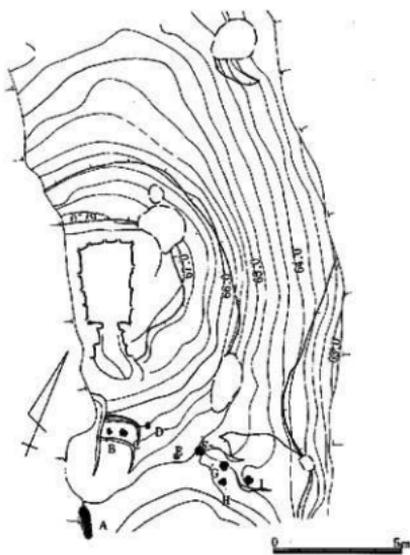


Fig 16 7号墳墳丘遺存状況図 (1/200)

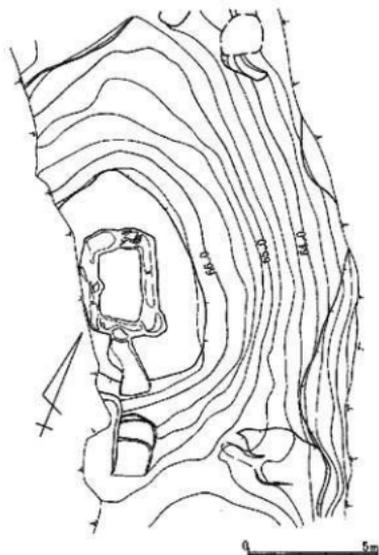


Fig 17 7号墳地山成形状況図 (1/200)

盛土を行ったことが観察できる。  
Bトレンチでは13層から78層が、  
cトレンチでは6層から41層が盛土  
と考えられる。填丘の現存最高部  
は90cm、石室基底より110cmを  
測る。

盛土の範囲は現存で南北に  
9.5m、東側に石室の中心より5m  
を測る。墳裾は削り出し部、見せ  
かけの部分を入れて、南北で14m  
を測る。南北方向にやや長い円墳  
と考えられる。

### 3) 石室

本墳の埋葬施設は主軸をN-9°  
-Wにとり尾根筋に向かって開口  
する石室は玄室部の天井石、側壁  
と奥壁の上部のかなりの部分を失  
っている。右壁袖よりはかなり内  
側に傾き、壁の面が揃わない。

石室は長方形のプランがすば  
まりながら袖部に至る。袖石に面を  
揃えて仕切石を配し、その上に角  
礫をのせる。それに接して閉塞施  
設が見られる。石室全長は右壁で  
4.55m、左壁で4.6mを測る。石材  
は花崗岩で、転石、割石が使用さ  
れている。

**石室壙方** 尾根上の緩やかな頂  
部に、尾根筋に長軸を持つ不整長  
方形に陥り、前庭部が張り出す。  
そしてさらに玄室の床の部分を残  
し、石組を設置する個所を周溝状  
に60cm幅の掘り込みを入れる。深  
さは基底面より10から20cmだが、  
袖石部は30cmを測る。深さの違い  
は据える石を想定していたと思わ  
れるが、実際には床から浮いた部  
分がある。また右壁と袖石との  
コーナー部分はやや広く掘り足し、  
厚手の板石を横に埋め、その上に

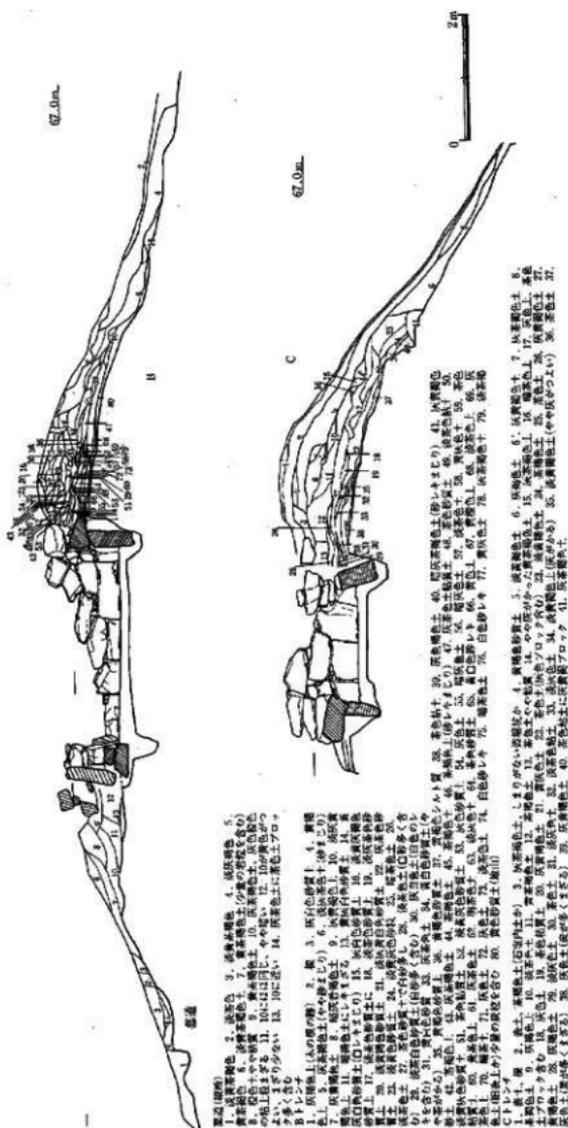


Fig18 7号墳填丘土層断面実測図 (1/80)

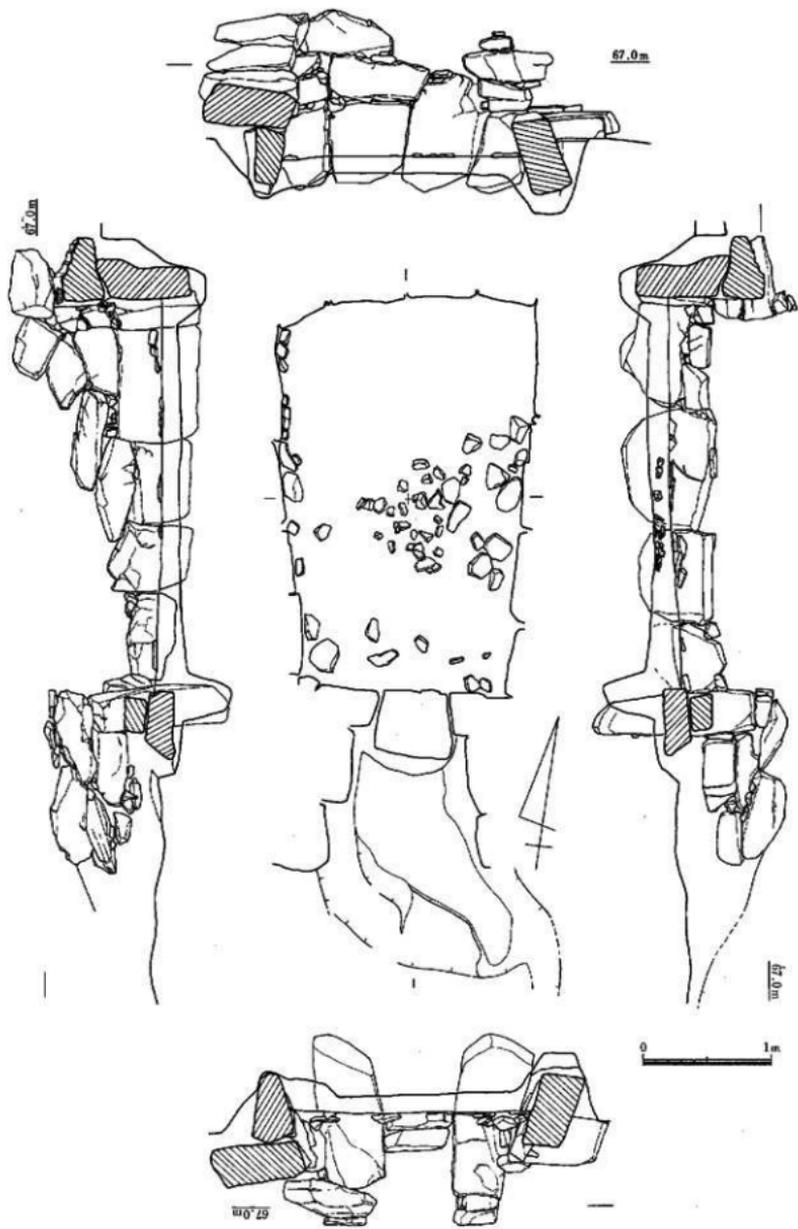
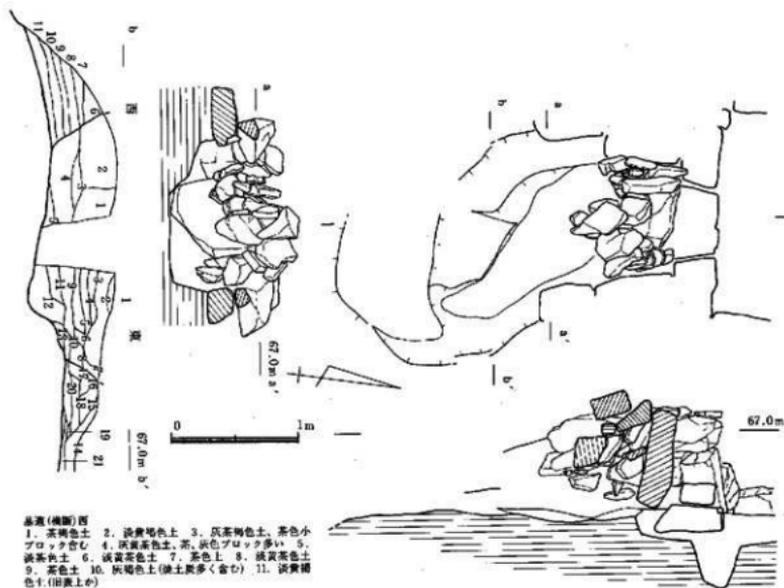


Fig19 7号填石室平面图 (1/40)



- 基壇(横断)西  
 1. 赤褐色土 2. 淡黄褐色土 3. 灰黄褐色土、茶色小ブロック含む 4. 淡黄褐色土、茶、灰色ブロック多い 5. 淡茶褐色土 6. 淡黄褐色土 7. 茶色土 8. 淡黄褐色土 9. 茶色土 10. 灰褐色土(粘土質多く含む) 11. 淡黄褐色土(田舎土か)  
 基壇(横断)東  
 1. 明褐色土 2. 淡灰褐色土 3. わずかに灰がかかる淡褐色土 4. わずかに黄色がかかる淡褐色土(白っぽい) 5. 粉状土 6. 2に近い緑色土を含む 7. 明褐色土 8. 茶褐色土より明るい、5に近い(粘質) 9. 灰色がかかった灰褐色土、紫色ブロック含む 10. 灰まじりの淡色土 11. 9がほぼ粘土がかる 12. 灰褐色土、紫色ブロック多い 13. 淡黄色粘質土 14. 淡灰褐色土 15. 褐色がかかった淡黄色粘質土 16. 褐色がかかった灰褐色土、わずかに灰まじる 17. 灰褐色土(灰質少)灰粒まじる 18. 暗褐色土 19. 灰褐色土 20. 灰色土 21. 灰色土に黒褐色土ブロックまじる 22. 淡灰褐色土

Fig 20 7号墳閉塞状況図 (1/40)

腰石は広い面を横にして据える。(Pl. 10(1)) 腰石の高さが足らず、また幅が広いため板石を入れるために掘り足したものとも考えられる。仕切石を設置する個所は方形に張り出すが、玄室の掘方と同じレベルであり、同時に掘削したものと考えられる。墓道部はそれより10cm強浅い。

玄室 奥幅2.03m、前幅1.63mを測る。左壁長は2.8m、右壁長は3.15m、奥壁から仕切石までは3.15mを測る。腰石は奥壁、両側壁とも4石を配し、いずれも大型の板状の石を使い大きさに大差ない。奥壁のものは比較的小振り、縦長に据える事で掘り方基底面より50から60cmの高さに據える。腰石より上は残存する部分は板状または角状の石を横にかぶせるように重ねる。石室に向いた面で幅60から80cmと大きく、奥行きが60から80cmと方向を変えれば腰石に使用できるものもある。最も残る奥壁では、上部ほど小振りになり角石に近くなっている。

入口部は両袖で、袖石は長さ130cm、幅50cm、厚さ20から30cmの石を、わずかではあるが上部が狭まるように据える。掘り方が深く、床面から露出しているのは全体の約半分である。両袖間は0.55mを測る。袖石の外は両側壁に50から60cm幅の石を2列配す。この部分は掘り方の外の地山上に据える。右側の石の下は先述した焼けた面である。床は掘方に15から20cmの土を盛り、敷石を詰めたものと考えられる。

閉塞施設と前提部 入口部に密着して閉塞施設が存在する。長さ90cm、幅60cm、厚さ20cmの板状の石を仕切石と5から8cmほど隔てて立てる。さらにその外側には下部に土を盛った後30から40cm大の

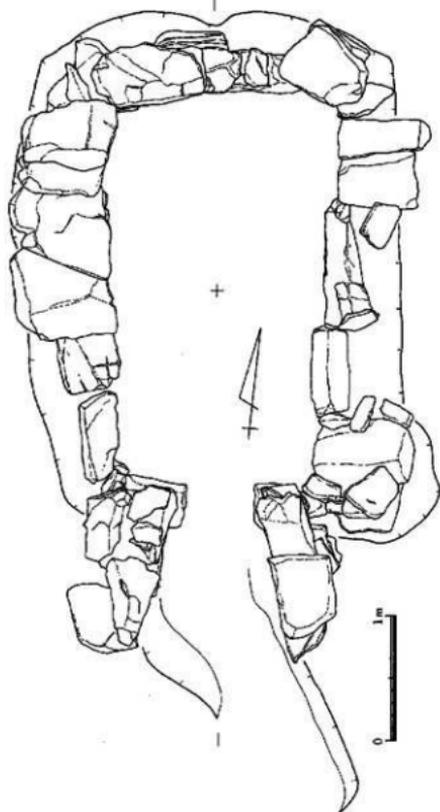


Fig 21 7号墳石室前壁断面図 (1/40)

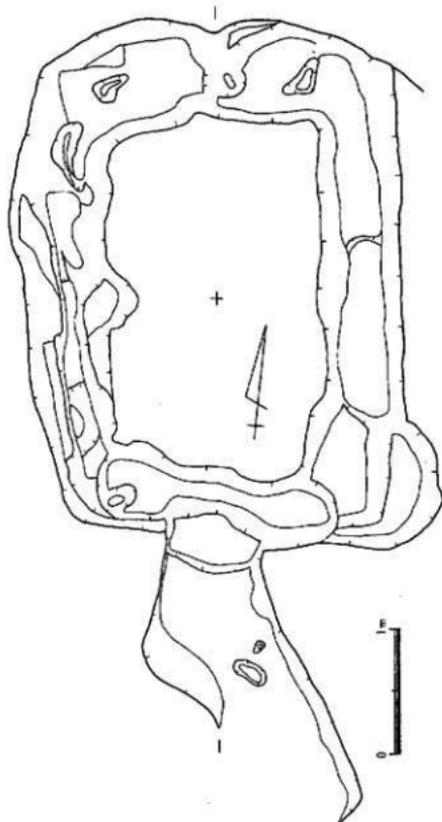


Fig 22 7号墳石室柵方実測図 (1/40)

石で覆うように重ねる。これらの閉塞石でほぼ入口部を密閉した状態と考えられ、最終的な追葬時の閉塞である。

墓道は墓抗から連続して南へ延びる。仕切石から2.3mはほぼ平坦で、そこから墳丘に沿って落ちる。墓道は墳丘の盛り土を掘り込んで形成される。床については地山成形成階に掘りくぼめていた可能性も残るが、盛り土の後に一気に掘削したと考える方が自然であろう。側壁に挟まれた入口部の狭いところで幅0.9m、横断土層を観察した仕切石より1.2mの所で幅2.15mを測る。盛り土は仕切石より1.5mの付近で流失しており、正確な墓道の規模は不明であるが次第に浅くなり広がるものと考えられる。

墓道は縦、横断面を切って土層観察を行ったが、追葬を物語る層位は確認できなかった。10層から14層は板石による閉塞の後に埋め、そこに小型の石を積む。また、1層と3、4層は最終的な閉塞の

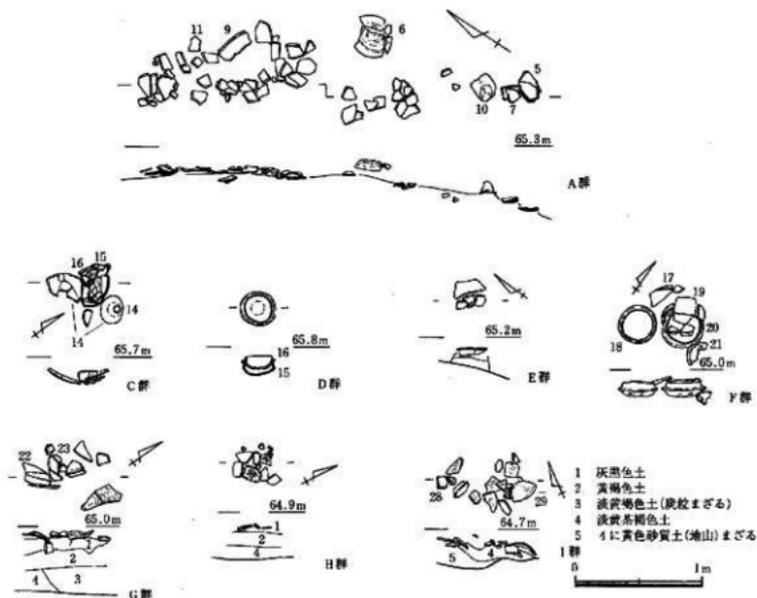


Fig 23 7号墳遺物出土状況図 (1/40)

後に掘りくぼめたもので、それぞれ遺物のA群とB群にあたる。

#### 4) 遺物出土状況

玄室からはほとんど遺物の出土はない。仕切石の前に壺1、2が床面直上で出土した。追葬、盗掘時に遺物は抜かれたものと思われる。前庭部からは須恵器3、4と鉄鎌40が埋土中から出土している。

墳丘の墓道の周囲区からはややまとまった遺物の出土を見た。A群はI区の墳裾付近に位置し、須恵器の杯でⅢb期の5-7と8世紀代の8、土師器の甕9と瓶の取っ手10が出土した。他に平行叩きをなで消した須恵器の甕の破片がある。B、C群は墓道の下の特ラスで出土した遺物で、Fig 18の5層にあたる。土師器の高杯11、14と須恵器のⅢb期の杯12、13が出土した。A群の杯より古手である。D群は墓道端すぐ東にⅢa期の杯身のセットが蓋を反対にし、身の下に添えるように置かれていた(Pl. 9-5)。E群は周溝状のくぼみで土師器の甕の胴部破片が一部出土した。F群17-21は3点のⅢa期の杯身のセットが正置してあったと考えられる。19、20は蓋がかぶった状態で出土したが17は18の横にずれていた。17、19はG群と接合している。G群22-27は破損した状態で出土しており、F群が落ちて溜まったものか。H群は土師器の破片が固まるがあまり接合しない。一部外面に平行叩きが残る。I群28、29は須恵器が散らばり、ほぼ完形に復元できた。30から36は周溝状の覆土から、37から39、41は墳丘表土からの出土である。

1は底部に回転ヘラ削り調整を施す。2は1に接合する可能性がある。3は生焼けでほとんど土師

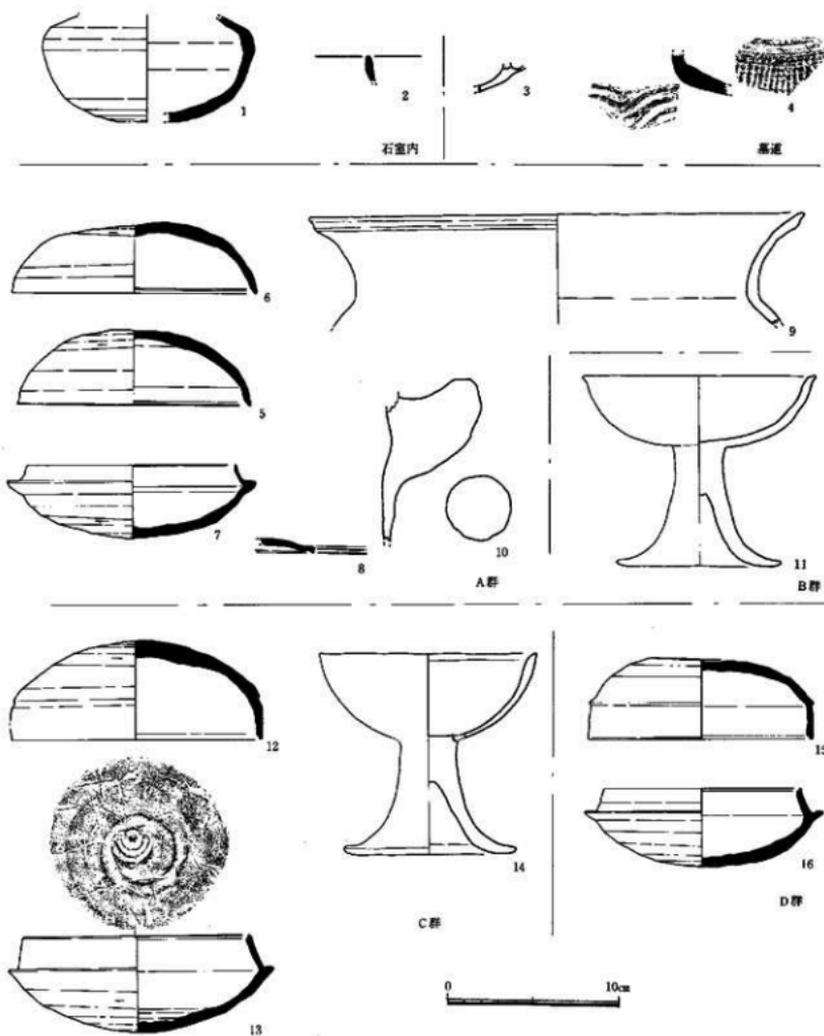
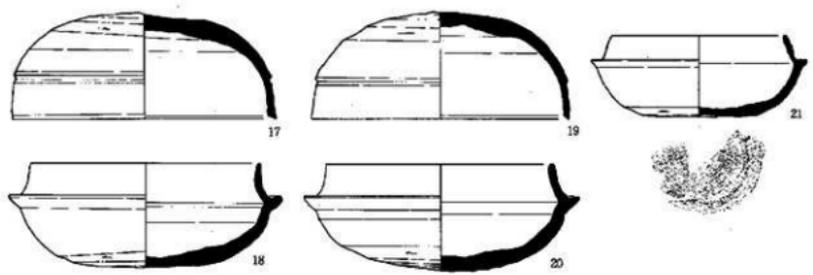
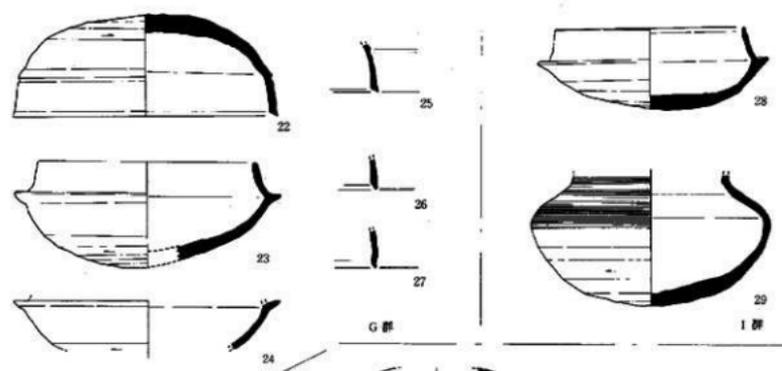


Fig 24 7号墳出土遺物実測図1 (1/3)

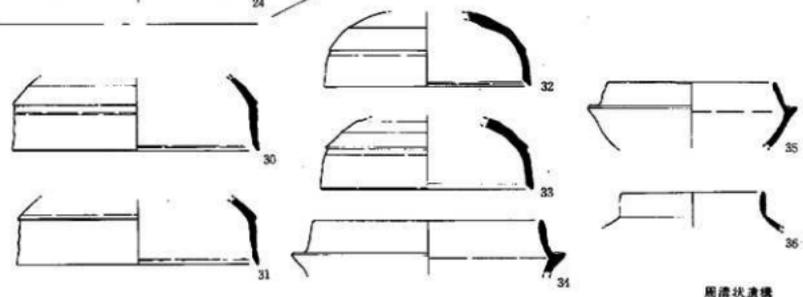


F 群

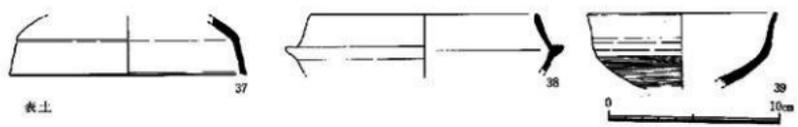


G 群

I 群



周溝状遺構



表土

0 10cm

Fig 25 7号墳出土遺物実測図2 (1/3)

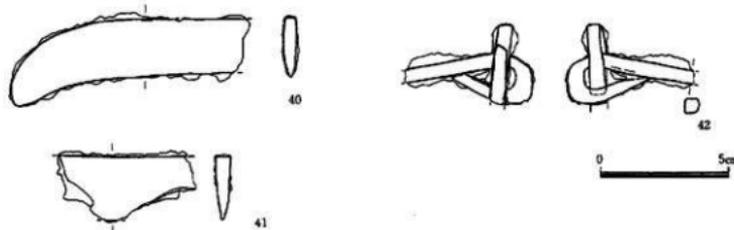


Fig 26 7号墳出土遺物実測図3 (1/2)

器の発色を呈す。4は外面に疑似格子目叩き、内面には当て具痕が残る甕の頸部である。5から7は薄く浅い。6と7が近接して出土しセットと考えられる。大きさでは6が7の受け部の根元に丁度かぶさる。5はやや大きく7の径とほぼ同じである。8は杯蓋で小さな返りを持ち、1点のみ新しい遺物である。9は摩耗が著しく、他に胴部破片も多くあるが接合しない。11、14は11がやや細身な感もあるが、大きさ器形とも似る。いずれも摩耗が著しく杯部の1/3強が欠ける。12は口縁部外面の段が浅い凹線になる。13は口縁部内面に浅い沈線を施し底には同心円形の当て具痕が残る。砂粒を多く含み外觀が粗い。15、16は口縁部の沈線、段等のつくりがシャープである。回転籠削りは2/3強に施す。かぶせても丁度はまる。15は3mm大の砂を多く含む。17から23は身の口縁部に沈線を施さず、蓋の外面の段にシャープさが無い。21を除いて径が大きく15.5cm前後である。29は焼きがあまく最大径より上部には浅い掻き目を施す。39は高杯で頸部に浅い沈線を、体部には掻き目を施す。焼きがあまく茶色がかかる。40から41は鉄器である。40は鎌で全長8cm、幅2.5mmを測る。41は刀の破片と思われる。幅2.6cm、背の幅6.5mmを測る。42は厚さ5mmの断面方形の金具2本を曲げて輪をつくり、お互いをその輪に通して繋ぐ。馬具の一部と思われる。

### (3) 8号墳

#### 1) 位置と現状

7号墳でいったん高まりを見せた尾根は、2m程落ちて緩傾斜をなす。その15mの間に8、26、28号墳の3基が築造される。8号墳は7号墳のすぐ下の西側の谷へ山よりに向かって開口する円墳である。西側は道路工事のために削平を受け、羨道部まで一部削られている。東側は墳丘斜面に踏み跡が通り、削平を受けている。墳頂部には楕円形の盗掘坑があった。

#### 2) 墳丘

**地山整形** bトレンチの24層に旧地表面と思われる層が残る。I、II区は旧地表面をそのまま使用したものと考えられる。III、IV区は7号墳、28号墳との間に周溝状のくぼみをまわし、その部分の地山掘削を行う。特に7号墳との間は風化した花崗岩が露出し、7号墳からの斜面との切りはなしを行っている。ただしそこに見られる段は西側に広がり、周溝掘削に伴うかはっきりしない。石室構築箇所はcトレンチの周囲に平坦面を形成する。石室はその中心ではなく、やや違ったところに設置する。

**墳丘** 崩壊、流出の度合いが大きい。墳丘の高まりが低いいため墳丘依存状況のみ10cmの等高線を引いた。盛り土は地山と同じ花崗岩の風化土を主に用いる。腐食土の混じりは少ないが色調の違いで細分できる。盛り土の範囲は地山成形した部分にもおよぶ。まず最初に石室の裏込めを埋め、後に盛り上げていくが、aトレンチで4から8層と9から12層の間で不整合が見られ、石室の構築段階に伴うものと思われる。また、羨道部の両側には盛り土の上部に20から30cm大の石を埋める。(Pl. 12(1)) 規則

的な配列はない。盛土は a トレンチ等では初期の段階で流れ、範囲は不明瞭だが石室の中心から 2.5m の範囲に高まりとして認識できる。墳裾は地山成形部を含めて 6~7m の円形でとらえられる。

### 3) 石室

本墳の埋葬施設は主軸を N-12°-E ととり、谷側に開口する両袖単室の横穴式石室である。玄室部は腰石が残るのみで、羨道部も側壁上部、天井石を欠いている。石室は狭長な長方形を呈し、前幅がやや広がる。袖石から羨道、前庭部は広がりながら面を揃える。左側壁は削平を受ける。右壁も同様と考えられる。入口部には右の袖石に揃えて仕切石を配し、60cm の間隔をおいて第 2 仕切石、さらに 30cm の間隔をおいて第 1 仕切石が配される。第 1 仕切石の外側に接して閉塞施設が設けられる。石室全長は右壁で 3m、左壁で 4m が残存する。石材は花崗岩で、転石、割石が使用されている。

**石室掘方** 石室のプランにあわせて長方形の掘り方を持ち、羨道に向かって狭まる。基底面を平坦にし、その結果右側が段差が大きく 60cm を測り左側は 23cm を測る。羨道側も地形にそって段差が小さ

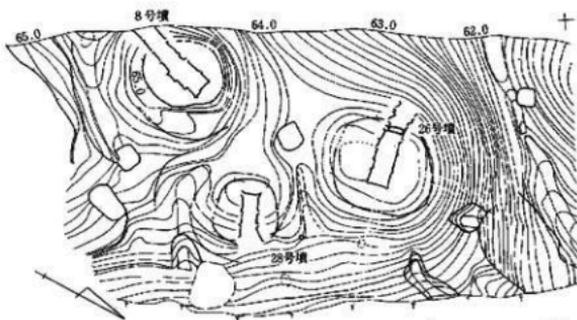


Fig. 27 8、26、28号墳墳丘連存状況図 (1/200)

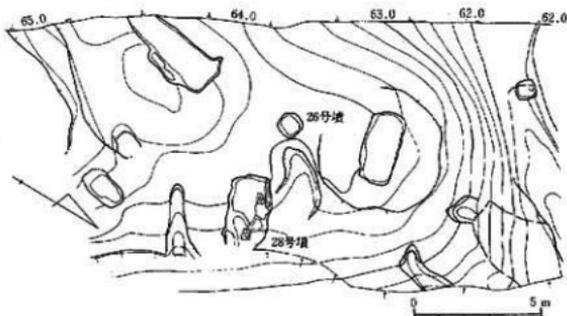


Fig. 28 8、26、28号墳地山成形状況図 (1/200)

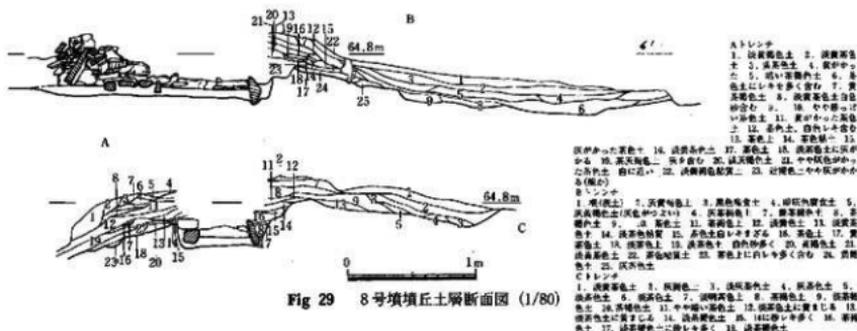


Fig. 29 8号墳墳丘土層断面図 (1/80)

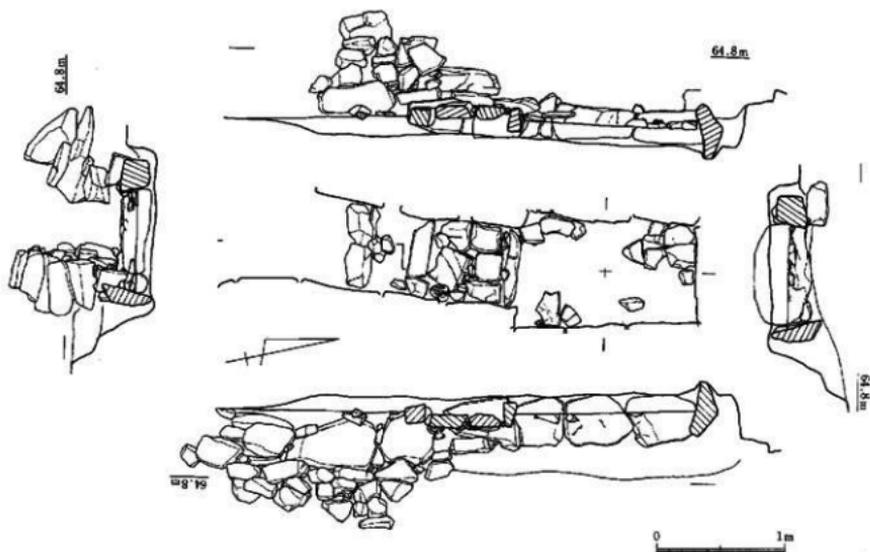


Fig 30 8号墳石室実測図 (1/40)

くなる。右側の玄室部は北側に30cm弱張り出し、段をつくる。この段は側壁腰石の上面レベルに一致する。2段目以上の石積みのためであろう。腰石を設置する部分は右壁部でわずかに下がるが顕著なものではない。奥壁部は深さ10cmほど掘り込む。石は掘り方に接して置かれる。玄室部は入口部をいれて長さ4.05m、幅は最大で0.9mを測る。

玄室 玄室長は奥壁から仕切石までが1.4m、奥幅0.79m、前幅0.9mを測る。左壁長は1.26m、右壁長は1.42mを測り、左右で長さが異なる。このためか第3仕切石部分から、主軸が西よりにずれる。奥壁は幅80cm、高さ45cmの石を1つ置く。側壁の腰石には左3石、右2石を配す。左は幅60cm、高さ30cmとやや幅広の柱状の石を使い、右側は幅50cm、高さ60cmと高い板状の石を用いる。袖石は腰石とさほど大きさは変わらないが左右の側で幅が25cmと55cmと事なり、袖石を揃えるという意識はない。羨道の腰石として、たまたま玄室のプランに面したという印象が持たれる。袖石間は62cmを測る。

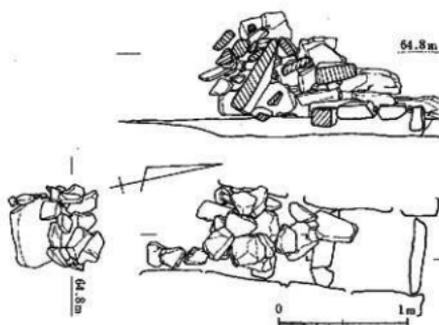


Fig 31 8号墳閉塞状況図 (1/40)

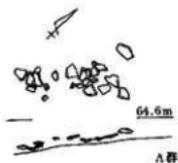
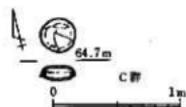


Fig 32 8号墳遺物出土状況図 (1/40)



床は堀方に13cmほどの土を盛り、敷石を詰める。敷石は20cm大の薄い石で部分的に残る。

**閉塞施設 羨道 前庭部**  
第1仕切石に接して閉塞施設が存在する。長さ65cm、幅50cm、厚さ20cmの偏平な板石を立て、下半部を埋め戻した後に20から30cm大の長めの石を積み上げて閉塞している。閉塞石の前の縦断上層を観察したが追葬は確認できなかった。

羨道は玄室から北にふれて次第に広がりながら伸びるが削平を受けている。長さ左壁1.7m、右壁2.6mが残存する。奥幅は0.63m、前幅は左壁の残存端で0.74mを測る。側壁の腰石は、左壁は玄室の

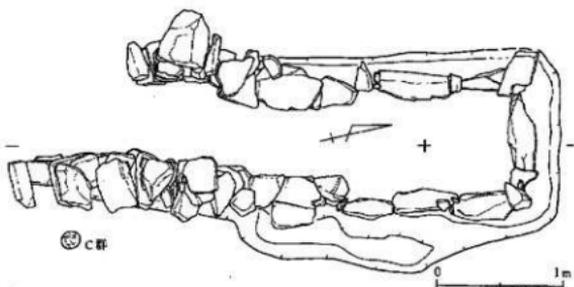


Fig 33 8号墳石室前庭図 (1/40)

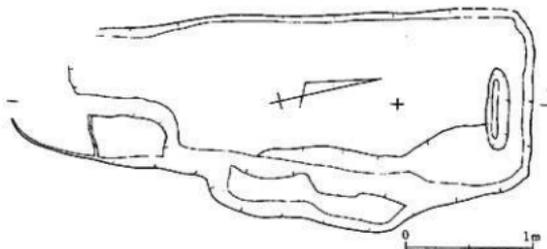


Fig 34 8号墳石室掘方実測図 (1/40)

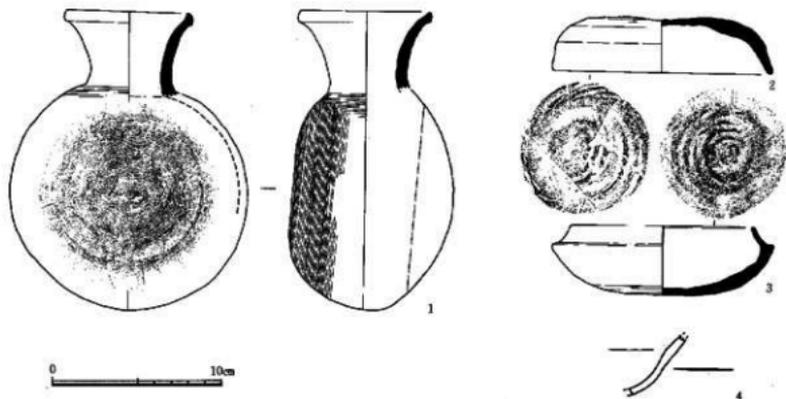


Fig 35 8号墳出土遺物実測図1 (1/3)

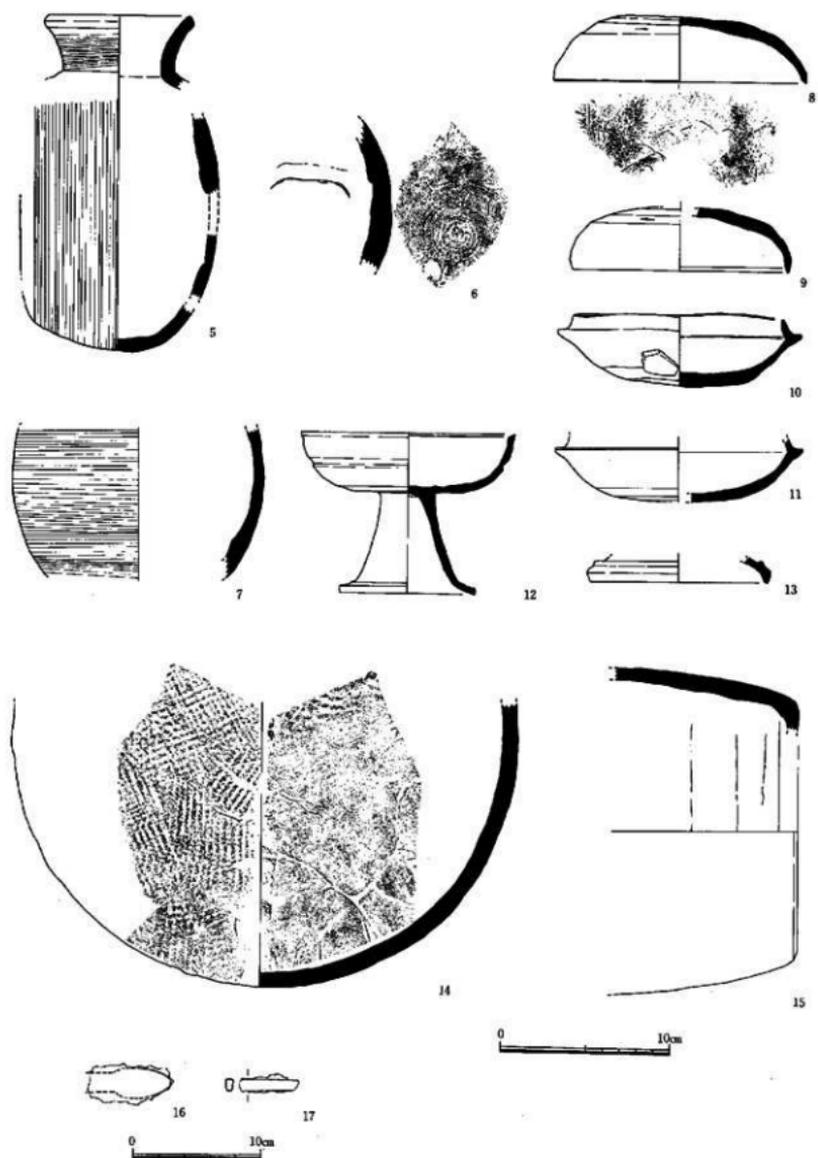


Fig 36 8号墳出土遺物実測図2 (1/3、1/2)

ものよりやや小振りだが右壁のものは変わりない。入口部よりの2石は左右とも掘り方の中に入るが3番目からは外に出て羨道床面と同じやや高い位置にある。腰石より上は30cm大の石が3、4段残存している。床には第3仕切石と第2仕切石との間には20cm大の扁平な角石を全面に敷く。第1仕切石の奥にも10cm大の石があるが全面に広がるかは不明である。

#### 4) 遺物出土状況

玄室からはわずかに残った敷石上で鉄旗が出土したのみである。盗掘時に持ち出されたものと思われる。羨道からは第2仕切石の奥に提瓶が正置して右側壁に立てかけていた。墳丘からは盛土から土師器の鉢4、盛土を除去した面でⅣ区羨道裏にⅢb期の杯身のセット2、3が置かれた状態で出土した。周溝からは出土状況を図示していないがCトレンチ付近のB群で6から13が、Ⅳ区のA群で14、15が出土した。B群は杯身がⅢb期に位置づけられる。

1は提瓶で完形である。頸部と体部片面に掻き目を施す。2、3はⅢb期でも新しく、天井部がやや平坦で杯の受け部から返りが滑らかで鋭くない。両者とも焼きがあまく、内面に同心円状の当て具痕を残す。5は焼きがあまく、摩耗が著しいため部分的にしか接合せず、図上で復元した。提瓶でやや厚手のものになると思われる。側面から丸みを持つ面には掻き目を施すが、平らな面はへら削りを施す。頸部は横なでである。6、7は外面に掻き目が薄く残り同一個体の可能性がある。提瓶と思われるが7には壺の可能性もあろう。8は内面に二つのへら記号を施す。10には外面に別の破片が付着する。杯を重ね焼きしたものではない。やや歪みがある。11は内面の焼きがあまく茶色を呈す。12は高杯で杯部は口唇部内面に沈線、外面に段状の凹線を施し底には回転へら削り調整をおこなう。Ⅲb期の杯蓋に類似する。13は高杯の脚で透かしを持つ。14は外面に疑似格子目叩き、内面に同心円当て具痕を施す。15は外面に自然釉がかかる。横板か。16は銅鍍、17はその基部と思われる。

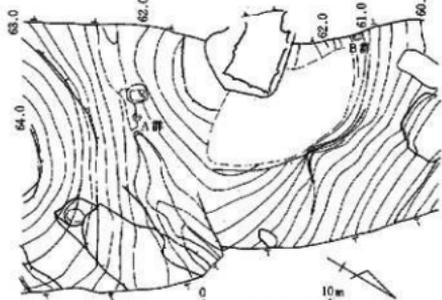


Fig. 37 9号墳墳丘遺存状況図 (1/200)

#### (4) 9号墳

##### 1) 位置と現状

27号墳から9号墳は、尾根上の緩やかな傾斜地を利用した地形的にもまとまりを持つ一群である。9号墳はそのまとまりの端にあたり、急に尾根が落ちる突端に築造される。西側の谷に向かって開口するが、道路工事のため大きく削平され玄室が残るのみであった。1975年の踏査では18号墳とされ、両袖式との記述がある。残りは好かったと考えられる。Ⅱ区には巨大な木の根が張り、作業に支障をきたした。

##### 2) 墳丘

地山整形 Ⅰ区、Ⅱ区は調査前は急斜面で

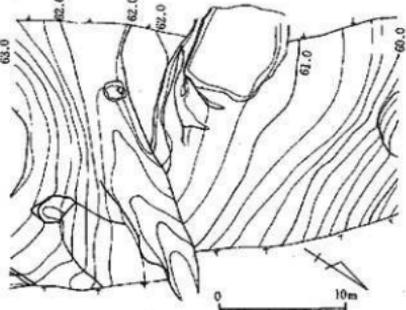


Fig. 38 9号墳地山成形状況図 (1/200)



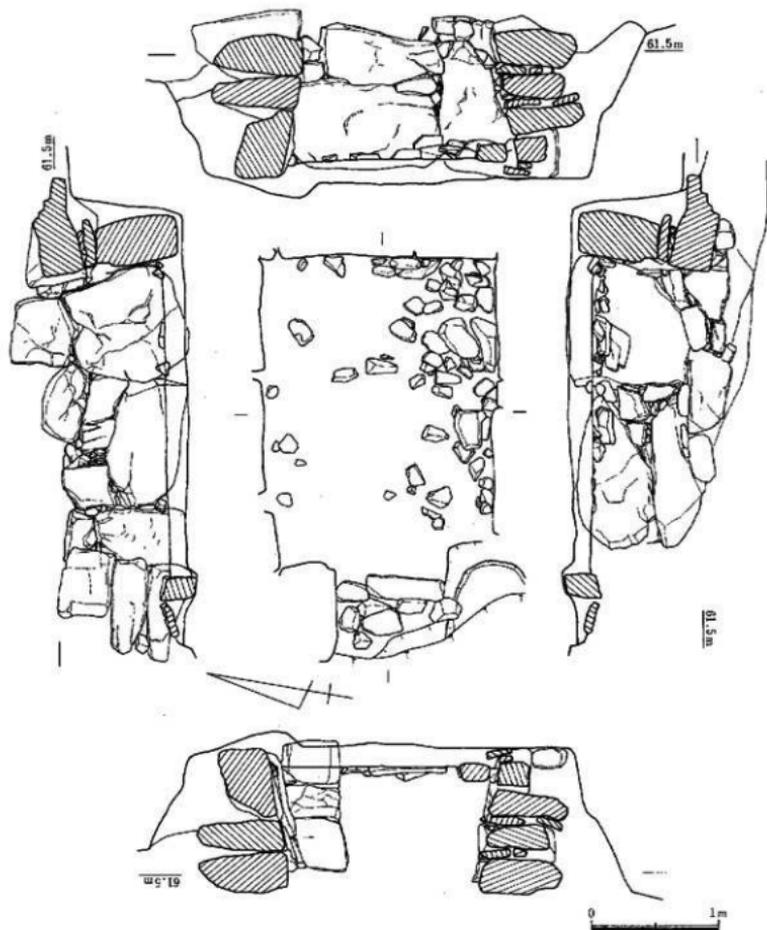


Fig 40 9号墳石室実測図 (1/40)

大きくは3から4段階の作業過程がうかがえる。まず第1段階として石室の掘り方に地山の土を埋める。cトレンチに見られるように細かな単位に分かれるが砂質であるため締まりがない。数点の石も埋められるが目立った量ではない。次の掘り方から上のレベル、aトレンチでいえば64層以下、bトレンチの36層以下には、やや大きな単位で横に広い、前段階より粘質のある地山の土を盛り。墳丘に勾配をつける意識が小さな段階か。3段階としてaトレンチの28から62層、bトレンチの15から32層のように細かな単位で腐食土が混ざる土を盛り、急勾配を形づくる。最後に比較的大きな単位を全体

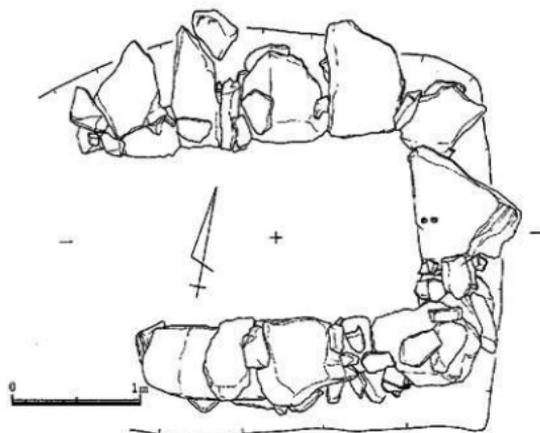


Fig 41 9号墳石室跡断面図 (1/40)



Fig 43 9号墳遺物出土状況図 (1/40)

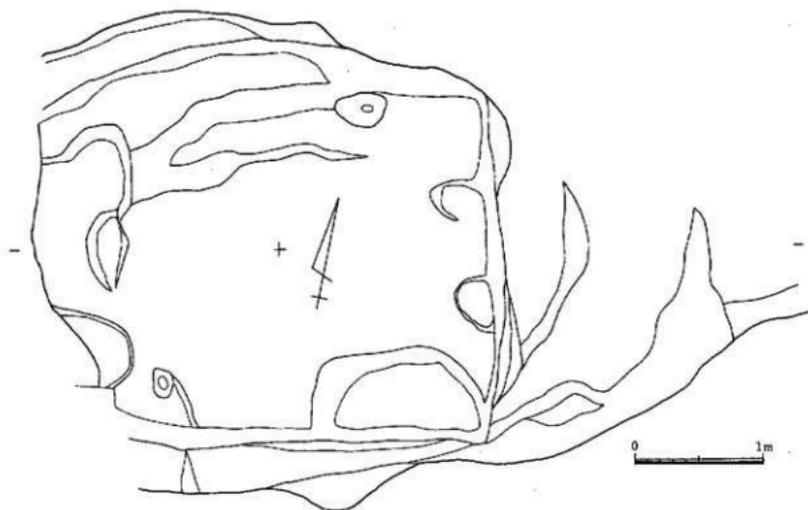


Fig 42 9号墳石室掘方実測図 (1/40)

にかぶせるように盛る。各段階は石室の構築段階に対応すると思われる。天井石は第2段階を終えた時点でのせたものか。現存最高部は、基底面より1.4m、石室基底より2.3mを測る。

墳丘の裾は南北が北側を盛土の端、南を周溝状遺構の下端とすると径10m、東側では石室の中心から溝の下端まで7mを計る。

### 3) 石室

本墳の埋葬施設は主軸を N-79°-W にとり東側の谷に向かって開口する両袖の横穴式石室である。石室は羨道部と右袖石を工事により削平され、玄室部の天井石、側壁と奥壁の上部を失う。

石室は長方形のプランを呈し、袖石の面より10cmほど羨道側に仕切石を配す。右袖石は抜かれるが痕跡は残りプランは推測できる。石材は花崗岩で、転石、割石が使用されている。

**石室堀方** 地山整形で得られた高まり上を長方形に素掘りする。掘り方は深さ1.5から0.7mを測る。床は平坦に揃えるが石積み部分は10cm前後下がる。現存で長さ3.6m、幅は最大で3.8mを測る。

**玄室** 玄室長は奥壁から仕切石までが2.6m、奥幅1.85m、前幅1.2mを測る。左壁長は2.48m、右壁長は袖石がないため現況では2.25mを測る。腰石はいずれも大きな石を立て面を揃えるが大きさの規格性は低い。奥壁は幅100cm、65cmの2石を配し、側壁は右に2石、左に3石を配す。腰石より上は、腰石よりやや小振りの石を横積みし持ち送る。隙間には小型の石を詰める。現存で床面より1.3mを測る。左袖石は高さ30cm前後の石をやはり持ち送って積む。床には10から20cm大の石が散乱しており、堀方に15cmほどの上を貼り敷石を詰めたものと考えられる。

**羨道** ほとんど残っていない。仕切石は長さ60cmと25cmの2石からなり、床には20から10cm大の石を敷く。幅は仕切石部分で85cmと推定される。

### 4) 周溝状遺構

Ⅱ区の東からⅢ区にかけて最大2.5m幅の溝が削出される。東側は直線的に伸びており9号墳の周囲をまわらない。また、次第に浅くなっている。石室入口に至る道とも考えられないだろうか。Ⅲ区に焼土坑が掘られるが古墳築造後である事は確実である。

### 5) 遺物出土状況

玄室は追葬、盗掘時に遺物が抜かれたものと思われる。釘、大刀等の鉄製品8～12が出土したが破片で動いている。墳丘Ⅳ区のA群は周溝状遺構にかかる。須恵器の高杯1が倒れた状態で出土した。この周囲からは13から15までの鉄製品が出土している。墳丘Ⅰ区のB群ではⅢb期の須恵器の蓋杯

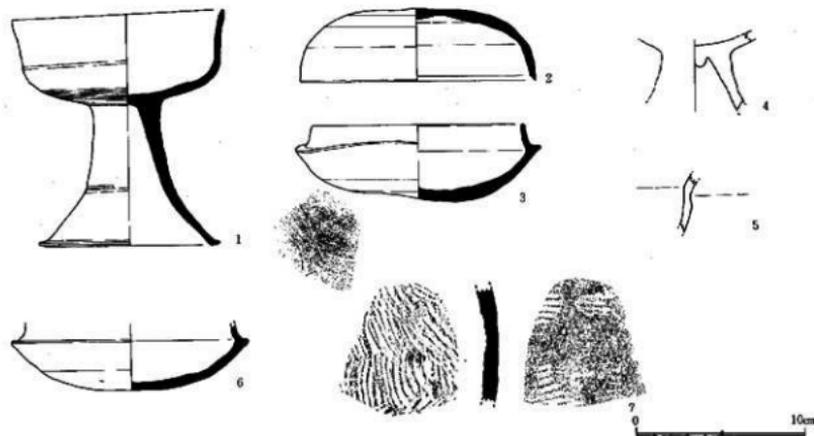


Fig 44 9号墳出土遺物実測図1 (1/3)

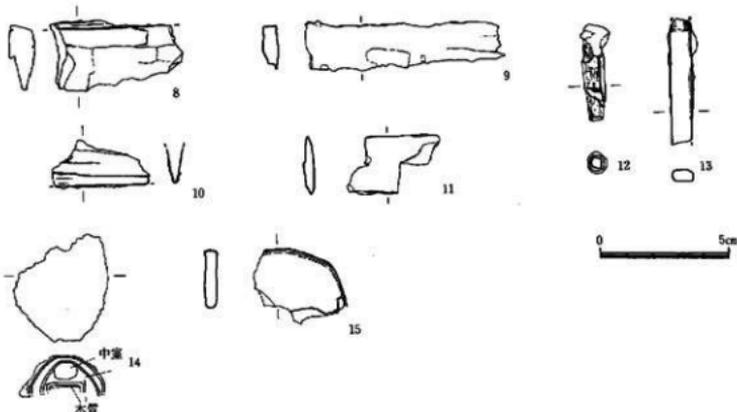


Fig 45 9号墳出土遺物実測図2 (1/2)

のセットが正置した状態で出土した。中には何も残っていなかった。4は周溝から、5から7は表土中からの出土である。周溝からは他に土師器の破片が、表土からは須恵器の杯、平行叩きが残る甕が出土している。

1はほぼ完形に復元できた。杯部底には掻き目が施される。脚部内面は赤茶色を呈す。2、3は2mm大までの砂粒を多く含む色調も類似する。3に2が被って出土した。2は口縁部が1/2弱ほど欠ける。外面には口縁部と天井部を分ける段がかすかに見られる。3は歪んでいる。受け部には重ね焼きの痕跡がある。内面にはへら記号が施される。4は土師器の高杯で器面の粗れが著しい。5は土師器で鉢と思われる。6は外面に灰をかぶる。7は甕の胴部破片で外面は平行叩き、内面は弧状の当て具痕がみられる。外面は自然釉がかり深い緑色を呈す。8から15は鉄器である。8から11は刀である。いずれも破片で、幅が確認できる箇所もない。12は厚さ2から3mmの鉄と木質が重なり合う。最も内側は方形を呈し、外側は袋状を呈す。武器の一部かと思われる。13はのびで厚さ4.2mmを測る。孔は見られない。12は鉄の頸部で欠柄の木質と樹皮が残る。断面方形を呈する。13は鉄の頸部で断面偏平楕円形を呈す。わずかに矢柄の木質が残る。14は落手の鉄を重ね、間に木質が残る。15は鈎である。

#### (5) 26号墳

##### 1) 位置と現状

尾根がやや広がり平坦な地形が9号墳へ落ちる際に位置する。今回伐採後に、陥没した石室を確認した。狭長な石室を持つ横穴式石室で西の谷へ開口する。墳丘はかなり失われたものと思われるがプランを大きく削平するものはない。

##### 2) 墳丘

**地山整形** 尾根筋に直交して石室を構築する。b、cトレンチでは旧表土は確認できないが、aトレンチの15層に確認できた。I、II区は旧地表がこの層。この15層は2.5mで不自然に切れる。ここには不明瞭ではあるが地形変換線が観察されIII区まで続く。下部は地山を成形して墳丘を削出したものと思われる。III区の28号墳との間には浅い溝状のくぼみがあるが、28号墳にともなうものと思われる。

Aトレンチ

1. 黄褐色土(灰土) 2. 灰褐色土 3. 暗灰色土(しまりがなくやわらかい) 4. 灰褐色土(シルト質) 5. 赤土(シルト質) 6. 灰褐色土(白レキまじり) 7. 赤土(白レキまじり) 8. 暗褐色土(土がむ) 9. 赤土と黄褐色土の境 10. 赤褐色土 11. 赤土 12. 赤土やや硬い 13. 灰がまざる暗褐色土 14. 灰褐色土(同順上か?) 15. 暗褐色土

Bトレンチ

1. 硬まじり黄褐色土 2. 黄褐色土 3. 赤褐色土(灰土) 4. 赤褐色土(灰土) 5. 灰がまざる赤褐色土 6. 灰土のつよい黄褐色土 7. やや灰がかった黄褐色土 8. 黄褐色土 9. 黄褐色土(白色砂を含む) 10. 黄褐色土(シルト) 11. 赤褐色土 12. 赤褐色土 13. 赤褐色土(白レキ多く含む) 14. 赤褐色土 15. 赤褐色土(しまりが少ない) 16. 赤褐色土 17. 赤褐色土(やや硬い) 18. 暗褐色土(粘質) 19. 赤褐色土(白色砂を多く含む) 20. 暗褐色土 21. 暗褐色土 22. 黄褐色土 23. 黄褐色土(白色砂を含む) 24. 赤褐色土、粘質土、暗褐色土

Cトレンチ

1. 暗褐色土 2. 黄褐色土 3. 赤褐色土 4. 暗褐色土(灰土まじり) 5. 暗褐色土(灰土まじり) 6. 赤褐色土(灰土まじり) 7. 黄褐色土(腐食の灰を含む) 8. 赤褐色土(灰土まじり) 9. 黄褐色土 10. 赤褐色土 11. 赤褐色土

Fig 46

26号墳墳丘十層断面図 (1/80)

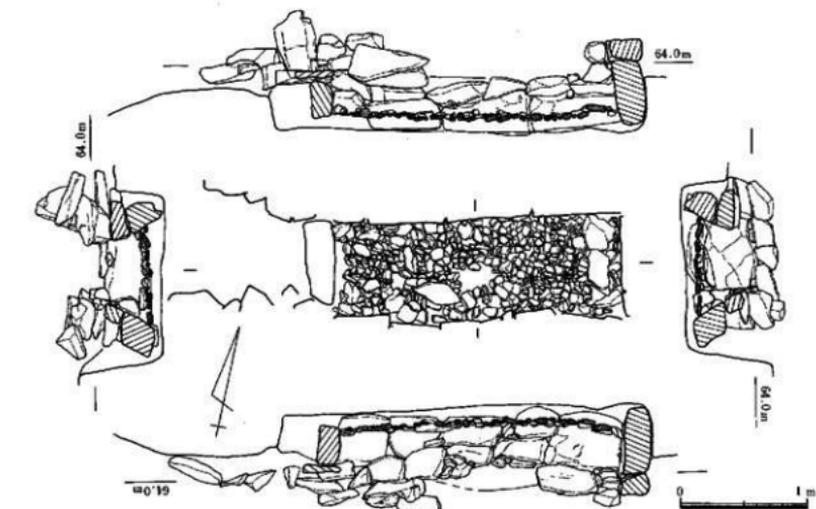


Fig 47 26号墳石室実測図 (1/40)

墳丘 崩壊、流出の度合いが大きい。a トレンチで最も残存して高さ55センチを測る。地山の土を主体として盛るが、一部腐食土が混じる。I、II区の旧表土とIII、IV区の削平面の肉内に盛土し、径5mを測る。南側は盛上が終わる所で平坦になり墳端となる。

### 3) 石室

本墳の埋葬施設は主軸をN-77°-Eにとり尾根筋に直交して谷側に開口する石室である。石室は天井、側壁と奥壁の上部を失っている。

石室は長狭の長方形プランの  
 竪穴石式室状の玄室に「ハ」の  
 字状に開く前庭部側石を配す。  
 入口部から30cmの所に閉塞石状  
 の立石が見られる。これは  
 SX003、004のような新しい時  
 期の遺構とも考えられる。石室  
 全長は右壁で3.5m、左壁で  
 3.2mを測る。石材は花崗岩で、  
 転石、割石が使用されている。

**石室掘方** 隅丸長方形の素堀  
 の掘方で、床は平坦。玄室の奥  
 壁では腰石が堀方にいっばいに  
 置かれるのに対し、側壁部、入  
 口部では余裕がある。長さ  
 2.9m、幅は最大で1.45m、深さ  
 は0.65mを測る。

**玄室** 玄室長は2.25mで、奥  
 幅0.85m、前幅0.75cmを測る。  
 腰石はやや小振りで大きさはあ  
 まり揃わない。奥壁は幅60cm、  
 高さ50cmと厚さ10cmの2石を配  
 す。左側壁は奥から幅70、68、  
 60、20cmの4石、左側壁には幅  
 48、30、48、40、43cmの5石を  
 配す。高さは右奥のものは50cm  
 と奥壁に揃えるが、他は25から  
 40cmと低い。また左側壁は面が  
 やや乱れる。2段目からは30cm  
 大の石を横積みする。床は10cm  
 強ほど埋めて5から10cm大の石  
 を敷き詰める。奥壁前と中央入  
 口より30cm大の薄い石を配す。  
 他の敷石より5cmほど高くなる。  
 II区墳丘上から長さ80cm、幅  
 50cm、厚さ10cm強の石が出土し  
 た。動かされた天井石かもしれない。

**閉塞施設と前庭部** 仕切石か  
 ら30cmの所に閉塞施設状の立石

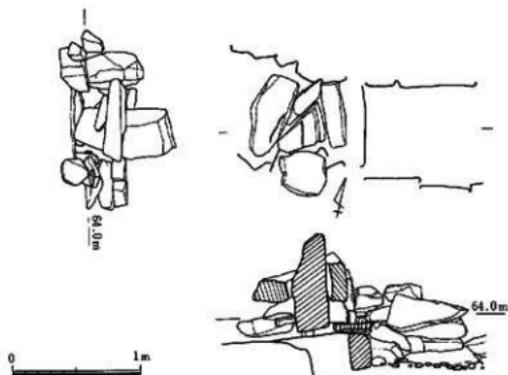


Fig 48 26号墳閉塞状況図 (1/40)

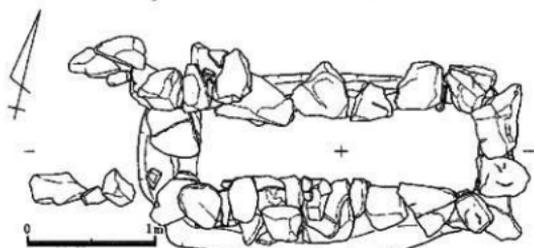


Fig 49 26号墳石室跡断面図 (1/40)

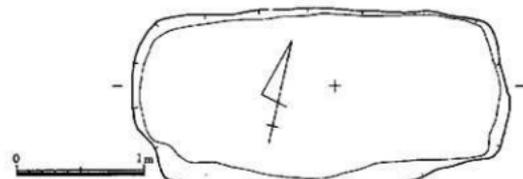


Fig 50 26号墳石室掘方実測図 (1/40)

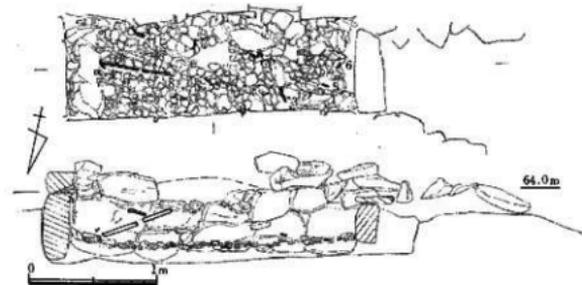


Fig 51 26号墳遺物出土状況図 (1/40)

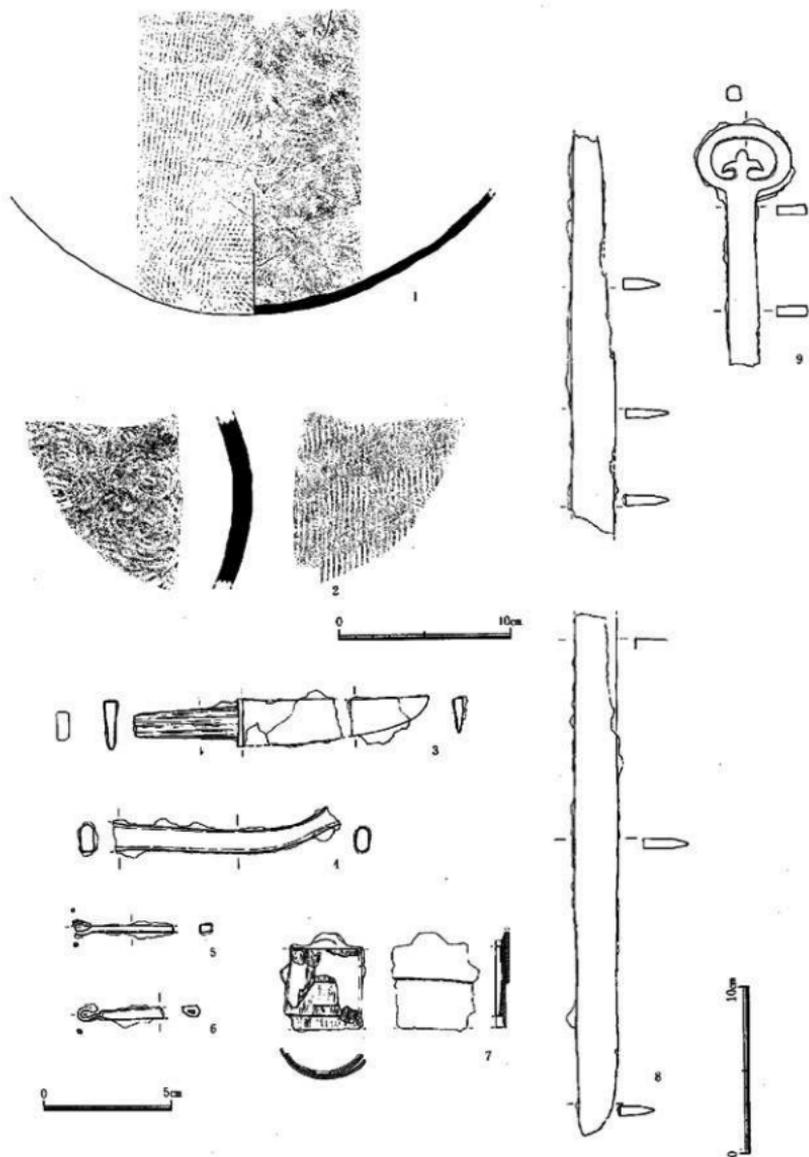


Fig 52 26号墳出土遺物実測図1 (1/3, 1/2)

が存在する。高さ75cm、幅40cmの柱状の石の周りに、20cmほど浮いた状態で4つの石が囲む。浮いた石の上面は現地表面とほぼ同レベルで、SX003、004と並ぶ位置でもある。新しい石組が偶然に石室の入口部に造られた可能性も考えられる。土層関係は土壌化した表土が厚く判断できなかった。

入口部には高さ50cmの柱状の石を立てる。袖石的な位置にあるが、掘り方に入っていない。右側には見られないが、石がない箇所があるので抜かれた可能性もある。仕切石のうえには40cm大の薄い石がのる。前庭部側壁は厚みのない30cm大の石を1段のみ配す。墓道は確認できなかった。

#### 4) 遺物出土状況

玄室からは三葉環頭の大刀をはじめとした鉄器が出土した。大刀は石室奥壁近く中央に刀先を奥壁に向け57cmの部分でおれたもの8と、逆に柄頭を奥壁に向けた状態9の2点で、接合しない。8は刀先を床に接するが身の部分が17cmほど浮く。9も20cmほど浮いた状態である。4は8の刀先に錆によりついた状態で出土した。その他刀子3と吊り金具5、6が入口部よりの床直上から出土している。墳丘からはbトレンチの4層中から甕の底部破片1が出土した。形を残して出土しており、くぼみに正置した状態であった可能性がある。2は墳丘盛土からの出土である。

1は外面に疑似格子目叩きを施しはっきりと残る。上部は2、3cmおきに幅1cmの掻き目が見られ、叩きの方向が一定している。底部は丸底で摩擦もない。叩きの方向は不規則である。内面には同心円状の当て具痕が残る。2は厚手で外面は灰を被り、平行叩き痕と掻き目が見られる。内面は同心円状の当て具痕が残るがなでにより摩擦する。3は柄の部分に木質が残り、断面長方形を呈す。4は断面が長方形に近い楕円形を呈し曲がる。5、6は基部が細く曲げることで輪をつくる。7は把縁かと思われる。8は大刀で所々に木質がみられる。9は三葉の把頭で8につくものと思われる。象眼は見あたらなかった。

### (6) 27号墳

#### 1) 位置と現状

調査区の南端に位置する。6号墳が築かれた鞍部から尾根を10mほど登り、斜面が緩くなった地点に位置する。墳丘は西側が道路工事によって石室の大部分が破壊されている。伐採後、削られた斜面の観察によって確認できた。1974年の踏査の時には両袖式の横穴石室14号墳として記載があり、1983

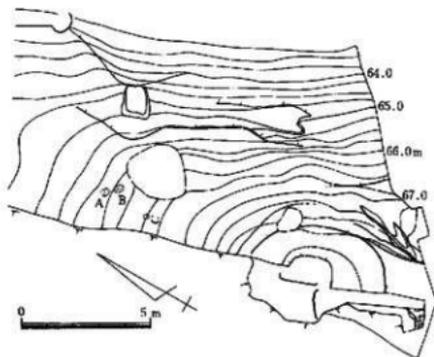


Fig 53 27号墳墳丘遺存状況図 (1/200)

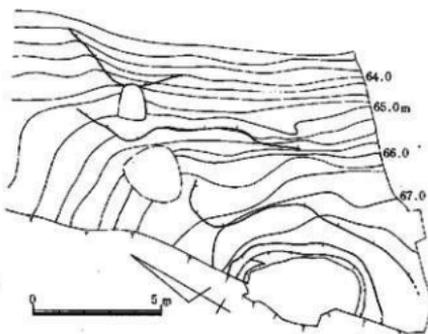
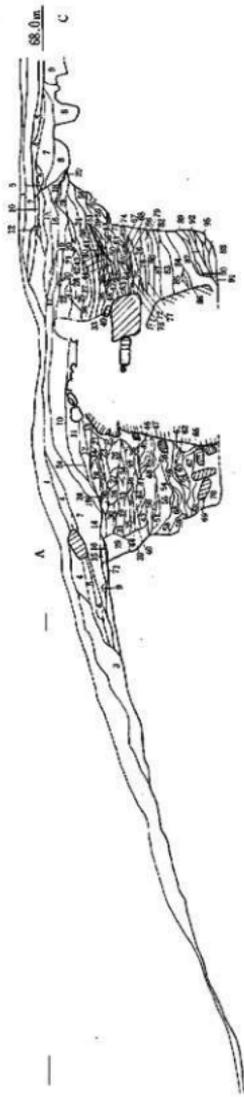


Fig 54 27号墳地山成形状況図 (1/200)



- 4トレンチ
1. 黄土 2. 黄褐色土 3. 赤土 4. 黄褐色土 5. 赤褐色土 6. 赤褐色土 7. 赤褐色土 8. 赤褐色土 9. 赤褐色土 10. 赤褐色土 11. 赤褐色土 12. 赤褐色土 13. 赤褐色土 14. 赤褐色土 15. 赤褐色土 16. 赤褐色土 17. 赤褐色土 18. 赤褐色土 19. 赤褐色土 20. 赤褐色土 21. 赤褐色土 22. 赤褐色土 23. 赤褐色土 24. 赤褐色土 25. 赤褐色土 26. 赤褐色土 27. 赤褐色土 28. 赤褐色土 29. 赤褐色土 30. 赤褐色土 31. 赤褐色土 32. 赤褐色土 33. 赤褐色土 34. 赤褐色土 35. 赤褐色土 36. 赤褐色土 37. 赤褐色土 38. 赤褐色土 39. 赤褐色土 40. 赤褐色土 41. 赤褐色土 42. 赤褐色土 43. 赤褐色土 44. 赤褐色土 45. 赤褐色土 46. 赤褐色土 47. 赤褐色土 48. 赤褐色土 49. 赤褐色土 50. 赤褐色土 51. 赤褐色土 52. 赤褐色土 53. 赤褐色土 54. 赤褐色土 55. 赤褐色土 56. 赤褐色土 57. 赤褐色土 58. 赤褐色土 59. 赤褐色土 60. 赤褐色土 61. 赤褐色土 62. 赤褐色土
- 5トレンチ
1. 根 2. 根 3. 根 4. 根 5. 根 6. 根 7. 根 8. 根 9. 根 10. 根 11. 根 12. 根 13. 根 14. 根 15. 根 16. 根 17. 根 18. 根 19. 根 20. 根 21. 根 22. 根 23. 根 24. 根 25. 根 26. 根 27. 根 28. 根 29. 根 30. 根 31. 根 32. 根 33. 根 34. 根 35. 根 36. 根 37. 根 38. 根 39. 根 40. 根 41. 根 42. 根 43. 根 44. 根 45. 根 46. 根 47. 根 48. 根 49. 根 50. 根 51. 根 52. 根 53. 根 54. 根 55. 根 56. 根 57. 根 58. 根 59. 根 60. 根 61. 根 62. 根

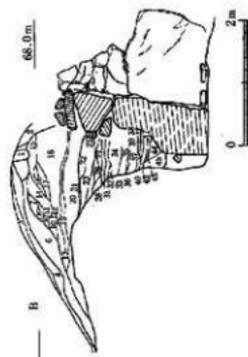


Fig 55 27号墳墳丘土層断面図 (1/80)

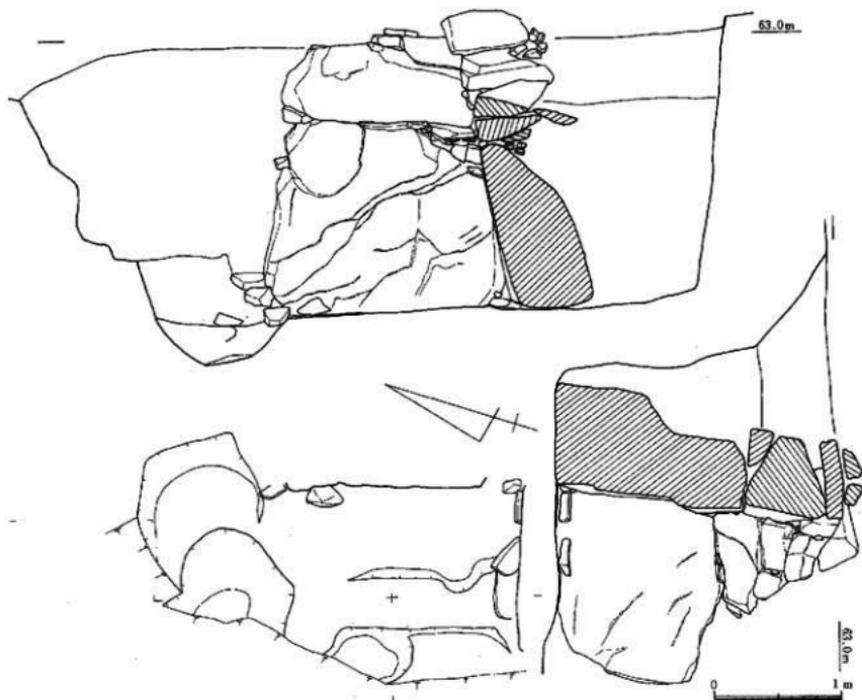


Fig 56 27号墳石室実測図 (1/40)

年までの間に破壊を受けている。現状では墳丘も流れ、尾根の一部となり外見のみではわかりにくい。

## 2) 墳丘

**地山整形** 墳丘の土層を見る限りでは旧地表面は見られないが、a トレンチの地山の勾配はごく自然であり旧地形を残す可能性もある。b トレンチの部分はⅡ区の途中から尾根の頂部を削り平坦部をつくる。Ⅲ区からc トレンチは斜面を弧状に削出し墳形を形づくる。c トレンチ付近はさらに削平した面が調査区外に広がると思われる。

**墳丘** 崩壊、流出の度合いが大きい。残存する盛り土は削平面をほぼ基底とする。盛土は地山と同じ花崗岩の風化土を主に用いる。まず最初に石室の裏込めを兼ねた盛り土を行う。この段階の層は下部ほど砂質の強い土で締まりがない。色調、粘質の度合いで細かく分かれるが、掘り方が2.3mと深いため1、2箇所不整合面がある。最下層は腰石を立て、裏から流し込むように埋め、腰石の上面付近で一度不整合面を形成する（a トレンチ45層以下）。次に腰石と2段目を粘土で裏から固め、掘り方をほぼ埋めてしまう。この段階も砂質の土である（a トレンチ30層以下）。第2段階として第2段目の石の裏に盛るように土を積み上げていく。この段階には腐植土が混じる（a トレンチ11層以下）。c トレンチでは外側をいったん高く盛る（c トレンチ28層以下）。この段階以降はやや粘質の土を盛

っている。この段階の途中に長さ50cmの石を石室掘り方の上端に沿うようなプランで弧状に配す。土層図でトレンチでは5層の上面、bトレンチでは18層の上、cトレンチでは16層の上にいる。墳丘の径は南北の確実な盛土の範囲で8mを測る。

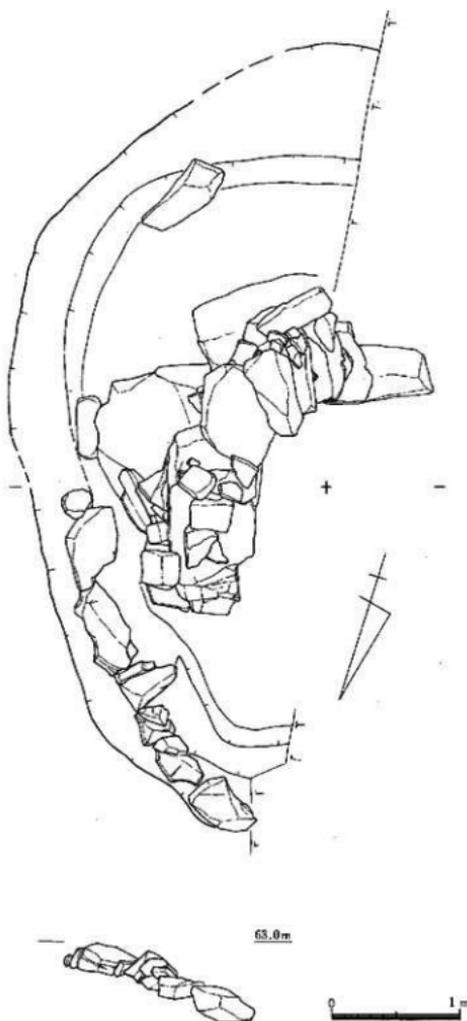


Fig 57 27号墳石室跡略図 (1/40)

### 3) 石室

奥壁と右側壁の一部が残存するのみである。左側壁の腰石は抜き跡により推測できる。主軸はN-73°-Eにとり、東側の谷部へ向かって開口する両袖単室の横穴式石室であることが知られている。

**石室掘方** 一部しか残っていないが、丸い長方形プランで、上部0.5mは傾斜が緩く稜をなしてほぼ直に掘り込む。南側で深さ2.3mを測る。奥壁が掘り方いっばいに置かれるのに対し、側壁部では余裕がある。現状上端で幅6.1m、下端で4.3mを測る。

玄室玄室長は残存する範囲で1.5m、幅は2.0mと推測される。腰石には奥、側壁とも巨大な石を使う。奥壁は高さ1.5m、幅2m、厚さ0.8mの1石を腰石とし、2段目に高さ0.6m、幅1.4mの石で面を揃え、前傾する。右側壁は現状では高さ1.2m、幅1.5mの腰石に70cm、40cmと次第に小さな石を持ち送る。腰石の下には厚さ5cmの石を詰め、支えに使ったと考えられる。左側壁も同様の状況が予

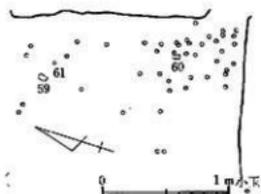


Fig 58 27号墳遺物出土状況図 (1/40)

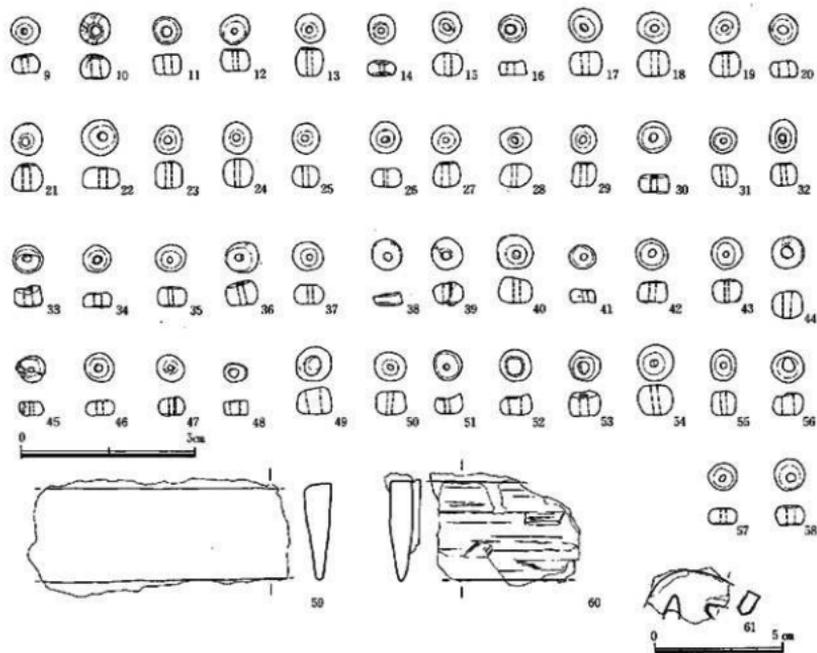
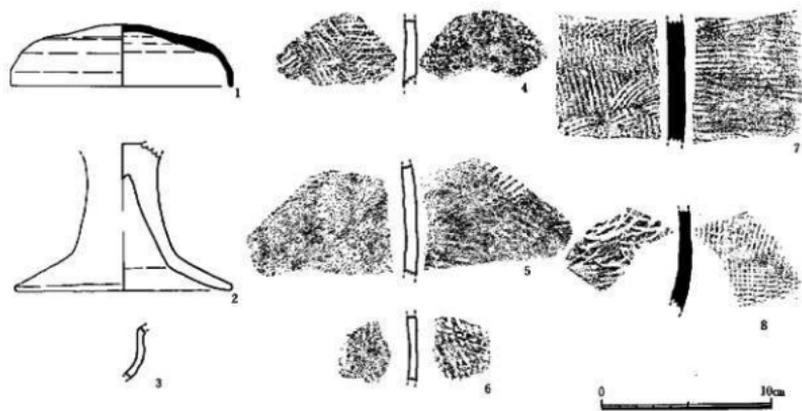


Fig 59 27号出土文物实测图1 (1/3、2/3、1/2)

想される。現状で高さ2.3mを測る。

床は掘り方直上までガラス小玉が出土しており、堀方がそのまま床になる可能性もある。

#### 4) 遺物出土状況

女室からはガラス小玉48個(9~58)、鉄刀の破片59、60、東61が出土した。小玉は奥壁前、特に右側に集中している。10cmのレベル差があるが、現位置を反映するものと思われる。いずれにしても盗掘で荒らされているのは確かであろう。

墳丘Ⅰ区からはA、B、C群は土師器が散らばる。いずれも黄褐色を呈し外面に平行叩き、内面に当て具痕もつ壺と、高杯の破片があるが摩耗しており接合するものも少ない。壺は2次焼成を受けたものが見られる。墳丘盛土からは土師器片や須恵器の杯、提瓶等と思われる破片が出土した。

1は須恵器の杯蓋でⅢ区の盛土中より出土した。天井部に回転彫削りは施さず。一部を削るのみである。2は土師器の高杯の脚でC群の出土である。粗れが著しい。3は土師器で高杯の杯か鉢になると思われるが小片のため不明である。4から6は土師器の壺の胴部破片である。4から7は外面に平行叩き、内面には平行する当て具根が残る。7は外面に疑似格子目叩き痕が残る。ガラス玉は濃紺のものがほとんどであるがやや澄んだ色のものもある。59、60は刀の破片で離れて出土したが大きさが近く、同一個体の可能性もある。61は鋤と思われるが、孔の方向が不自然である。

### (7) 28号墳

#### 1) 位置と現状

26号墳の隣に、尾根筋よりやや東の谷側に降りた所に位置する。当初マウンドは見られず、表土を剥ぎ、石組を検出した。天井石はなかった。石室は他と異なり1基だけ東側の谷に向かって開口する。

#### 2) 墳丘

**地山成形成** Ⅳ区の墓道を削り段を造る。また馬蹄形状の周溝を地山を掘削する事で成形成する。この他には周囲の地形との顕著な地形変換点も見られず、緩やかな傾斜面に位置することもあり、大きな地山の成形成はなかったと思われる。

**墳丘** 流出し、ほとんど残っていない。aトレンチの4、5層、bトレンチの4層がその名残と考えられる。花崗岩の風化土を主に用いている。墳丘の裾は南北の周溝の下端で4.5mを測る。

#### 3) 石室

本墳の埋葬施設は主軸をN-115°-Wにとる無袖単室の横穴式石室である。石室は天井石を失うのみと考えられる。石室は長方形のプランを呈し、仕切石を配す。それを根石にして閉塞施設が見ら

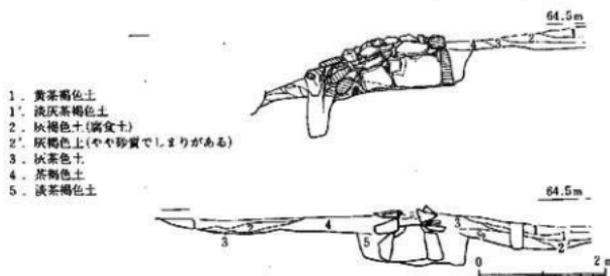


Fig 60 28号墳墳丘土層断面図(1/80)

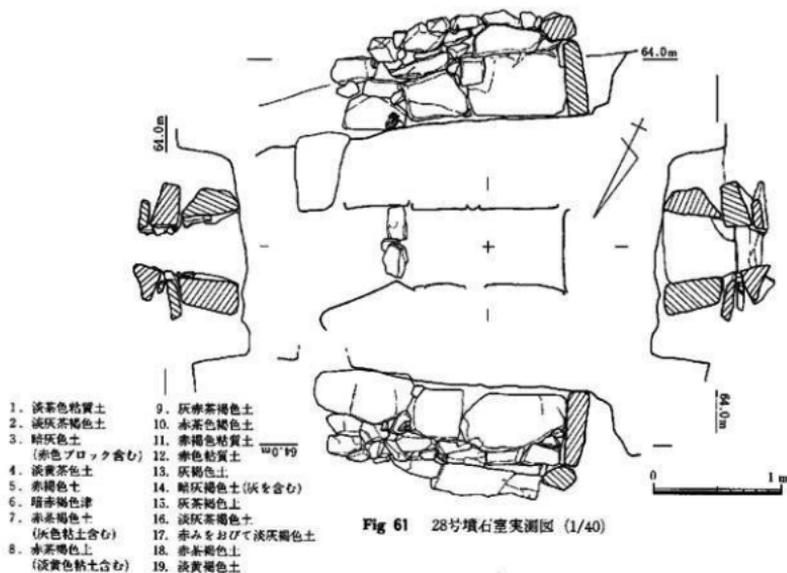


Fig 61 28号墳石室実測図 (1/40)

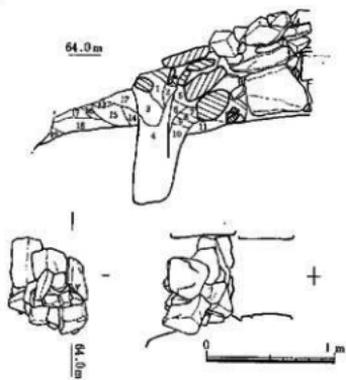


Fig 62 28号墳閉塞状況図 (1/40)

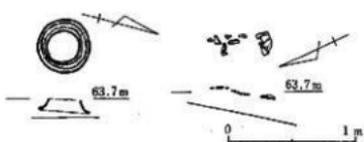


Fig 64 28号墳石室掘方実測図 (1/40)

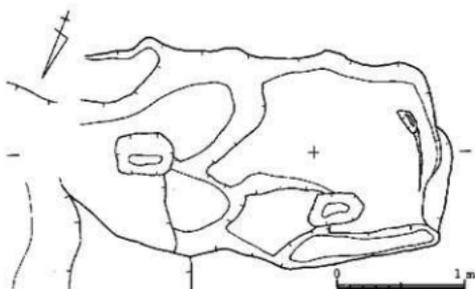


Fig 63 28号墳石室軸線図 (1/40)

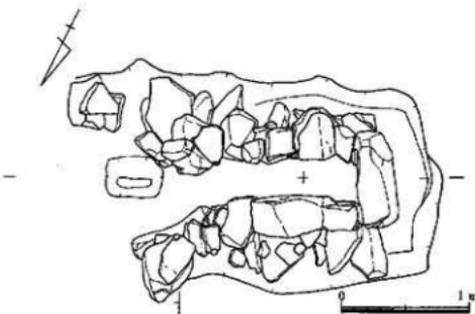


Fig 65 28号墳遺物出土状況図 (1/40)

れる。石室全長は右壁で1.9m、左壁で1.75mを測る。石材は花崗岩である。

**石室堀方** 長方形を呈し墓道部分まで続けて掘削し、東側は斜面が落ちるとともに掘り方は消える。基底部は墓道側に浅い段を重ねる。掘り方は40cmを測る。長さは上端が消える個所までで2.75m、幅1.7mを測る。石室との間には余裕がある。

**玄室** 玄室長は奥壁から仕切石までが1.25m、奥幅0.65m、前幅0.6mを測る。腰石は、奥壁は幅60cm高さ55cm、厚さ16cmの板石を1石配す。側壁は左右とも奥から80cm、40cm幅の2石を配す。2段目からは主に30cm幅の石を積むが、60、80cm大のものも見られる。天井石は失われているが、そう遠くない位置に置かれたものと思われる。現存で高さ0.9mを測る。床面ははっきりと押さえきれなかった。仕切石の高さより、基底面から5cm程度は底上げしていたと考えられる。側壁は右側は幅70cmの板石を墓道へ広げて配し、左側は50cm大の石を玄室から直線的に並べる。2段目からは玄室と続けてやや小さめの石を積む。さらに、墓道に面する部分は横に積んで墓道側に面を揃える。

閉塞施設は仕切石に接して30から40cm大の石を3、4段積み上げて塞ぐ。その外側には45×33cm、深さ60cmのピットが閉塞石に接して掘られる。土層を見る限りでは、閉塞前に掘られ、径23cmほどの柱を立てたと考えられる。墓道は墓抗から連続して東へ延びる。長さ0.7mを確認できた。墓道に面した前庭部側壁で幅1.7mで、次第にすぼまり、現存で1mを測る。

#### 4) 遺物出土状況

遺物はわずかしか出土しなかった。玄室からは4、5と同一個体と思われる疑似格子目叩きを残す薄手の須恵器の甕と薄い土師器片が出土した。墓道からは須恵器の甕5、6等や2に接合する破片、土師器片が出土した。墳丘下ではA群で墳丘IV区の地山上に甕の頸部のみ倒置してあった。墳丘上ではB群で1、2が破砕した状態で出土した。

1は口縁部外面の厚い突帯状の高まりに鈍い沈線を施す。肩部が張り、細い3本筋記号を施す。頸

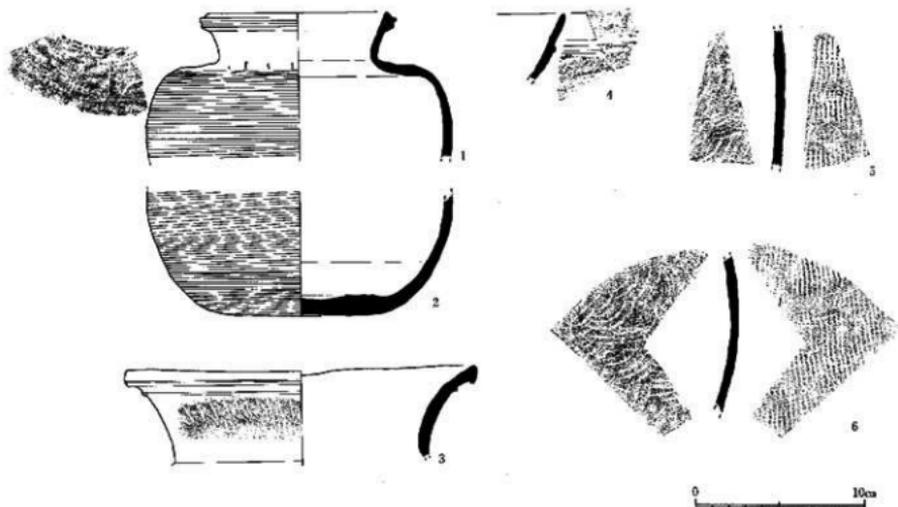


Fig 66 28号墳出土遺物実測図 (1/3)

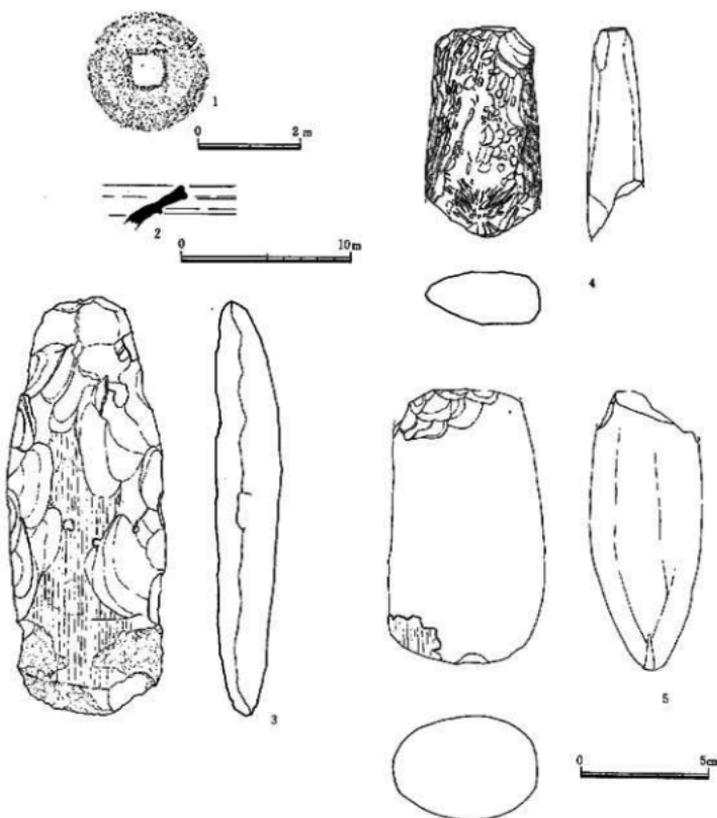


Fig 67 その他の遺物実測図 (1/1、1/3、1/2)

部の付け根から胴部に掻き目を施すが肩部までは後の回転などで調整により不明瞭になる。焼きはややあまく、茶色をおびた灰色を呈す。2は平底の底部で接合はしないが1と同一体と思われる。B群と墓道の破片が接合した。外面には掻き目を施す。底には掻き目の前段階にへら削りを施し、掻き目がおよばない径5cmの中にみられる。1、2は接合しないが同一個体と考えられる。一部墓道出土の破片が接合した。肩が張り、特異な器形である。底は回転へら削りを施す。焼きはあまく、瓦質である。3は甕の口縁部で、口縁下に細い突線を持ち、さらに波状文を施す。頸部より上は完形で屈曲部できれいに割られている。4は高杯の口縁部で口縁下に突線を作り出す。その下には波状文を施す。5、6は須恵器の甕で外面に疑似格子目叩きを施し、2、3cmおきになる。内面は同心円状の当て具痕が見られる。

(8) その他の遺物

墳丘等から出土し、遺構と遊離した遺物をまとめて示す。

1は銅銭である。2は須恵器の甕の口縁部に口縁下に小さくシャープな突起を付す。3は局部磨製石斧である。安山岩系の石材かと思われるが、風化が著しく斜離調整ははっきりしない。特に刃部付近は風化による斜離が進んでいる。研磨は中央部にみられる。4は槌打痕が全面にはっきりと残る。

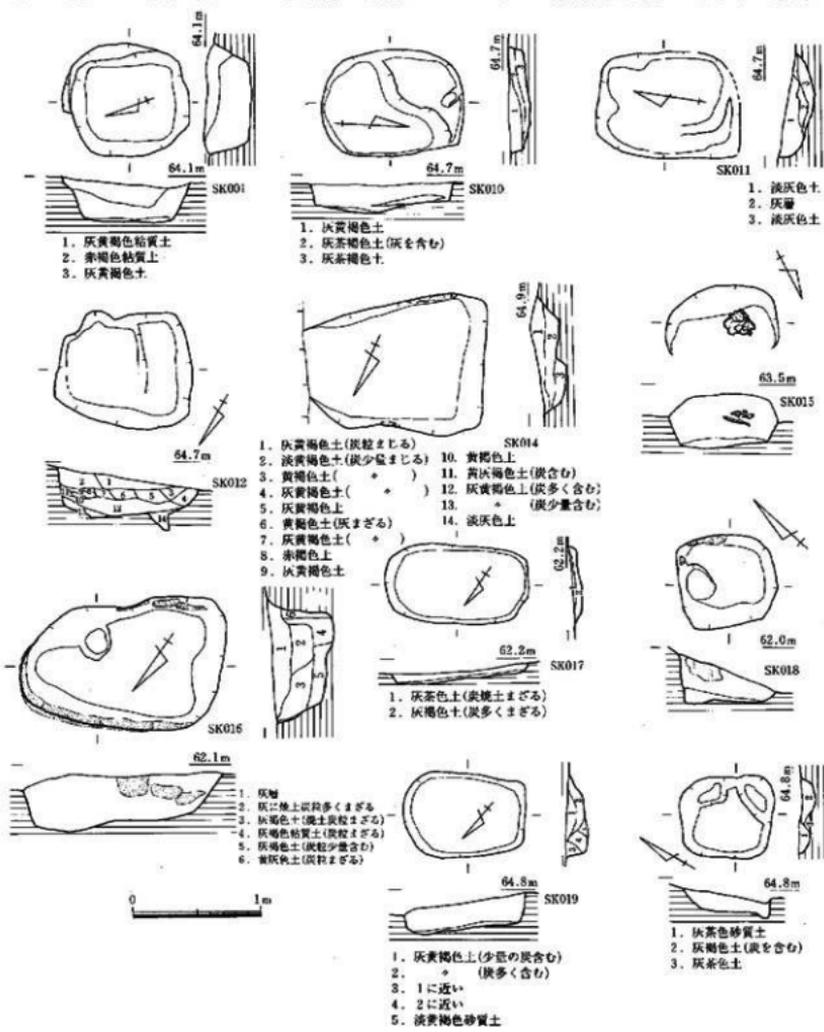


Fig 68 土坑実測図1 (1/40)

下部は欠損する。5は磨製石斧だが表面がはげ、刃部が一部残るのみである。

### (9) 土坑

古墳の周りに12基の土坑を検出した。そのうち10基は焼土坑で、古墳の墳丘築造後に掘られている。

**SK001** 26号墳の南に位置する焼土坑である。隅丸の方形を呈し、長さ100cm、幅91cm、深さ35cmを測る。遺物は須恵器の甕の破片と糸切り底の土師皿の小片が出土した。Fig 46、26号墳のCトレンチの土層から見ても古墳構築後に掘削しているが、大きく時間が経っていない感もある。主に炭混じりの灰色土を覆土とする。東側と南側の壁が焼成により赤変する。

**SK010** 6号墳の南に位置する。楕円に近い長方形を呈し、南側がわずかに落ちる。長さ113cm、幅85cmを測る。遺物はごく薄い須恵器の小片と土師器の甕の胴部と思われる破片が出土しているが凶化していない。土師器は厚手と薄手のものがあるが、いずれも砂粒を多く含み器面が粗れる。外面に平行叩き痕が見られるものがある。

**SK011** SK010南に位置する。隅丸の長方形を呈し長さ113cm、幅85cm、深さ22cmを測る。壁に焼けた痕跡はないが覆土には少量の炭が含まれ、焼土坑と思われる。遺物は土師器の甕の破片が出土している。1は内面に平行の当て具痕が見られる。

**SK012** SX011の南に位置する。不整形を呈す焼土坑で長さ105cm、幅92cmを測る。北半は掘りすぎた。東半が5cmほど下がる。覆土は下部ほど炭が多く混ざる。西側の壁がわずかに焼成により赤変する。遺物は土師器の甕の破片が出土しているが粗れている。2、3は甕の口縁部で、3は外面を縦方向の刷毛目調整の後ヨコナアを施す。内面胴部は削り調整が見られる。4は甕の胴部で外面に平行叩き痕が見られる。他に内面に平行叩き痕があるものもある。

**SK013** 27号墳の北に位置する。隅丸の方形を呈し長さ80cm、幅52cmを測る。遺物は土師器の甕が出土している。5は外反する口縁部に開き気味の口縁帯がつく。口縁帯には浅い沈線が入る。

**SK014** 27号墳の東側の斜面に位置する焼土坑で、東側が狭まり削平を受ける。現存での長さ140cm、幅は西で110cm、東で55cmを測る。壁の一部が焼成により厚さ1cmが赤変する。厚さ1cmほどの片面に細かい砂が付着した焼壁状のものが出土している。

**SK015** SK014より下の斜面をテラス状に切り、土師器の甕の上部がつぶれた状態で出土した。掘り方は幅広の楕円形を呈し、長さ110cm、幅55cm、深さ33cmを測る。出土した土師器7は外反する口

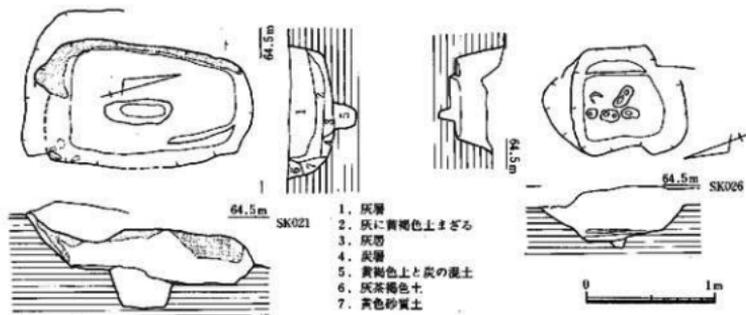


Fig 69 土坑実測図2 (1/40)

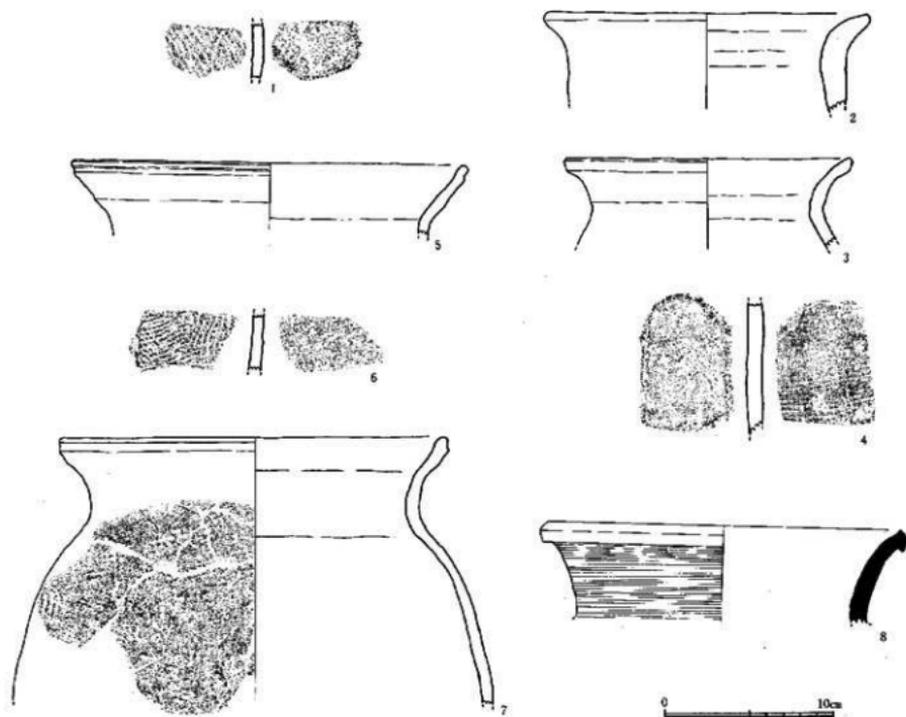


Fig 70 土坑出土遺物実測図 (1/3)

縁部に口縁帯が付き、肩部はだれる。器面は粗れており調整ははっきりしないが外面には平行引きが残る。

**SK016** 26号墳の東に SK017 と並ぶ焼土坑である。隅丸の不整形方を呈し長さ156cm、幅108cm、深さ43cmを測る。埋土は炭、灰を多く含み、壁は焼け、還元焼成により青くなる部分がある。遺物は8が出上した。須恵器の臺の口縁で外面に掻き目調整が見られる。

**SK017** 縦長の楕円形を呈す。長さ112cm、幅53cm、深さ7cmを測る。壁は焼けていないが、埋土に炭を多く含んでおり焼土坑と思われる。

**SK018** 7号墳の東の斜面に位置する。隅丸の方形を呈し長さ78cm、幅74cm深さ38cmを測る。壁がわずかに焼成により赤変する。覆土には炭を多く含む。

**SK019** 7号墳と6号墳の間に位置し SK020 に切られる。6号墳 b トレンチの4層の下で検出した。墳丘の築造後の掘削である。隅丸の方形を呈し長さ95cm、幅70cm、深さ18cmを測る。壁は焼けていないが覆土に炭が混ざっており焼土坑と思われる。遺物は出土していない。

**SK020** 隅丸の方形を呈し長さ73cm、幅65cm、深さ18cmを測る。覆土の炭が多く混ざり焼土坑と考

えられる。遺物は出土していない。

**SK021** 28号墳の南側に位置する焼土坑で不整形長方形を呈す。風化した岩盤を掘って築く。長さ180cm、幅100cm、深さ40cmを測る。床は斜面が下がる東側が10cmほど落ちる。中央には縦長の穴がみられる。側壁の焼けは著しい。覆土には炭を多く含む。

**SK026** SK021の西、8号墳寄りの比較的平坦な場所に位置する焼土坑である。壁が崩れ不整形だが方形に近い。長さ90cm、幅80cm、深さ40cmを測る。床に10cm大の穴が見られる。壁は焼けは見られないが、覆土には多くの炭を含む。

#### (K) 石組状遺構

尾根筋に沿って石組遺構が点在した。立石を伴うものが多く、伐採時に頭を出していたものが多い。下部構造は表土下に達するものは検出できたが、土壌化した表土が厚く、検出できていないものもあると思われる。丁度、横に広がる石が構築時の地表面と考えられる。遺物の出土はまったくない。

**SX002** SX003、004 とほぼ一直線に並ぶ。26号墳の玄室入口部に位置し、石室の閉塞石の可能性がある事は先に述べた。高さ75cm、幅25cmの石を立て、周囲には立石の中位に薄い石を巡らす。下部構造は不明である。

**SX003** 高さ75cm、幅60cmの石を立て、周囲に立石の底より10cm浮いた位置に40cm大までの石を巡らす。下部構造は検出できなかった。周囲の石の下が構築時の地表面と思われる。

**SX004** 高さ60cm、幅60cmの石を立て、周囲に5cmほど浮いた状態で40cm大までの石を巡らす。周囲の石の下面が構築時の地表面と思われる。

**SX005** 8号墳と7号墳の間の鞍部に位置する。立石はなく50cm大までの角石が固まる。下部構造は検出できなかった。

**SX006** SX005のすぐ東に位置する。長方形の掘り方に、高さ70cm、幅75cmの石を立て、周囲に40cm幅の石を掘り方の中に詰める。掘り方は長さ104cm、幅66cm、深さ24cmを測る。

**SX007** 7号墳の北側の墳端に位置する。長さ80cm、幅43cm、深さ20cmの長方形の土坑に長さ60cm大の4石で塞ぎ周囲に30cm大の角石を配す。

**SX008** 7号墳と6号墳の鞍部に位置する。高さ90cm、幅70cmの石を立て、周囲に30cm大の石を配し、前面には東側に30cm大の板石を1列に並べ、西側には10cm大の小石を配す。下部構造は、立石下に掘り方があるが他には検出できなかった。掘り方は周囲の石が床より25cm上で出ていることからさらに上からの掘り込みである。

**SX009** 6号墳墳丘上に位置する。高さ65cm、幅45cmの石を立て、周囲に40cm大の石を配す。その平坦面は造らず墳丘の傾斜のままに並べる。下部構造は検出できていない。

**SX026** 27号墳の南に位置する。高さ30cm、幅45cmの石を中心に40cm大までの石を配す。その下には10cm大の石が固まって出土した。下部構造は検出できなかった。

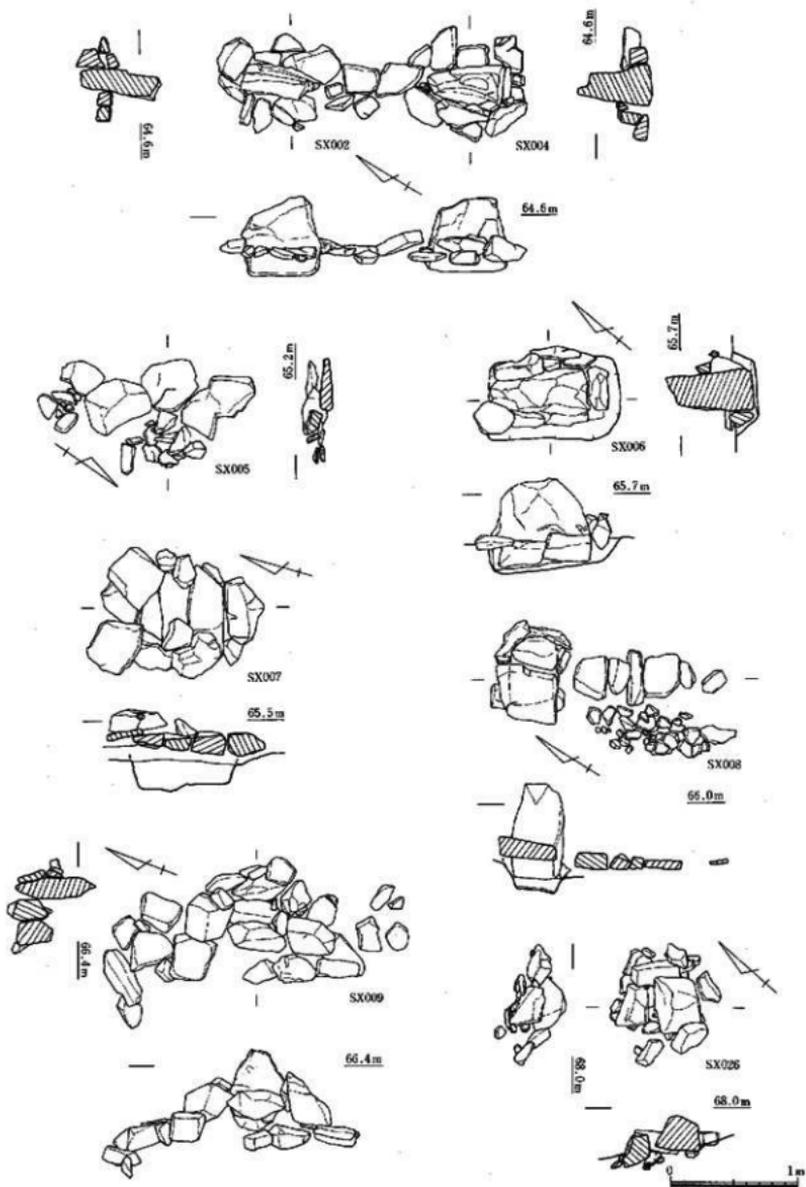


Fig 71 石組遺構実測図 (1/40)

### 3 II 区の調査

26号墳から北東の平蔵池へ向かって短い支尾根が出る。傾斜は急で尾根として顕著なものではない。この尾根がやや緩やかにになる標高54m付近で焼土坑を検出した。この部分には1.5m幅の進入路が入り50cmほどの削平を受けている。調査に至る経緯は前述の通りである。

まず尾根筋に設定したトレンチの周囲を重機にて表土を削いだ。伐採を行っておらず、排土置き場の関係もあって、その範囲は傾斜の緩い尾根筋と西側斜面の限られた範囲である。また、進入路に削られた壁にSK022の断面が出ており、これについても調査を行った。

#### (1) 遺構と遺物

##### 1) 土坑

**SK022** かなりの急斜面を掘削した焼土坑である。通用路により北側が削られている。斜面に向かって長軸を取り長さは現況で1.05m、幅1.1m、深さ0.4mを測る。床は周囲の傾斜と同じ方向に落ちる。床から壁にかけて一部焼成により赤変する。

**SK023** 長方形プランを呈す焼土坑である。北側の立ち上がり不明瞭ではっきりととらえる事ができなかった。長さ1.5m、幅1.25m、深さ0.45mを測る。埋土には多くの炭を含み壁は焼成より一部赤変する。遺物は出土していない。

**SK024** 木の根で攪乱され、プランは開き気味のコーナーのみ確認できる。1.5m×1.1mほどの範囲に粉状の炭層が広がる。壁は焼けていない。

**SK025** 不整長方形を呈し、長さ1m、幅0.83m、深さ33cmを測る。埋土は上層の1層に粉状の炭がたまるが下部はあまり炭を含まない壁が一部赤変する。1が出土した。短形の甕でひずんでやや扁平になると思われるが反転復元した。精良な胎土で外面に掻き目を残す。

##### 2) その他の遺構と遺物

SK023の南側の深さ20cm、1m四方より遺物が集中して出土した。遺構、遺物包含層の存在を予想して検出に努めたが周囲と同様の淡黄褐色土層からの出土を確認したのみで検出できなかった。遺物

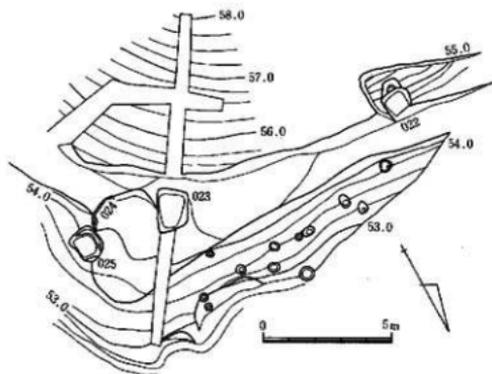


Fig 72 II区全体図 (1/200)

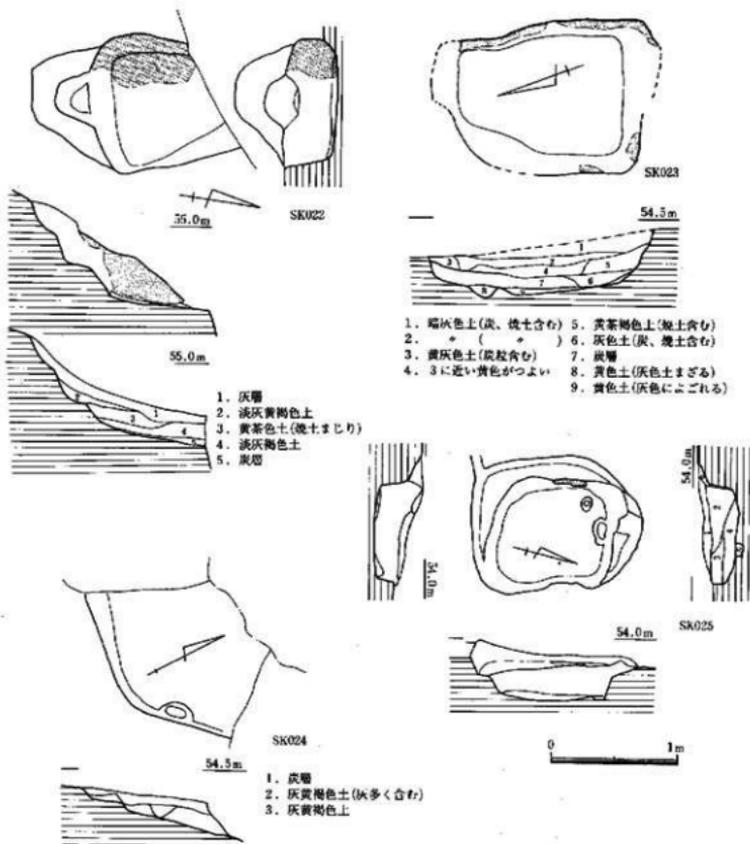


Fig 73 土坑実測図 (1/40)

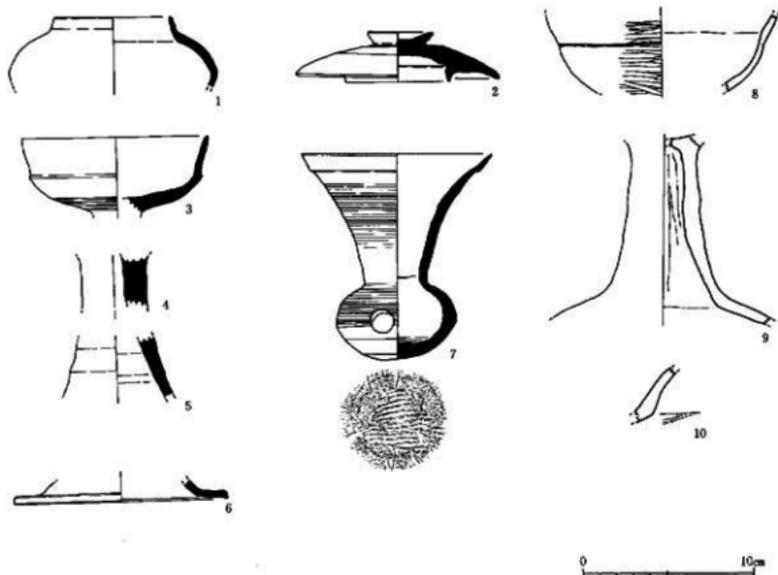


Fig 74 土坑出土遺物実測図 (1/3)

は須恵器、土師器が出土した。2は須恵器の壺で天井部の2/3に回転ヘラ削りが見られる。3は高杯の杯部で杯部の底に掻き目が残る。4、5、6は高杯の脚で、精良な胎上で焼成が甘く同一個体と思われる。7は甕でラッパ状に開く口縁部は外面に鈍い段がつく。長い頸部には掻き目が見られる。体部は頸部に比べ小さく偏平で、算盤玉状を呈す。肩には張りがあり、最大形は体部1/2に求められ後がつく。上半は掻き目が残り、下半は回転ヘラ削りを施す。底には平行叩き痕がみられる。8から10は土師器である。8は鉢で頸部に細い沈線を施す。外面には横方向のヘラ磨き調整、内面は丁寧なナデ調整を施す。9は高杯の脚部で内面に絞り痕がある。器面は粗れており調整不明。10は高杯の杯の屈曲部と思われる。器面は粗れており2次調整を受けている。

この他西側の斜面にピットを検出したが有機的なまとまりは見られない。遺物の出土はない。木の根等の可能性もあろう。

### 第3章 女原上ノ谷製鉄址第1次調査の記録

#### I はじめに

##### 1 調査に至る経緯

女原上ノ谷遺跡は高相山から糸島半野にのびる支尾根が枝別れした先端部に位置する。これまで支尾根に挟まれた谷部で鉄滓が採集されており製鉄址の存在が予測されていた。

西区女原18-1に藤原氏による山林造成が計画された。この地は女原上ノ谷遺跡に位置している。藤原氏より、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に埋蔵文化財事前調査願が提出された。

事前審査願を受け埋蔵文化財課は平成1年10月17日試掘調査を行った。その結果、遺構、遺物が確認された。その後、造成計画は延期されていたが、平成5年に実施されることになり、申請地の遺構の存在が予測される西側斜面について発掘調査を行うことになった。調査は平成5年9月6日から行い9月18日に終了した。工事に関わる面積は2165㎡であり、調査面積は238.5㎡である。

##### 2 調査組織

調査委託 藤原勲

調査主体 福岡市教育委員会教育長 尾花剛

調査総括 文化財部長 後藤直

埋蔵文化財課長 折尾学

埋蔵文化財課第1係長 横山邦嗣

調査庶務 埋蔵文化財課第1課係 中山昭則(前任) 内野保英

試掘担当 埋蔵文化財課第1係 横山邦嗣 佐藤一郎 吉留秀敏 菅波正人

調査担当 埋蔵文化財課第1係 池田祐司

調査作業 鬼塚正之 柴田シズノ 橋宏子 徳重コマキ 徳永千鶴子 徳重忠子 西田マキエ

間セツコ 三苦ヒサノ 森友ナカ

整理作業 上田保子 前田みゆき

#### II 調査報告

##### 1 調査の概要

対象地は北に延びる丘陵の先端部と西側の谷部である。このうち丘陵東側斜面は急斜面で市道の工事にともなう土取りにより削られ、遺構の遺存はないと見られる。試掘も、これを除いた丘陵西側斜面と頂部で行った。頂部では遺構、遺物は見られなかったが、西側斜面では、焼上坑、平坦面状遺構を検出した。

本調査時には、すでに西側の谷部から斜面にかけて盛り土とコンクリート塀による土留め工事が行われており、斜面部については可能な限り掘削したが、下部および谷部については調査を行っていない。調査は50から70cmの表土を重機で除去することから始めた。その結果、黄茶褐色の花崗岩風化土の上面で9基の土坑を検出した。この検出面は南に位置する溜池建設の際に削ったとの地元の方の話もあり、当初の地形をどれほど残すものかは判らないが、いずれにしても急勾配地であったことには変わらないと思われる。調査区内では斜面上部の標高47から48mに風化しきれていない花崗岩が露出しそのすぐ下の急斜面にSK001、002、007といったテラス状の遺構が検出された。その下からやや傾斜が緩くなるが標高43.5m付近傾斜変換点があり、さらに落ちる。北側のSK003、004、005付近では傾斜はかなり緩くなる。

女原上ノ谷製鉄址は以前から鉄滓が採集されており製鉄遺跡として知られていたが、今回の調査ではSK001で1点、SK005でやまとまって出土しただけで、明確な製鉄遺構を検出できなかった。

## 2 遺構と遺物

**SK001** 急斜面に段状のテラスおよび緩傾斜面を造成する。標高45.5m付近から標高47mの花崗岩露頭までを幅4m弱にわたって掘削し向かって右奥にのテラスと左側に2面の緩傾斜地がみられる。埋土は上層に黒褐色土、下層に茶褐色土が自然堆積した状況がみられた。テラス上にはピット等他の施設はみられず遺構の性格を知る上で手がかりとなるものは特にない。

遺物は上層では1から4cm大の炉壁と焼けた土塊、下層で9と67gを測る鉄滓1点が出土した。炉壁は内面がガラス化したものがあり、粘土塊は淡い黄色を呈し丸みを帯びる。あわせて370gになる。9は短頸の壺の頸部付近と思われる。肩がわずかに張り、胴部はあまり丸みを持たないものと思われる。器壁が薄い。器面は粗れており調整は不明である。

**SK002** SK001の南隣で検出したテラス状の遺構である。SK007がすぐ下にあり、一連のものの可能性もあるが別に扱っておく。幅1.6mをSK001と同様に掘削し2つの段を作り出す。この二つは別物の可能性もある。埋土は黄茶褐色土で遺物は出土していない。

**SK003** 北側のやや傾斜が弱くなった個所で検出した2.33m×1.57mの隅丸長方形の浅い土坑で床も水平にはならず傾斜している。埋土はしまりのない黒褐色でSK001の上層に似る。遺物は出土していない。

**SK004** 南端に位置する焼土坑で長方形を意識してはいるものの不整形を早す。北辺は攪乱によりプランがはっきりせず、南辺は地山中の礫により形に規制があったものと思われる。南西側は焼けている。遺物の出土はない。

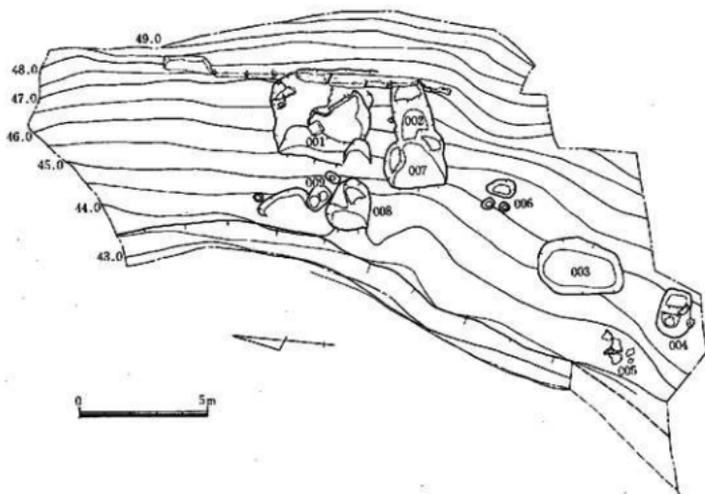


Fig 75 女原上ノ谷1次調査全体図 (1/200)

**SK005** 南側の落ち際に位置する。遺構検出時に鉄滓がみられ、周囲に溜まった灰黄褐色土を掘り下げた。鉄滓、炉壁はまとまった形にはならず粘土とともに散乱した状況であった。炉壁はスサ入りの粘土でできており内面はガラス化している。

**SK006** 個別に図示していない。SK009の北の幅2.1mほどの段落ちで30cmの段差になる。10が出土した。強く外反する甕の口縁部になると思われる。器面は粗れている。茶褐色を呈す。

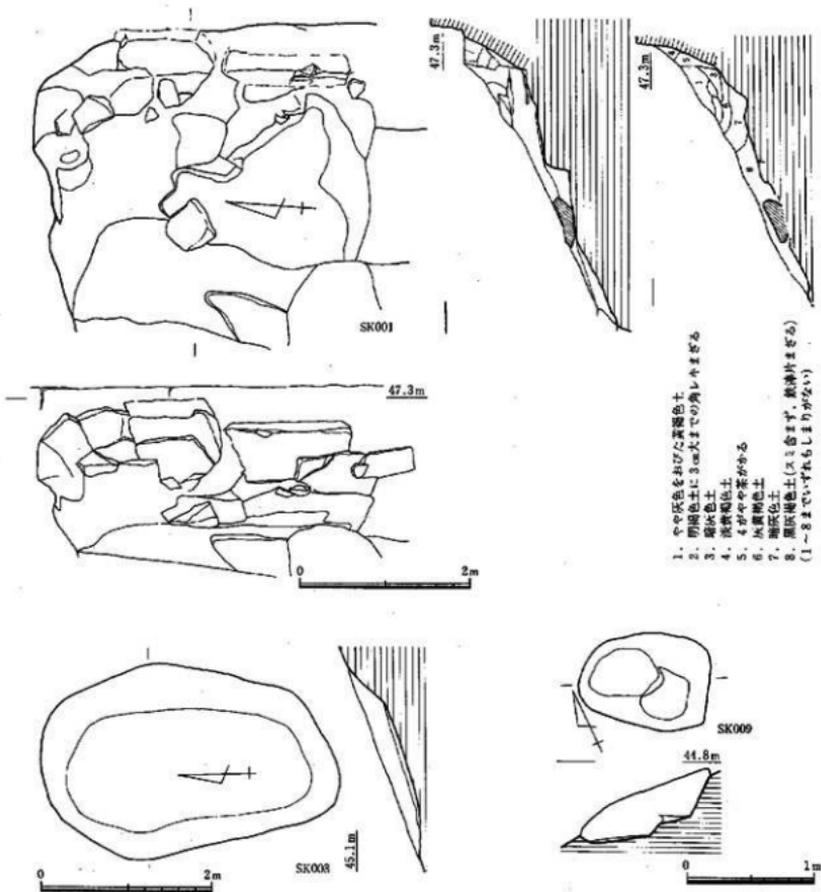


Fig 76 SK001, 003, 009実測図 (1/60, 1/40)

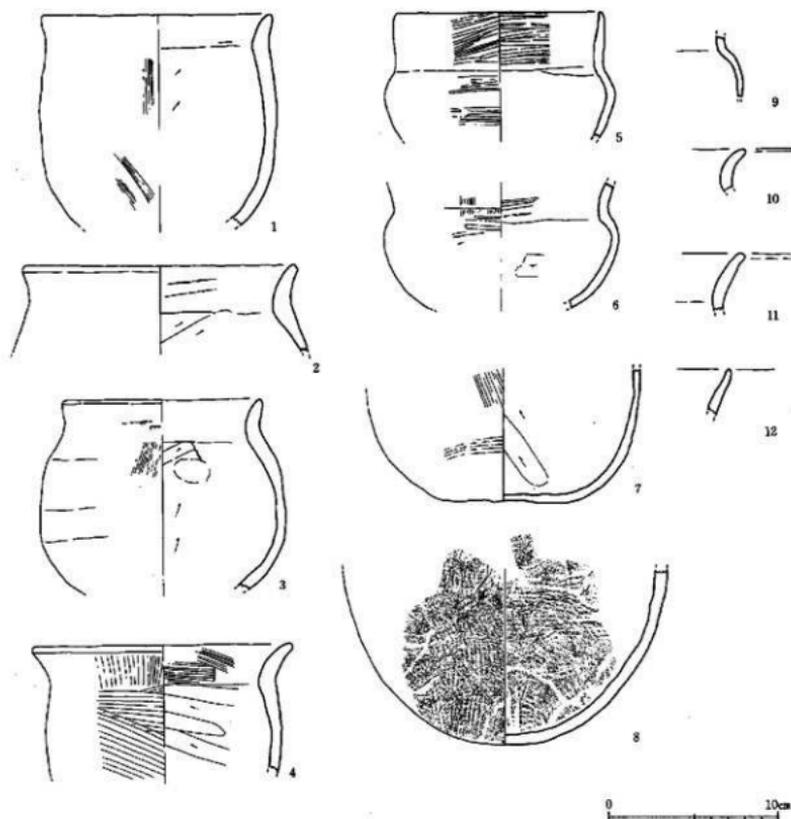


Fig 77 出土遺物実測図 (1/3)

SK007 SK002の下に位置する土坑状のテラスである。幅3mを測り奥行き1.8mを測る。両わきに小さなテラスがつく。埋土は黄茶褐色土で地山に近い。埋土から床面に掛けてまとまった土器が出土した。いずれも破片であるが図上復元できるほどの大きなものもある。1-8、11が出土した。粗れが著しく器面調整が明瞭でない。またいずれも茶褐色を呈す。1は短く外反する口縁部をもつ甕である。器壁の厚さが一定ではなく口縁部も3に近いやや薄手のものもある。内面は削り調整を施す。外面下部にわずかに刷毛目調整痕がみられる。4mmまでの砂粒を多く含む。1/3が残存する。2は1/4強からの復元口径が16cmを測る甕である。口縁部はヨコナデ、胴部内面は削り調整、外面は叩き痕がみられる。3は口縁部が緩く短く外反気味に立ち上がる甕で外面に刷毛目がわずかに残り、内面には削り調整が施される。器面は凹凸が多く、器壁の厚さも一定していない。4は大きく外反する甕の口縁部で1/4からの口径15.2cmを測る。外面は、刷毛目調整を口縁部に縦に施した後、胴部に

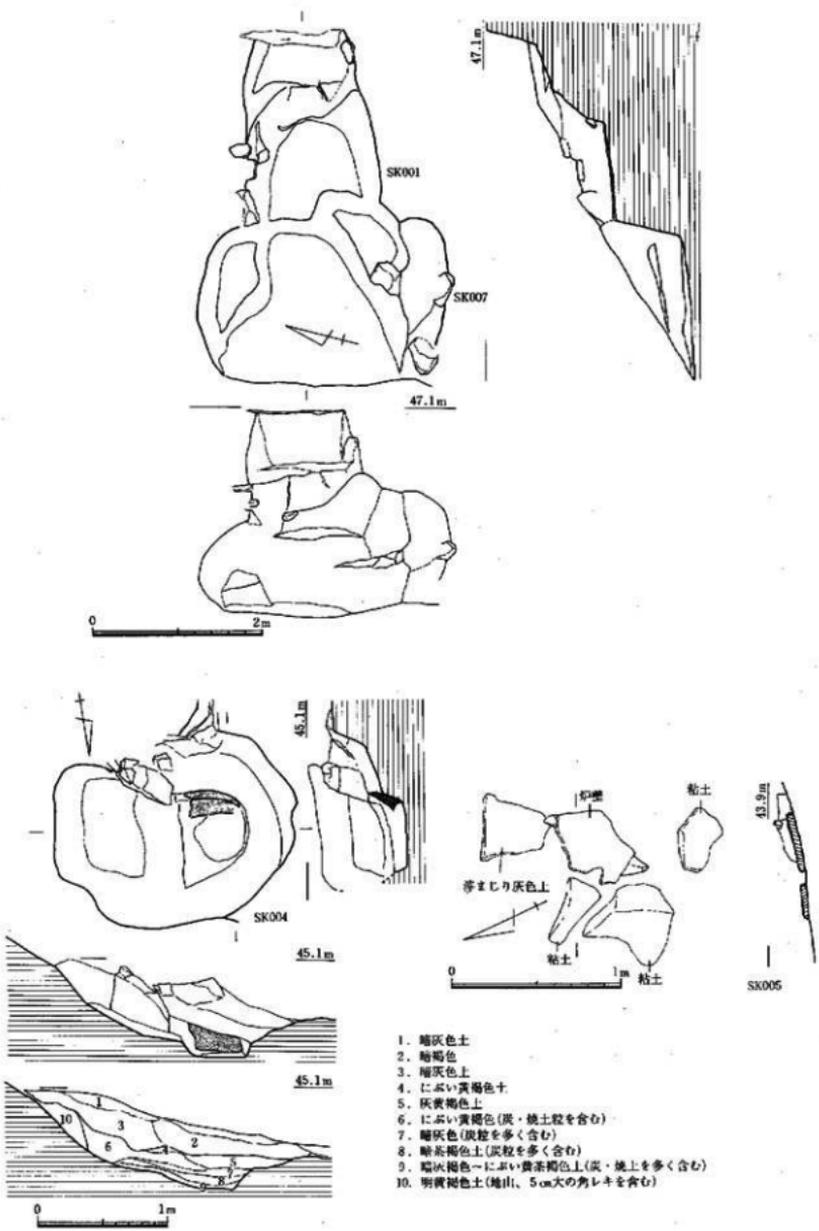


Fig 78 SK002, 004, 005, 007実測図 (1/60, 1/40)

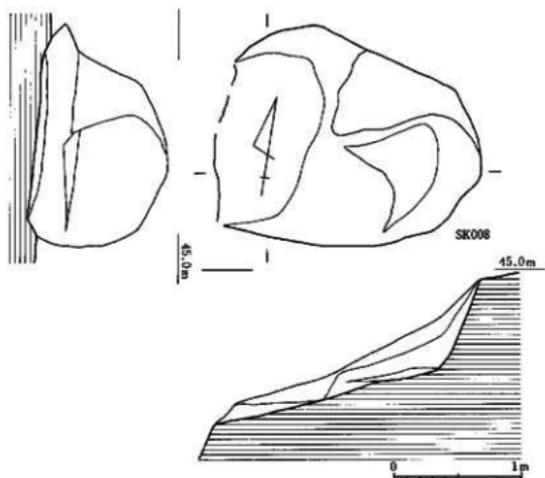


Fig 79 SK008 実測図 (1/40)

横方向に施す。目の幅が広く3mm強を測る。内面はL線部は横方向の刷毛目調整、胴部は削り調整を施す。2mmまでの砂粒を多く含む明るい茶色を呈す。焼きが他のものと比べて固い。5、6は砂粒を含むもの他と比較して精良な胎土の土器である。短い肩部を持ち、調整も丁寧である。5はやや薄手の甕の口縁部である。6は口縁部が外反気味に立ち上がる。外面は肩部に縦方向の刷毛目調整のちヨコナデを施す。胴部は平滑で研磨調整を施す。内面は粗い研磨調整を施す。7は薄手の胴部から底部で変になるものと思われる。外面には下部に横方向の、中位に縦方向の刷毛目がみられる。2mmまでの砂粒を非常に多く含む。8は球状を呈す胴部から底部で外面には格子目状の叩き痕、内面には当て具がみられる。11は内外面ともに粗い研磨調整を施す。

**SK008** SK001の下で検出したテラス状の遺構である。幅1.7mを測り、2段からなる。2つの遺構の可能性もあろう。埋土は黄褐色土である。遺物は出土していない。

**SK009** SK008の北に接するピット状の土坑である。鉄滓が出土している。

**SP010** SK006のすぐ上のピットで12が出土した。内湾気味の口縁部で5に近いものと思われる。

### 3 小結

製鉄遺構の検出が調査前から予測されていたが、遺構を検出することができなかった。SK005で炉壁が出土したが、周囲に製鉄炉と思われる遺構の存在を予想できる以上のものではない。調査区西側の谷部で鉄滓が採集されており、調査区の西側のレベルが低い緩傾斜地に遺構がある可能性も考えられる。またSK005より上のレベルにも存在したはずで、削平により消滅したとも考えられる。

SK001、002、007等の遺構は製鉄に関連するとすれば、SK001で鉄滓が出土しているものの少ない。またSK005に近いSK007では1点も鉄滓は出土していない。今回の調査では直接関連付けて考えるには不十分であるが、可能性として保留しておきたい。

SK007からはまもって土器が出土した。6世紀後半代のもと思われる、周囲の古墳群との関わりが予測される。

## 第4章 おわりに

徳永古墳群は8群基からなり、今回の7基を加えて17基が調査されたことになる。今回調査した7基はH群のなかでも南半の1群でさらに南にも分布するが1つのまとまりを成すものと思われる。

7基の古墳がそれぞれ特徴的な形態を持ち、分類し難いものがあるが、叙述の都合上4類に分けてふれていきたい。

1類：26号墳

2a類：7号墳 2b類：6号墳

3a類：9号墳 3b類：8号墳 3c類：27号墳

4類：28号墳

1類とした26号墳は、玄室長が2.26m、幅0.8m、玄室比3.4の狭長な平面プランを持つ。石室には腰石を配し、入口部に段差を有す。袖石は左側壁に立石が残り、両袖を意識したものと思われる。前庭部にはハの字形に開く側壁を配すが天井石がのることはない。いわゆる竅穴系横口式の範疇にいるものとおもわれ、柳沢一男氏の分類(1)でB型石室のⅢb期のB1型にあたる。

2類は北九州型石室または竅穴系横口式石室の系譜<sup>3)</sup>を引き、羨道を持たないものである。2a類とした7号墳は前者の特徴を有す。玄室は石室長3.05m、奥幅2.03m、前幅1.6mの羽子板状の平面形を呈す。玄室比は1.6である。袖石には左右に柱状の立石を配し、その間に段をもうけるが、墓道はほぼ水平である。玄室側壁には腰石を配し、前庭部は側壁がハの字形に開く。閉塞は板状石と塊石で行い、天井石は入口部までと考えられる。徳永古墳群D群2号墳、H群16、17、19も類似した入口部を持つが玄室の形態等後出する特徴を有する。2aとした6号墳は後者の系譜を引くものと思われる。玄室の長さ1.96m、幅0.9mを測り、玄室比は2.4と狭長である。羨道はなく、墓道に段が付く。袖は小振りの立石で板石と塊石で閉塞する。

3類はいわゆる両袖式横穴石室である。9号、27号墳は削平を受けているが、入口部より羨道が延びていたものと考えられる。3a類とした9号墳は1m大の石を腰石にし、やや大振りの幅の広い石室プランを呈す。これに対し2b類とした8号墳は腰石は小さく石室も狭長で小型である。閉塞石は板石と塊石で行っている。3個所に仕切石を配しやや特異である。3c類とした27号墳は1.5mを測る石を用いており、いわゆる巨石・巨室墳に属するものとおもわれる。

4類とした28号墳は長さ1.25m、幅0.6mの小石室であるが、玄室と前庭部が仕切石により分けられ、塊石による閉塞を行っている。袖石はないものの横穴式石室の特徴を備えている。H群20号墳が同規模の石室であるが閉塞石、横穴の付き方など相違点がある。

築造時期はまず石室の形態から26号墳が先行して5世紀末から6世紀はじめに築かれるものと思われる。土器はFig 52の1、2の甕のみである。石室からは環頭の大刀が出土しているが、矛盾するものではなからう。つぎに2類とした6、7号墳であるが、従来の石室の年代感からすると6世紀前半から半ばまでにおさまるものと思われる。両者間では近接しているが切り合いは認められず、盛土の土層からも先後関係はつかめなかった。異物では、7号墳墳丘のF群が小田編年のⅢa期のなかでも古い特徴を持っており、これが築造時期を表しているとするれば6世紀前半の古い時期をあてることができよう。6号墳はFig 10、11が古手であるが、7号墳との関係を考えるには難がある。しかし、選地の点から見れば、7号墳は尾根筋の高まりに築造しており先んじるものと思われる。8、9号墳は石室から6世紀後半の時期が想定されるが、出土遺物も小田編年のⅢb期におさまり、大まかであるが妥当なものと思われる。8号墳はFig 35の2、3が墳丘下から出土しており、築造時期に近い

と考えられる。9号墳の Fig 44 の 2、3 のセットと比べるとやや新しい傾向がある。27号墳は石室の形態から6世紀末から7世紀初頭の時期にあてておきたい。28号墳は時期を決め難い。小石室という形態からすると7世紀の時期を想定できるが、墳丘下、墳丘から Fig 66 の 3、4 のような古手の遺物が出土している。5、6も外面に掻き目を施し、26号墳の Fig 52 の 1 に類似する。1、2が時期不明で残るが、遺物からすると古くなるが、閉塞方法もそこまで古くなるのではない。26号墳の遺物がまぎれたと解することもできよう。とりあえずは石室の年代感でおさえておきたい。したがって築造順は26号墳—(7号墳、6号墳)—(9号墳、8号墳)—27号墳—28号墳ということになる。

つぎに造営期間についてふれておきたい。小玉の出土状況から6号墳に追葬が確認できることを先に述べたが、石室前面に備えられた遺物に存続幅が認められる。墓道右に正置されていた3・4、5・6のセットがⅢb期でこの時期までは使用される。7号墳はA群の遺物がやはりⅢb期である。8世紀代の遺物が1点あるが直接7号墳とは関係ない物と考えたい。これまでの関係を繰り返すと、5世紀末からはじめ頃に26号墳が築造され、続いて6世紀前半に7号墳、6号墳が築造され6世紀後半まで営まれる。その頃9、8号墳が築造され、6世紀末から7世紀初頭には27号墳が、7世紀代には28号墳が築造される。6世紀前半代で7号墳と6号墳が大型と小型の古墳で対をなし、そろって尾根筋に向かって開口する。また、墳丘Ⅲ区に杯身にセットで供え物をするという形態も一致する。後半代ではやはり9号墳、8号墳が大型、小型の対をなし、西の谷に向かって開口するという関係が成立している。同一集団が造営する墓域としてとらえることもできよう。

今回の調査では盗掘、工事による削平による遺物のかなり失われた状態であったが、鉄器等の副製品の片鱗を見ることができた。そのなかでも26号墳で出土した三葉環頭大刀は冶金学的調査によっても注目される結果を得ることができた。また、土器について胎土分析を行った結果陶邑産の物が目立った。今後、分析資料を蓄積すると共に、型式学的検討を進める必要がある。

また近年周辺では、徳永古墳群の北の丘陵裾の徳永遺跡Ⅲ、Ⅳ地点で6世紀後半から7世紀前半の集落が確認されている。住居跡7～8基、掘立柱建物3棟、その他溝、土坑が検出されておりさらに広がりを持つものと予想される。今回調査した古墳群とも重なる時期でもあり、被葬者もしくはその集団との関わり、その性格、背景等を知る手がかりになるものと思われる。

女原上ノ谷遺跡は小結でもふれたが、古墳群と重なる時期の可能性があり、その関わりに関心が持たれる。今回の調査では製鉄関係の遺構、遺物は検出できなかったが1975、79年の調査時に鉄滓が出土している。これらは、何らかの祭祀行為に意味をなしていたはずである。女原上ノ谷遺跡は徳永古墳群の東の谷にあり、女原古墳群との関わりがあるものと思われる。

遺構遺物について多岐にわたる問題点が指摘できようが、一部の点について触れるに留まった。また、時期決定遺物の位置づけについて多くの方々のお教示を得たが、生かすことができず不十分な報告となった。機会を改めて行っていきたい。

#### 注

- (1) 柳沢一男 (1982) 『堅穴系横穴式石室再考』『古文化論集』
- (2) 柳沢一男 (1986) 『九眼山古墳Ⅱ』  
土井基司 (1992) 『横穴式石室から見た群集墳の諸相』『九州考古学』67号

Tab 3 出土遺物観察一覧表

・土器玉類について記した。  
・法量 ( ) は復元径

徳永古墳群II群  
6号墳 [Fig. 14]

遺物 No.	種類	器種	出土地点	残存率	法量 (cm)	色調	焼成	ヘラ削り 範囲	備考
1	須恵器	杯身	墓道	1/8	受注-(1.46)	外: 5YR 5/3にぶい赤褐色 内: 10R 6/2赤赤	良、やや軟	2/3	
2	土師器	高杯	*	脚部	脚底径-9.3 脚高-6.0	外・内: 7.5YR 5/4にぶい 褐色	やや不良	—	
3	須恵器	杯蓋	A群 R1	ほぼ完形	口径-11.1 器高-4.3	外・内 5R 6/1青灰	良	1/2	
4	*	杯身	*	*	口径-13.0 器高-4.2	外: 5Y 6/3黄灰 内: 10BG 6/1青灰	*	1/2	
5	*	杯蓋	A群 R2	口縁部1/10欠損	口径-12.6 器高-4.3	外: 2.5GY 6/1オリーブ灰 内: 7.5GY 6/1緑灰	*	1/2強	
6	*	杯身	*	完形	口径-11.2 器高-4.1	外: 10BG 4/1暗青灰 内: 5Y 6/1オリーブ黄	*	1/2強	
7	*	高杯	A, B, C群	杯部欠損 肩部1/2欠損	脚底径-(11.3) 脚高 12.3	外: 10BG 5.1青灰 内: 5PB 5/1青灰	*	—	
8	*	*	B群	口縁部破片	—	外: 5B 5/1青灰 内: 5PB 5/1青灰	*	—	
9	*	甕	E群 R4, R2	底部1/2	—	外: 10BG 1/3暗青灰 内: 5BG 1/2*	*	—	
10	*	甕	C群 R1, R3, R6 E群 R1	口縁1/3 胴部破片	口径-(19.9)	外・内: 10BG 6/1青灰	*	—	
11	*	*	C群 R2	底部1/3弱	胴径-(40.6)	外・内: 10BG 6/1青灰	*	—	

6号墳 [Fig. 15]

種類	出土位置	径 mm	厚さ mm	孔径 mm	種類	出土位置	径 mm	厚さ mm	孔径 mm		
12	勾土	石室扉土中	14.1	9.5	3.0	23	ガラス玉	墓道	7.1-8.1	4.2-4.4	1.9
13	十石	*	6.9-7.8	5.4-6.5	2.1	26	*	*	8.6-9.6	5.6-6.4	2.4
14	ガラス玉	*	7.6-8.5	6.5-6.7	2.1	27	*	*	7.0-7.1	4.4-4.9	1.9
15	*	*	7.8-9.0	5.0-5.5	2.4	28	*	*	7.8	6.8-7.4	2.1
16	*	石室内床面	4.6-4.7	2.8	2.0	29	*	*	7.0-7.1	5.2	2.1
17	*	*	8.3-8.6	5.5-6.5	2.1	30	*	*	6.3	5.1-5.8	1.9
18	*	*	7.1-7.5	5.3-5.5	2.1	31	*	*	6.5-7.7	4.5-5.0	2.1
19	*	*	7.9-8.7	4.7-5.3	2.0	32	*	*	7.6-7.8	4.1	2.4
20	*	*	7.0-7.3	6.9-7.2	1.9	33	*	*	7.5-7.8	5.5-6.0	1.7
21	*	*	7.0-7.3	5.0-5.5	1.9	34	*	*	8.0-8.4	7.1	2.2
22	土玉	*	8.8-9.0	8.2	2.1	35	*	*	8.8-9.4	5.2	2.2
23	*	*	6.7+*	6.2+*	1.6	36	*	*	8.0-8.6	5.9-7.1	2.7-2.7
24	ガラス玉	墓道	7.8-8.5	6.6-7.2	2.1	37	上玉	*	7.8	6.7	3.5

7号墳 [Fig. 24, 25]

遺物 No.	種類	器種	出土地点	残存率	法量 (cm)	色調	焼成	ヘラ削り 範囲	備考
1	須恵器	壺	埋土 石室内 R1 表土	破片	胴径-(12.2)	外: 5BG 6/1青灰 内: 10BG 5/1青灰	良	1/3	
2	*	壺	石室	*	—	外: 7.5Y 5/2褐灰 内: 10Y 2/1褐灰	*	—	
3	土師器	杯身	墓道 R1	*	—	外・内 10YR 8/4洗黄褐色	不良 軟	—	斗流付
4	須恵器	壺	墓道 R2	*	—	外: 7.5GY 6/3緑灰 内: 10YR 8/4洗黄褐色	良	—	当て具痕 有
5	*	杯蓋	墳丘A群 R1	口縁1/6欠損	口径-13.7 器高-4.5	外: 5B 5/1青灰 内: 5PB 6/1青灰	*	1/2	
6	*	*	墳丘A群 R6	完形	口径-14.4 器高-4.2	外: 5PB 4/1暗青灰-5B 6/1青灰 内: 10BG 6/1青灰	*	*	
7	*	杯身	墳丘A群 R3	一部欠損	口径-12.2 器高-4.4	外: N4/1灰 内: N3/1暗灰	*	2/3	
8	*	杯蓋	墳丘A群	破片	—	外・内 10GY 6/1緑灰	やや不良 やや軟	—	
9	土師器	壺	A群 P'X, M3	口縁1/3	口径-(29.0)	外・内: 7.5YR 8/6洗黄褐色	やや不良 やや軟	—	

遺物 No.	種類	器種	出土地点	残存率	法量 (cm)	色調	焼成	へう割り 状態	備考
10	土師器	甌	A群 R5	把手のみ	断面径-3.7	外・内: 7.5YR 8/6浅黄緑	やや不良	—	9と同一か(?)
11	〃	高杯	墳丘A群 R15	口縁-13.7 器高-11.4 脚のへり一分欠損	口縁-13.7 器高-11.4	外・内: 5YR 3/6暗赤褐	不良 軟	—	
12	須恵器	杯蓋	墳丘C群 R2	部分的に欠損	口縁-14.7 器高-6.000	外・内 5B 6/1青灰	良	1/2	
13	〃	杯身	墳丘C群 R2	ほぼ完形	口縁-13.2 器高-13.8	外: 5B 5/1青灰 内: 10BG 6/1青灰	良	ほぼ全正	当て具痕有
14	土師器	高杯	墳丘C群 R1, R3	杯-2/2残存 脚のへり欠損	口縁-(12.6) 器高-12.1	外・内: 5YR 3/4暗赤褐	やや不良 軟	—	
15	須恵器	杯蓋	墳丘C群	ほぼ完形	口縁-13.3 器高-4.9	外: 5B 4/1暗青灰 内: 5PB 4/1暗青灰	良	2/3	
16	〃	杯身	墳丘C群	完形	口縁-11.5 器高-4.7	外: 10BG 5/1青灰 内: 10BG 6/1青灰	〃	2/3強	
17	〃	杯蓋	墳丘F群 R2	一部欠損	口縁-15.6 器高-6.3	外: 5PB 6/1青灰 内: 5PB 6/1青灰	〃	2/3	
18	〃	杯身	墳丘F群 R1	完形	口縁-13.5 器高-6.2	外・内 5PB 6/1青灰	〃	約1/2	
19	〃	杯蓋	墳丘F群 R3	部分的に欠損	口縁-15.2 器高-6.4	外・内 10BG 5/1青灰	〃	2/3	
20	〃	杯身	墳丘F群 R4	完形	口縁-13.5 器高-6.4	外: 5B 6/1青灰~N2/1黒 内: 5PB 6/1青灰	〃	〃	
21	〃	〃	墳丘F群 R5	1/2脚	口縁-(10.4) 器高-4.9	外: 5PB 4/1暗青灰 内: 5PB 6/1青灰	〃	1/2	へう記号有
22	〃	杯蓋	墳丘G群 R3.6, F群3	一部欠損	口縁-15.6 器高-6.1	外: 5B 6/1青~5PB 6/1青 内: 10BG 7/1明青灰	〃	2/3	
23	〃	杯身	墳丘G群 R5, 21	部分的に欠損	口縁-13.000 器高-6.5	外: 5B 5/1青灰 内: 5B 6/1青灰	〃	2/3	
24	〃	高杯	墳丘G群	破片	口縁-(15.6)	外: 10BG 5/1青灰 内: 10BG 6/1青灰	良 やや軟	—	
25	〃	杯蓋	〃	〃	—	外: 5BG 4/1暗青灰 内: 10BG 6/1青灰	良	—	
26	〃	〃	〃	〃	—	外: 5BG 5/1青灰 内: 10BG 5/1青灰	良 やや軟	—	
27	〃	〃	〃	〃	—	外: 7.5GY 5/1緑灰 内: 5G 5/1緑灰	〃	—	
28	〃	杯身	墳丘I群 R2	部分的に欠損	口縁-11.2 器高-5.0	外: N5/1R 内: 5B 5/1青灰	良	ほぼ全正	
29	〃	蓋	墳丘I群 R2	1/2	断面径-(14.2)	外: 5PB 6/1青灰 内: 7.5Y 8/1灰白	やや甘い	胴部下方 1/2	
30	〃	杯蓋	扇溝状遺構	1/6	口縁-(19.4)	外: 5B 5/1青灰 内: 10BG 6/1青灰	やや不良	—	
31	〃	杯蓋	扇溝状遺構	1/8	口縁-(14.3)	外: 5B 5/1青灰 内: 10BG 6/1青灰	〃	—	
32	〃	〃	6号北トレ	口縁部1/4破	口縁-(12.2)	外・内 7.5GY 7/1黄灰色	〃	1/2	
33	〃	〃	扇溝状遺構	1/3	口縁-(12.5)	外: N5/1R 内: 5PB 6/1青灰	良	—	
34	〃	杯身	Ⅲ区表土	1/7~1/8	口縁-(13.4)	外: 7.5GY 6/1緑灰 内: 5G 6/1緑灰	〃	—	
35	〃	〃	6号北トレ	口縁部破片	口縁-(9.9)	外: 5B 4/1暗青灰 内: 10BG 6/1青灰	〃	—	
36	〃	飯蓋	〃	口縁部破片	口縁-(8.3)	外: N5/1R 内: N3/1暗灰	〃	—	
37	〃	杯蓋	Ⅳ区表土	破片	口縁-(13.8)	外: 7.5Y 5/1灰 内: 7.5YR 5/1褐灰	〃	—	
38	〃	杯身	Ⅲ区表土	口縁部1/4欠損	口縁-(13.1)	外: 10BG 6/1青灰 5B 5/1青灰 内: 5B 6/1青灰	〃	—	
39	〃	杯	Ⅲ区表土	口縁~底部 部分的	口縁-(11.2)	外・内 5YR 5/2 灰褐 (赤味をおひ ふ)	〃	—	

8号墳 [Fig. 35, 36]

遺物 No.	種類	器種	出土地点	残存率	法量 (cm)	色調	焼成	へう割り 状態	備考
1	須恵器	提瓶	横溝	ほぼ完形	口縁-7.5 杯径-9.4 体厚-17.8	外・内: 7.5Y 6/1灰	良	—	
2	〃	杯蓋	盛り土 R1	完形	口縁-12.8 器高-3.2	外: 10YR 5/1緑灰 内: 7.5YR 5/1赤灰	良 やや軟	2/3	内面あて 具痕有

遺物 No.	種類	器種	出土地点	残存率	法量 (cm)	色調	焼成	ヘラ削り 範囲	備考
3	須臾器	杯身	盛り上 H1	ほぼ完形	口径—10.9 器高—4.1	外:10BG 6/1青灰 内:7.5YR 5/3にぶい地	良 やや軟 不良	2/3	此器は 具底有
4	土師器	鉢	盛り上	破片	—	外:5YR 3/4にぶい赤褐 内:2.5R 5/6明赤褐	—	—	—
5	須臾器	提飯	Cr 盛り上 I 層 N区墳丘 頂上	部分欠損	口径—(8.1) 器高—(20.0)	外:7.5Y 4/2灰オリーブ 内:5GY 6/1オリーブ灰	やや不良 軟	—	—
6	*	提飯	B群	破片	—	外:5B 5/1青灰 内:5B 6/1青灰	良	—	同心円 かき目有
7	*	*	*	破片	体厚—(14.8)	外:5B 6/1青灰 内:5B 6/1青灰	○	—	6と同一 の可能性 あり
8	*	杯蓋	*	1/2	口径—(14.9) 器高—3.9	外:10BG 5/1青灰(一部赤 味をおびる) 内:10BG 6/1青灰	*	2/3	ヘラ記号 有
9	*	*	B群周溝	口縁から天上部に かけて1/3	口径—12.6 器高—3.8	外・内 5R 5/1青灰	*	*	生焼け
10	*	杯身	Cr: I 層, 2 層 IV区墳丘 墳丘 B 群	口縁部1/5欠損	口径—12.4 器高—4.2	外:10Y 5/1灰, 7.5Y 7/1 灰白 内:5R 6/1青灰	*	1/2	—
11	*	*	B群	口縁部から底部に かけて1/4	口径—(14.4)	外:10GY 6/1緑灰 内:5YR 6/3にぶい地	不良	2/3	平生焼け
12	*	高杯	墳丘 B 群 表土	杯部1/3と残存 脚端部1/3欠損	口径—(12.6) 器高—9.6	外:7.5GY 5/1緑灰~10BG 4/1暗青灰 内:10BG 5/1青灰	良	—	—
13	*	*	B群	脚端部1/10	脚口径—(13.0)	外・内 10BG 5/1青灰	良, やや軟	—	—
14	*	甕	墳丘 A 群 R2, 3	1/2弱	胴径—29.8	外:5DG 5/1青灰 内:2.5Y 6/1オリーブ灰	やや甘い	—	—
15	*	樽蓋(?)	A群	約1/8	底径—14.5	外:7.5Y 6/3オリーブ灰, (地:5B 5/1青灰) 内:N6/1灰白	良, やや軟	—	全面に自然 熱付着・煮て

#### 9号墳 (Fig. 44)

遺物 No.	種類	器種	出土地点	残存率	法量 (cm)	色調	焼成	ヘラ削り 範囲	備考
1	須臾器	高杯	A群	ほぼ完形	口径—11.7 器高—13.9	外:10GY 5/1緑灰(下部一 部7.5R 4/3にぶい赤褐) 内:5GB 5/1青灰	やや不良	—	—
2	*	杯蓋	*	口縁部1/2 欠損	口径—(13.8) 器高—(4.5)	外:2.5Y 7/4浅黄~10BG 4/1暗青灰 内:5BG 6/1青灰	やや不良	2/3	—
3	*	杯身	*	完形	口径—(12.3) 器高—10.8 胴高—4.7	外・内 7.5BG 5/1青灰(点在) 5Y 6/3オリーブ灰	良	2/3	ヘラ記号 有
4	土師器	高杯	周溝	脚部1/2	口径—4.0 脚部径—4.0	外・内 2.5YR 4/4にぶい赤褐	不良, 軟	—	—
5	*	鉢	表土	破片	—	外・内 2.5YR 4/4にぶい赤褐	不良	—	—
6	須臾器	杯身	表土 I	1/4弱	受部径—(13.8)	外:5R 2/1青灰 内:10BG 6/1青灰	良	2/3	—
7	*	甕	*	破片	—	外:7.5Y 5/3灰オリーブ 内:7.RGY 5/1緑灰	*	—	自然熱付 着・煮て 具底有

#### 26号墳 (Fig. 52)

遺物 No.	種類	器種	出土地点	残存率	法量 (cm)	色調	焼成	ヘラ削り 範囲	備考
1	須臾器	甕	墳丘 II	1/5~1/6	—	外:5BG 5/1青灰 内:10BG 6/1青灰	良	—	甕て具底 有
2	*	甕	II	破片	—	外:2.5GY 4/1暗オリーブ 灰 内:5PB 5/1青灰	*	—	かるく自然 熱付着

#### 27号墳 (Fig. 59)

遺物 No.	種類	器種	出土地点	残存率	法量 (cm)	色調	焼成	ヘラ削り 範囲	備考
1	須臾器	杯蓋	盛り上 I 区	1/3弱	口径—(12.9) 器高—3.7	外:5B 6/1青灰 N 5/1灰	良 やや軟 不良	—	—
2	土師器	高杯	C群	脚部	脚径—(12.5) 脚高—8.8	外・内 2.5YR 5/6明赤褐	—	—	—

遺物 No.	種類	器種	出土地点	残存率	法量 (cm)	色調	焼成	ヘラ刷り 範囲	備考
3	土師器	鉢(?)	墳丘B群	破片	—	外・内 2.5YR 4/6赤黒 外: 2.5YR 4/3にぶい赤褐 内: 2.5Y 6/4にぶい黄	不良	—	2次焼成 著しい
4	*	壺	B群	*	—	—	*	—	—
5	土師器	*	盛り土層	*	—	外: 5YR 6/6褐 内: 10YR 7/7明黄褐	やや不良	—	—
6	*	*	墳丘A群	*	—	外: N1 5/1黒 内: 2.5Y 7/3洗黄	不良	—	—
7	須恵器	甕	盛り土Ⅱ	*	—	外: 5B 3/1暗青灰 内: 5B 4/1暗青灰	良	—	—
8	*	*	*	*	—	外: 7.5Y 6/2灰オリーブ 内: 5PB 5/1青灰	*	—	—

種 類	出土位置	径 mm	厚さ mm	孔径 mm	種 類	出土位置	径 mm	厚さ mm	孔径 mm
9 ガラス玉	石室Ⅰ	8.6~7.9	5.2~5.7	2.2~2.3	34 ガラス玉	石室Ⅰ	8.2~8.6	4.2~4.3	2.3
10 *	*	8.8~9.2	6.4~7.2	3.2~3.3	35 *	*	8.1~8.7	5.3~5.8	1.8
11 *	*	7.9~8.4	6.0~6.1	3.1~3.2	36 *	*	9.1~9.4	6.1~7.6	2.9
12 *	*	8.0~9.1	6.1~6.8	2.1	37 *	*	8.6~9.1	5.7~6.1	2.1~2.3
13 *	*	8.1~8.7	8.4~8.5	2.4~2.5	38 *	*	9.0~9.2	3.2~3.8	2.2~2.8
14 *	*	8.6~8.8	3.3~4.4	2.3~2.5	39 *	*	9.3~9.5	5.8~6.2	2.0
15 *	*	8.7~9.0	6.5~6.8	2.8~3.0	40 *	*	10.0~10.9	7.5~8.0	2.7~2.8
16 *	*	3.8~4.2	7.8~8.2	2.9	41 *	*	7.8	3.8~4.1	1.7~2.0
17 *	*	9.4~10.2	7.2~7.3	1.9~3.3	42 *	*	9.0~9.1	6.6	2.3~2.5
18 *	*	7.9~9.8	7.2~7.8	2.1~3.0	43 *	*	8.8~9.4	6.6~7.1	1.5
19 *	*	8.4~9.4	7.3	2.1~2.2	44 *	*	9.3~9.4	8.2	3.1
20 *	*	8.2~8.7	4.5~5.0	2.7~3.0	45 *	*	8.2	4.4	2.1
21 *	*	9.5~9.6	7.5~7.9	3.3	46 *	*	8.8~8.9	4.7~4.9	2.3~2.1
22 *	*	9.9~10.4	5.7~6.4	2.8	47 *	*	7.7~8.5	4.9~5.7	1.6~2.0
23 *	*	8.0~8.7	7.7~8.0	2.3	48 *	*	6.2~6.7	4.2~4.6	3.1
24 *	*	8.5~9.1	8.4~8.6	2.9~3.2	49 *	*	10.5~11.1	7.5~8.3	3.7~4.7
25 *	*	8.3~8.7	6.1~6.3	2.1~2.4	50 *	*	9.2~9.5	7.0~7.1	2.0~2.7
26 *	*	9.3~9.7	5.5~5.7	1.2~1.7	51 *	*	8.2~8.6	4.9~6.4	2.0
27 *	*	8.4~9.1	6.9~7.4	2.5~2.6	52 *	*	9.4~9.5	5.0~5.3	4.5~4.9
28 *	*	8.0~9.74	6.9	2.6~2.7	53 *	*	9.2~9.3	5.2~7.7	3.6~3.7
29 *	*	7.5~8.4	7.0~7.1	2.7	54 *	*	10.7~10.9	9.0~9.1	2.2
30 *	*	9.5~9.6	4.6~5.7	2.9	55 *	*	7.7~9.6	6.9~7.0	2.1
31 *	*	8.1	6.1~6.5	2.3~2.5	56 *	*	8.1~9.2	5.7~6.9	3.7~4.2
32 *	*	7.8~10.0	6.4~6.5	2.6	57 *	*	7.9~8.1	4.4~4.5	2.8
33 *	*	8.1~9.0	3.8~6.2	2.4~2.6	58 *	*	8.9~9.3	5.7~6.0	2.9~3.1

28分墳 [Fig. 66]

遺物 No.	種類	器種	出土地点	残存率	法量 (cm)	色調	焼成	ヘラ刷り 範囲	備考
1	須恵器	大口壺	A群 R1, 2, 3	1/2	口径—(15.0) 胴部径—(15.5) 胴部径—18.0	外: 10YR 5/2灰黄褐 内: 5G 5/1オリーブ灰	やや甘い	—	ヘラ記号 有 1と同一 (?)
2	*	*	墳丘A群	1/2	—	—	*	—	—
3	*	壺	B群 R1	口縁部のみ完形	口径—約80.9 胴径—80.5 胴高—5.4	外・内 10BG 5/1青灰	良	—	—
4	*	高杯	百墳丘	破片	—	外: 5B 5/1青灰 内: 5BG 6/1青灰	*	—	—
5	*	甕	墓道 R2	*	—	外: 5BG 5/1青灰 内: 10BG 6/1青灰	*	—	蓋て具載 有
6	*	*	墓道 R1	*	—	—	*	—	5と同一

十坑 [Fig. 70]

遺物 No.	種類	器種	出土地点	残存率	法量 (cm)	色調	焼成	ヘラ刷り 範囲	備考
1	土師器	甕	011	破片	—	外: 2.5YR 6/1赤灰 内: 5YR 6/5褐	不良 軟	—	—
2	*	*	012	口縁部約1/6	口径—(19.0)	外・内 2.5YR 5/6明赤褐 外: 7.5YR 5/6褐 内: 5YR 6/6赤	*	—	—
3	*	*	*	口縁部1/6	口径—(16.6)	外: 7.5YR 8/4にぶい橙 内: 5YR 5/4にぶい赤褐	*	—	—
4	*	*	*	破片	—	—	*	—	—

遺物 No.	種類	器種	出土地点	残存率	法量 (cm)	色調	焼成	ヘラ削り面	備考
5	土師器	壺	013	破片	口径-(22.6)	外・内 10YR 7/6	不良	—	
6	〃	〃	〃	〃	—	外：2.5YR 5/4にふい赤褐 内：10YR 6/4にふい黄褐	〃	—	
7	〃	〃	015	約1/6	口径-(22.2)	外・内 7.5YR 7/6橙	良	—	2次焼成を受けている
8	須恵器	〃	016	口縁部1/5	口径-(20.9)	外：SPB 4/1暗青灰 内：5GY 5/1オリーブ灰	〃	—	

## II区 [Fig. 74]

遺物 No.	種類	器種	出土地点	残存率	法量 (cm)	色調	焼成	ヘラ削り面	備考
1	須恵器	短頸壺	025	約1/4	口径-(6.7) 胴部径-(12.2)	外：N 4/1灰 内：10YR 6/1暗灰	良	—	
2	〃	壺	023南	ほぼ完形	器高-3.0 つまみ径-3.8	外：5BG 6/1青灰 内：5B 6/1青灰	〃	1/2	
3	〃	高杯	〃	杯部1/3	口径-(10.9)	外：N 3/1暗灰 内：7.5GY 3/1暗緑灰	〃	—	
4	〃	〃	〃	胴部(上) 破片	胴部径-(3.8)	外・内 10Y 5/1灰	良 やや軟	—	5, 6と同一か?
5	〃	〃	023南	胴部(中) 破片	胴部径-(5.4)	10Y 5/1灰	〃	—	
6	〃	〃	023付近	胴部(下) 破片	胴部径-(2.5)	〃	〃	—	
7	〃	壺	023南	口縁部3/4欠損	口径-(11.1) 器高-12.2 胴径-7.5	外：F.10G 6/1緑灰 下 5PB 3/1 暗青灰 内：F.5BG 5/1青灰 下 5PB 2/1 青黒	良	底部-胴部 1/2	底部に平行印あり
8	土師器	鉢	〃	破片	口径-(13.4)	外：5YR 4/6赤褐 内：5YR 6/6橙	〃	—	
9	〃	高杯	023南	胴部1/3	基部径-4.4	外・内 10R 4/8赤	やや不良	—	2次焼成を受けている
10	〃	〃	〃	〃	—	外・内：2.5YR 5/6明赤褐 2次焼成部：7.5YR 2/1黒	〃	—	〃

## 女原上ノ谷製鉄址 [Fig. 77]

遺物 No.	種類	器種	出土地点	残存率	法量 (cm)	色調	焼成	備考
1	土師器	壺	007	1/2強	口径 (13.6)	内・外 10YR 7/6明黄褐	良	
2	〃	〃	〃	1/4強	—	外 内 7.5YR 7/8黄橙	〃	
3	〃	〃	〃	1/2	口径 (11.8)	外：10YR 6/6明黄褐 内：7.5YR 6/8橙	〃	
4	〃	〃	〃	1/6	口径 (15.0)	外・内 5YR 6/8 橙	〃	
5	〃	杯	〃	1/2弱	口径 (12.0)	外：2.5YR 4/8赤褐 内：10R 4/8赤	〃	
6	〃	〃	〃	1/3	最大径 (13.8)	外：7.5YR 6/8橙 内：2.5YR 5/8明赤褐	〃	
7	〃	壺	〃	胴-底部	—	外・内 2.5YR 6/8橙	〃	
8	〃	〃	〃	胴-底部	—	外・内 5YR 6/8橙	〃	
9	〃	短頸壺	001	破片	—	外・内 2.5YR 6/8橙	〃	
10	〃	壺	006	〃	—	外・内 2.5YR 4/8赤褐	〃	
11	〃	〃	007	〃	—	外・内 2.5YR 5/8明赤褐	〃	
12	〃	〃	010	〃	—	外・内 2.5YR 6/4にふい赤褐	〃	

# 徳永古墳群出土土器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

1) はじめに

5・6世紀代の九州北部地域の古墳出土須恵器の産地は興味深い。5世紀代の古墳には大阪陶邑産の須恵器、地元の朝倉窯群の須恵器が検出されているが、6世紀代に入ると、朝倉群が見あたらなくなり、同時に、陶邑産の須恵器も減少する。これらに代わって、地元の小規模窯群の須恵器が検出されてくる。これがこれまでの分析データにみられた傾向である。この傾向を確認するには、まだまだ、分析データは少ない。

このような観点から、徳永古墳群出土須恵器の、蛍光X線分析が試みられたので、その結果について報告する。

2) 分析結果

試料の処理法、分析法などは従来の報告とおりである。

分析データは表1にまとめられている。全分析値は同時に測定された岩石標準試料 JG-1 の各元素の蛍光X線強度を使って標準化された値で表がされている。

今回は分布図上における定性的な方法によるデータ解釈に止めた。しかし、これでも大阪陶邑産が朝倉群かの判別はできる。なお、牛頭窯群については目下、基礎データを再測定中であるので、判別分析法はとらなかつた。

図1には Rb-Sr 分布図を示す。No. 5、7、9、10の4点が陶邑領域に分布し、陶邑からの搬入品である可能性を示す。他の試料は大阪陶邑産ではない。

図2には K-Ca 分布図を示す。この図でも、No. 5、7、9、10の4点の試料はほぼ陶邑領域に対応する。

No. 1、2の須恵器は Ca、Sr 量の多い須恵器である。これらは Rb-Sr、K-Ca 分布図での分布位置からみて、牛頭窯産の可能性がある。もし、そうでなければ陶質土器であろう。

No. 4、8の2点は産地不明であるが、このうち、No. 4はクエゾノ1号墳のNo. 3の試料と K、Ca、Rb、Sr 因子で類似するが、Fe 因子では異なる。考古学的な形式の類似性に注目される。また、No. 8は大阪府岸和田市の久米田古墳群出土須恵器のうち、産地不明となった1群の試料の胎土と類似している。いずれも、K、Rb 量のみならず、Ca、Sr 量も少ない胎土である。この特徴をもつ陶質土器はこれまでのところ、韓国側の出土品にもみられず、日本産の須恵器であると筆者は考えているが、対応する窯はみつかっていない。一応、ここでは、No. 4、8は産地不明としておく。

なお、No. 3、6の土師器は Ca 量は少ないが、Sr 量がやや多く、かつ、K 量が多い。両者は同質の胎土とみられ、同じところで製作された土師器とみられる。地元、九州北部地域の製品ではないかと思うが、目下のところ、比較対照する試料がないので、産地については触れないことにする。

表 1 徳永古墳群出土土器の分析値

No. 1	須恵器	カメ	6号墳C群	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	推定産地	挿 図
2	*	杯フタ	* A群	0.443	0.151	1.93	0.426	0.854	0.203	牛頭(?)	Fig. 14-10, 11
3	土師器	カメ	7号墳A群	0.478	0.332	2.53	0.530	0.720	0.443	*	Fig. 14 5
4	須恵器	カメ	* 表土	0.615	0.087	2.35	0.459	0.557	0.134	-	Fig. 24-9
5	*	杯身	* 表土	0.203	0.162	3.63	0.225	0.332	0.091	不明	Fig. 24-5
6	土師器	カメ	* B群	0.491	0.092	2.43	0.591	0.306	0.242	大阪陶邑	Fig. 25-38
7	須恵器	杯フタ	* F群	0.714	0.094	2.47	0.626	0.560	0.107	-	-
8	*	カメ	28号墳産	0.516	0.102	2.38	0.632	0.310	0.261	大阪陶邑	Fig. 25-19
9	*	ツボ	*	0.240	0.022	3.18	0.287	0.159	0.072	不明	Fig. 66-6
10	*	高杯	8号墳B群	0.467	0.123	3.16	0.495	0.215	0.104	大阪陶邑	Fig. 66-1, 2
				0.472	0.092	2.83	0.659	0.294	0.179	*	Fig. 36-12

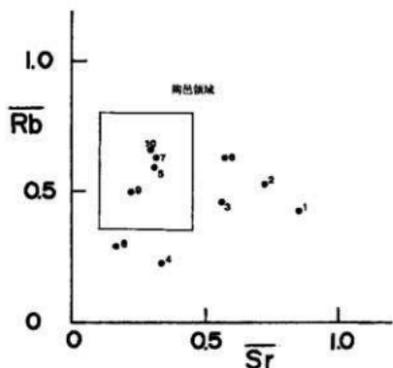


圖 1 Rb-Sr 分布圖

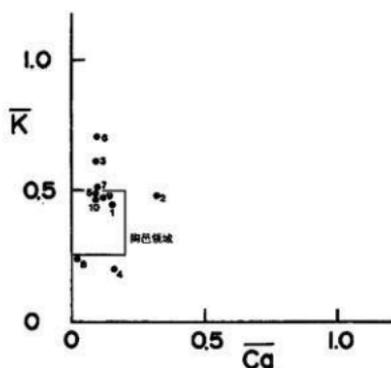
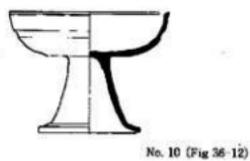
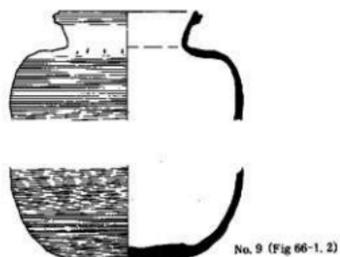
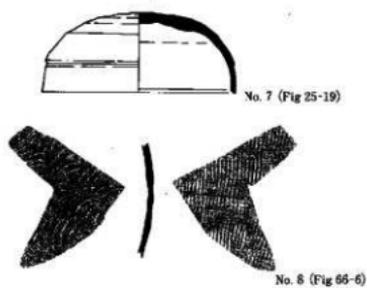
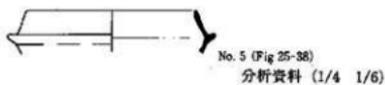
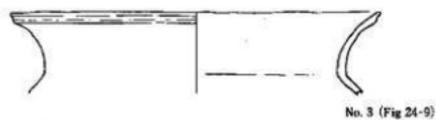
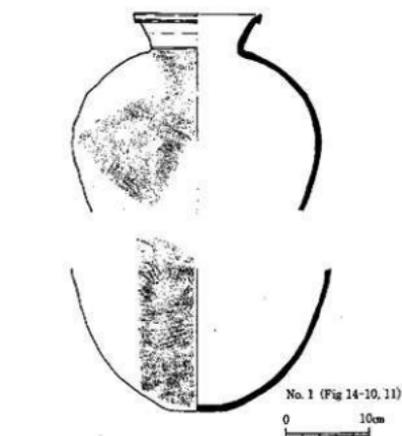


圖 2 K-Ca 分布圖



# 女原上ノ谷遺跡出土鉄滓と徳永古墳群H群26号墳出土 三葉環頭大刀の金属学的調査

大澤正己

## 概要

6世紀後半代の可能性をもつ女原上の谷遺跡 SK001 土壌出土鉄滓と、5世紀末～6世紀前半に比定される徳永古墳群H群26号墳出土の三葉環頭大刀の調査を行なって次の事が明らかになった。

### (1) 女原上ノ谷遺跡出土鉄滓

炉壁共伴出土鉄滓は、低チタン含有酸性砂鉄を始発原料とした製錬滓（炉底滓破片）に分類される。鉱物組成は、大量の大きく成長したヴスタイト（Wüstite: FeO）と、盤状結晶のファイヤライト（ $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）、これに少量の金属鉄を晶出した炉底滓傾向を顕著に呈する。また、化学組成は、二酸化チタン（ $\text{TiO}_2$ ）1.48%、バナジウム（V）0.33%、酸化マンガン（MnO）0.12%、塩基性成分（ $\text{CaO} + \text{MgO}$ ）4.46%の製錬滓傾向をもつものであった。

### (2) 徳永古墳群H群26号墳出土三葉環頭大刀芯金

合せ鍛えの鉄刀である。硬鋼の皮金は錆化のため試料がなく、柔軟質芯金からの情報である。鉄素材の製造履歴は間接製鋼法の中国の前漢代で開発された炒鋼法（銑鉄を熔融し、これに空気を供給して炭素を酸化して低炭素鋼とした製鋼法）による産物の可能性が高い。

鉄刀の鉄中非金属介在物（鉄の製造過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや耐火物の混入物）は、小さく鋭伸された珪酸塩（37.9%  $\text{SiO}_2$ -15.2%  $\text{CaO}$ -7.5%  $\text{Al}_2\text{O}_3$ -3.6%  $\text{K}_2\text{O}$ -1.7%  $\text{MgO}$  31.2%  $\text{FeO}$ ）系のものが数多く点在した。また、始発原料は介在物組成からみて鉱石系と想定された。

一方、鉄刀芯金は、耐衝撃性を配慮して焼もどしを行なってソルバイト（Sorbite: フェライトと微細セメントタイトの混合物）を析出させ、更に鍛接に際し、炭素高低差の大きい鉄素材の合せの難しさは熟知しており、刃先低炭・棟高炭対策をとり、靱性の向上を計った優品であった。大刀の産地は大陸側に求められよう。

## 1. いきさつ

両遺跡は福岡市西区女原に所在して、高祖山の東側山麓に舌状に延びる支尾根上に、それぞれが位置している。女原上ノ谷遺跡は、9基の上墳が検出されて、鉄滓や炉壁が出土した。当調査からは製鉄址を積極的に証明する遺構は認められなかったが周辺での製鉄操業の可能性は十分に考えられる。出土土器は6世紀後半代であって、ここより約100m南で分岐する尾根上に分布する徳永古墳群H群との関連が注目されている。

一方、徳永古墳群H群26号墳は、堅穴系横口式石室の形態に近く、ここより5世紀末～6世紀前半が比定される三葉環頭大刀が出土した。

これら両遺跡出土遺物を通して、古墳時代の鉄生産の実態を把握すべく目的から専門調査の依頼を福岡市教育委員会から受けた。

## 2. 調査方法

### 2-1. 供試材

両遺跡の調査試料の履歴と調査項目を Table. 1 に示す。

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡	試料	出土位置	推定年代	計測値		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	CMA調査	化学組成
					大きさ(mm)	重量(g)					
MR-1	女原上ノ谷	鉄滓	SK001	6C後半	35×30×20	67		○	○		○
TOK-1	徳永古墳群H群	三葉環頭大刀(芯金)	26号墳	5C末～6C前半	185×21×4*	26	○	○	○	○	

\*大刀の計測値は入手破片のサイズである。

## 2-2. 調査項目

- (1) 肉眼観察
- (2) マクロ組織
- (3) 顕微鏡組織
- (4) ビッカース断面硬度
- (5) CMA (Computer Aided X-ray Micro Analyzer) 調査
- (6) 化学組成



## 3. 調査結果と考察

### 3-1. 女原上ノ谷遺跡出土品

#### (1) MB-1: 鉄滓 (砂鉄製錬滓)

① 肉眼観察: 炉底滓の破砕塊である。裏面の反応痕と木炭痕を早するところに本来面を留めるのみで、他はすべて破砕面であった。色調は灰黒色から赤褐色を呈し、気泡少なく緻密質である。局部的に金属鉄の錆化した赤黒色の錆面が認められた。

② 顕微鏡組織: Photo. 1 の①-③に示す。鉱物組成は、大きく成長した白色粒状結晶のヴスタイト (Wüstite: FeO)、淡灰色盤状結晶のファイヤライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )、基地の暗黒色ガラス質スラグ、これに白色不定形金属鉄などから構成される。福岡平野の低チタン砂鉄原料の炉底滓 (製錬滓) の典型的な組織である。

#### ③ ビッカース断面硬度:

Photo. 1 の②は金属鉄を、③は白色粒状結晶の硬度測定の際の圧痕写真を示す。硬度値は、前者で 103Hv と極低炭素鋼の値を示し、後者は 490Hv とヴスタイトの文献硬度値の 450~500Hv の範囲内に収まって<sup>9)</sup>、ヴスタイトと同定できるものであった。

#### ④ 化学組成

Table. 2 に示す。炉底滓の特質としての鉄分が多く、夾雑成分は比較的少ない傾向を有する。全鉄分 (Total Fe) は、57.94% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.14%、主成分は酸化第 1 鉄 (FeO) の 64.23% で顕微鏡組織観察での大量ヴスタイト (FeO) とよく対応し、酸化第 2 鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 11.26% の割合であった。ガラス質成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ) は 19.32% で、このうち、塩基性成分 ( $\text{CaO} + \text{MgO}$ ) は製錬滓なので多くて 4.46% を含む。始発原料は低チタン砂鉄なので二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) は 1.48% と少なく、ハナジウム (V) 0.33%、酸化マンガン (MnO) 0.21% などは製錬滓としての成分傾向を顕著に表わす。他の随伴微量元素からは一般的傾向をもち、酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ ) 0.092%、五酸化燐 ( $\text{P}_2\text{O}_5$ ) 0.33%、硫黄 (S) 0.03%、銅 (Cu) 0.002% であった。

Table. 2 鉄滓の化学組成

組成 (%)	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第 1 鉄 (FeO)	酸化第 2 鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )	二酸化珪素 ( $\text{SiO}_2$ )	酸化アルミニウム ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K <sub>2</sub> O)
女原上ノ谷 MB-1	57.94	0.14	64.23	11.26	11.34	2.76	3.81	0.65	0.560
酸化ナトリウム (Na <sub>2</sub> O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ )	酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ )	硫黄 (S)	五酸化燐 ( $\text{P}_2\text{O}_5$ )	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	ガラス質成分
0.200	0.21	1.48	0.33	0.03	0.33	0.13	0.33	0.002	19.32

(ガラス質成分:  $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ )

### 3-2 徳永古墳群H群26号墳出土品

#### (1) TOK-1：三葉環頭大刀

① 肉眼観察：大刀全体像は本文（38頁参照）。筆者の手元に届いた試料は皮金は外れた芯金破片である。現存長さ16.5cm、幅2.1cm、棟厚み0.4cmで、外面は赤黒色に錆が発生するが内部は金属鉄が残存する。内部の遺存状態は、すこぶる良好であった。

#### ② マクロ組織

Photo. 3の①に20倍で撮影した埋込み試料の全体像を示す。ナイトル（5%硝酸アルコール液）による腐食（Etching）で炭素分布が判る。以先側は低炭傾向で白く、棟側は高炭で黒い。また、右側が高炭であった。なお、非金属介在物は単相硅酸塩系が小さく分散されて多く認められた。

#### ③ 顕微鏡組織

Photo. 1の④の鉄中の非金属介在物を示す。介在物は、黒色の硅酸塩のガラス質単相の組成のものが小さく分散して多く存在する。他組成の介在物である酸化鉄のヴスタイト（Wüstite: FeO）や、鉄かんらん石のファイヤライト（Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）は殆んど認められなかった。以上の非金属介在物の所見は、北京科技大学の韓汝珍先生の炒鋼の特徴点と一致する<sup>2</sup>。介在物組成の同定は、CMAの項で詳述する。

次にPhoto. 1の⑤に刃先例をピクルル（ピクリン酸飽和アルコール液）で腐食した炭化物組織である。鉄中の炭素含有量にバラツキがあるので拡大組成として400倍で⑥⑦⑧に掲示した。⑥は刃先端であってフェライト（Ferrite: 金相学の $\alpha$ 鉄または純鉄の呼称）基地にソルバイトが少量析出する。⑦⑧は刃先から4mm内側へ入った所（Photo. 3①に位置明記）を撮影した。右側の黒味の強い箇所は炭素量が多くて⑦の様にソルバイトとパーライト（Pearite: フェライトとセメントタイト（Cementite:  $\text{Fe}_3\text{C}$ ）が交互に重なり合って構成された層状組織）、その左側は一部球状セメントタイトがあって、これにソルバイトが混在する。

更に炭化物組織は位置をずらして、Photo. 3の①の中程とPhoto. 4の③でみられる様に横断面を50倍で撮っている。同じく棟側最上部の横断線組織を100倍でPhoto. 4の①に示し、これの端中端の拡大400倍をPhoto. 2の①②③に準備した。①②はソルバイト、③はパーライト（左側）とソルバイトの混在組織であった。

次にフェライトの結晶粒界を明瞭に現わす目的でナイトル腐食で表わした組織がPhoto. 3の②（刃先側）であり、Photo. 4の②の棟側となった。これらの組織を通して芯金の製造履歴を再度考察すると、芯金は銑鉄を炒鋼法で脱炭して低炭素鋼として鉄素材とし、これに浸炭鍛打を加えて0.2~0.6%前後の炭素量になる芯金製造としている。造刀は、これに皮金をまき付けて鍛接したものと考えられる。この刀の様な人物の鍛接は高度技術であって、特に炭素含有量の高低差のあるものは最適温度幅がせまく、鍛接個所に亀裂を生じるので難しい。その刃を配慮したのか該品の芯金刃先例は柔軟性をもたせるため低炭素域とし、棟側は高炭素域、すなわち、皮金炭素レベルまで近付けた可能性が伺われた。

しかる後、大刀は切れ味や韧性を付与するための熱処理が加えられた。最初は800℃前後で水焼入れがあり、これに500~600℃に焼もどしを行うと、セメントタイトの微粒粒子の凝集が一層進んだソルバイト組織となる。500℃以上の焼もどしを行うと、遊離したセメントタイトは凝集、球状化して、パーライトに比べて高い強度と硬さをもってくる。この芯金には焼入れ組織のマルテンサイトは認められなかった。

④ ビッカース断面硬度：Photo. 2の④~⑦に刃先近傍で炭素含有量の違いがある個所の硬度測定

の圧痕写真を示す。刃先端近くでフェライト結晶粒を明瞭に有した低炭素域 (C:0.1%前後) ④は 151Hv、フェライトに対してソルバイト約1/3折出個所 (C:0.25%前後) の⑤で 191Hv、パーライト折出個所 (C:0.2%前後) 179Hv、ソルバイト6割前後の折出個所 (C:0.4%前後) 201Hvであった。組織に見合った硬度値と考えられる。現代の日本刀の芯金の硬度値も 150~250Hvの実績がある<sup>9</sup>。

⑤ CMA 調査: Photo. 5 に鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値を示す。介在物の形状は、Photo. 1 の④の顕微鏡組織で観察したように、鍛伸された暗黒色のガラス質スラグである。黒く伸びた介在物に集中する白色輝点は、珪素 (Si)、アルミニウム (Al)、カルシウム (Ca)、カリウム (K) であって組成は珪酸塩系とわかる。SE (2次電子像) に4と番号を付けた個所での定量分析値をみると、37.97% SiO<sub>2</sub>-7.5% Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-15.2% CaO-1.7% MgO-3.6% K<sub>2</sub>O-31.2% FeO である。介在物組成は、珪酸塩系単相といえる。

## 5. まとめ

6世紀後半の可能性をもつ女原上の谷遺跡 SK001 土壌出土鉄滓は、福岡平野で広く認められる低チタン酸性砂鉄を始発原料とした製鉄滓と同等品であった。福岡平野6世紀後半代は、古墳供献鉄滓で多くの製鉄滓が確認された様に<sup>8</sup>、この時期に製鉄操業があった事はほぼ間違いない事実と推定される。

次に約100mを隔てて同じ尾根上に分布する徳永古墳群H群26号墳 (堅穴系横口式石室の形態に近い) からは、5世紀末から6世紀前半に比定された三葉環頭大刀が出土した。該品は鉄鉄を酸化脱炭した炒鋼法にもづく鉄素材の可能性がすぶる高い。造刀法は芯金刃先側は軟質低炭素域として柔軟性をもたせ、棟側は高炭素域として高炭素皮金との合せ鍛え鍛接での異種接合難作業の緩和策がとられ、かつ、全体の韧性向上のため、焼入れ、焼戻しを施してソルバイト組織を得る方法を探っていて、外装にたがわぬ高度技術の優品であった。産地は大陸側であって、韓半島の東部から南部から出土する大刀の調査によって産地は更に、絞り込む事が出来よう。

もし、26号墳の被葬者が製鉄技術集団に由縁のある人物であったならば、製鉄技術の系譜を考察する上でも重要な意味をもつものと考えられる。

## 注

- ① 日刊工業新聞社『鏡結鏡組織写真および識別法』1968
- ② 韓汝琇「中国における早期鉄器の冶金学的特徴 (紀元前8世紀~紀元2世紀)『東アジアの古代鉄文化~その起源と伝播~』(1993年たたら研究会国際シンポジウム予稿集)』たたら研究会 1993 41頁
- ③ 鈴木卓夫『たたら製鉄と日本刀の科学』雄山閣 1990 154~155頁
- ④ 拙稿「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』(たたら研究会創立25年記念論文集)たたら研究会編 1983

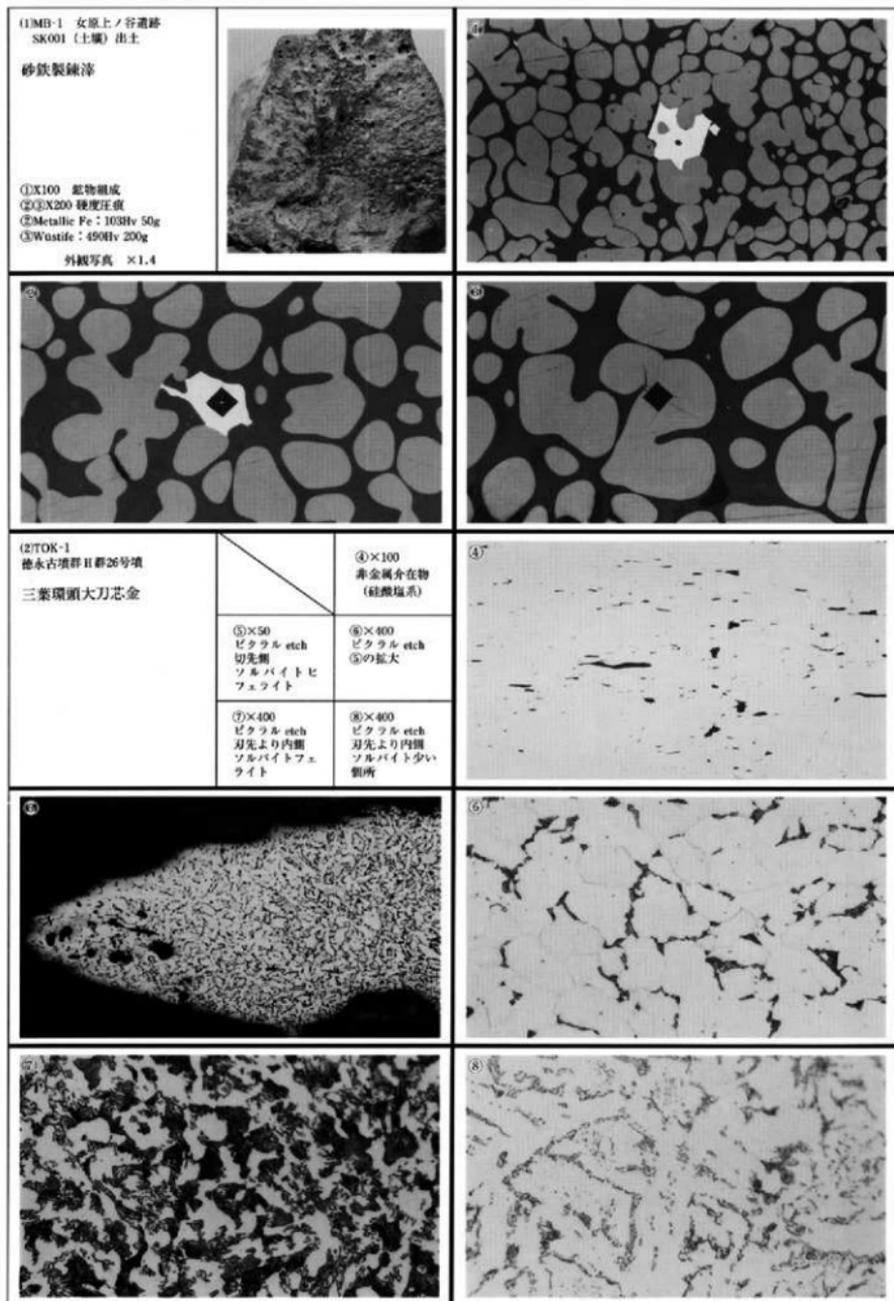


Photo. 1 鉄滓と大刀の顕微鏡組織

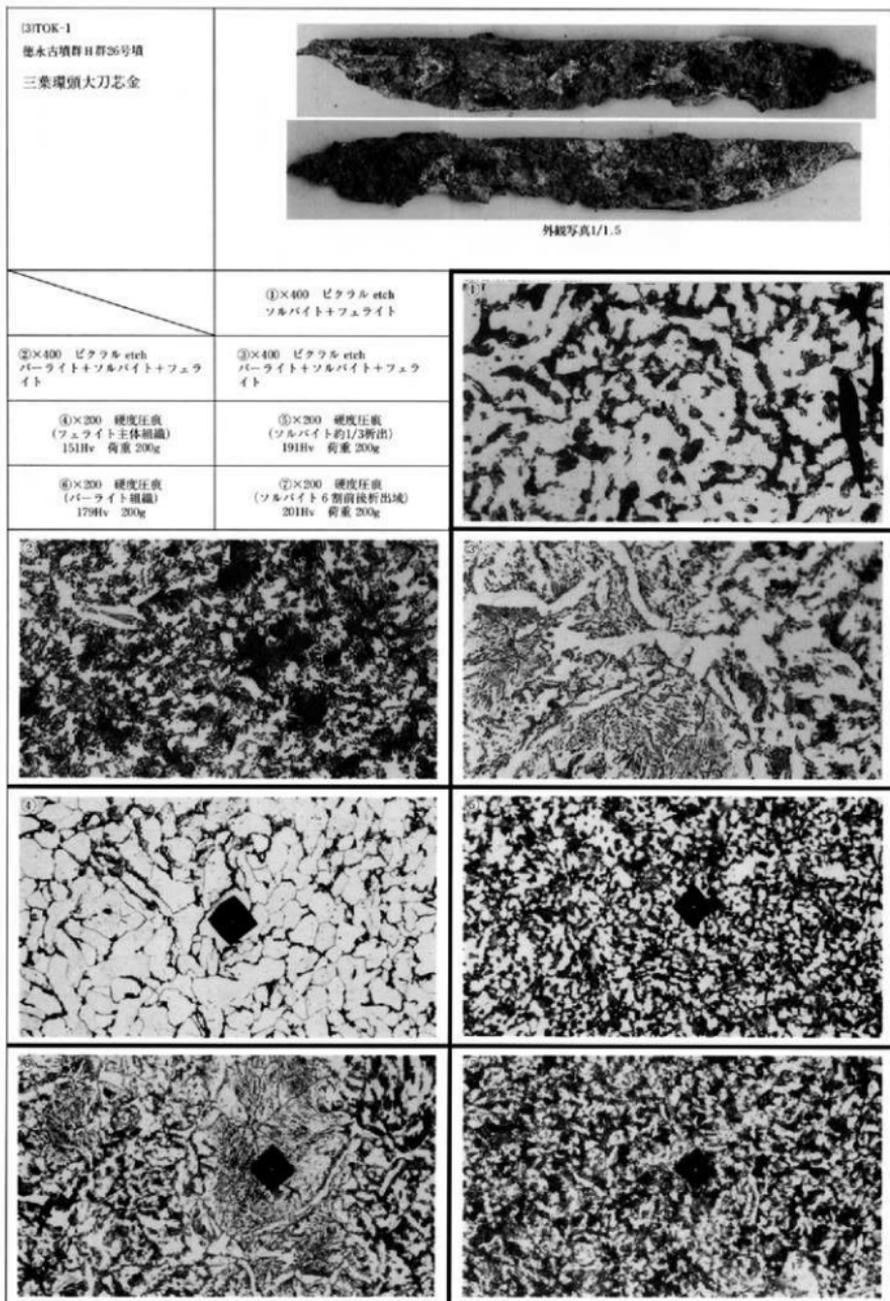


Photo 2 大刀の顕微鏡組織

① ナイタル etch ×20

② ナイタル etch ×50

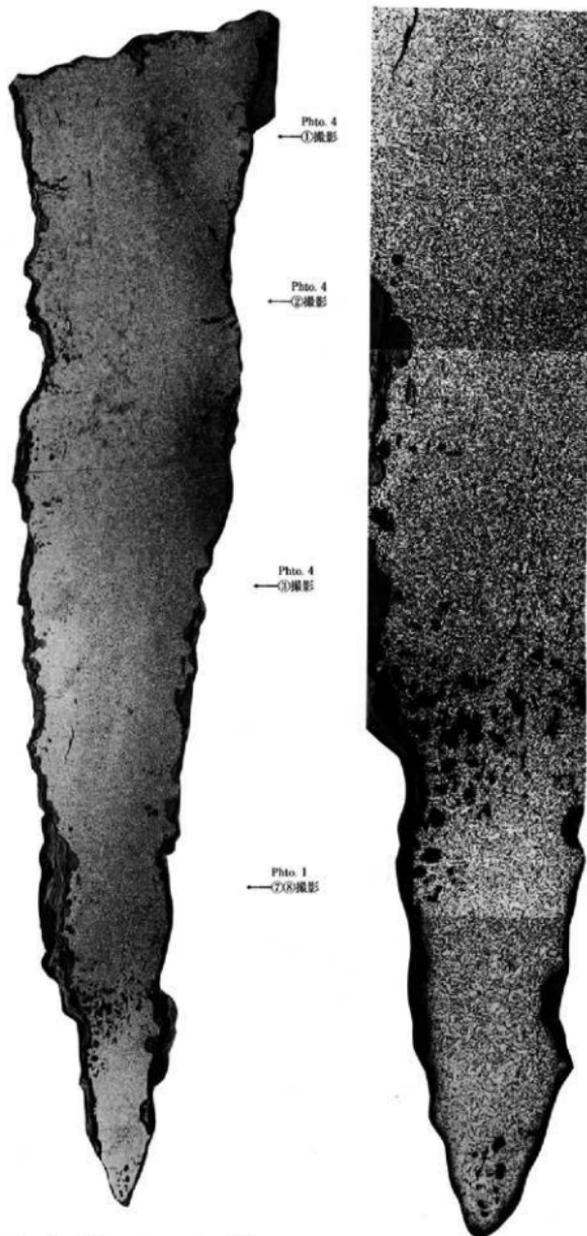


Photo 3 大刀のマクロ・ミクロ組織

① ピタラル etch ×100

② ナイタル etch ×100

③ ピタラル etch ×50

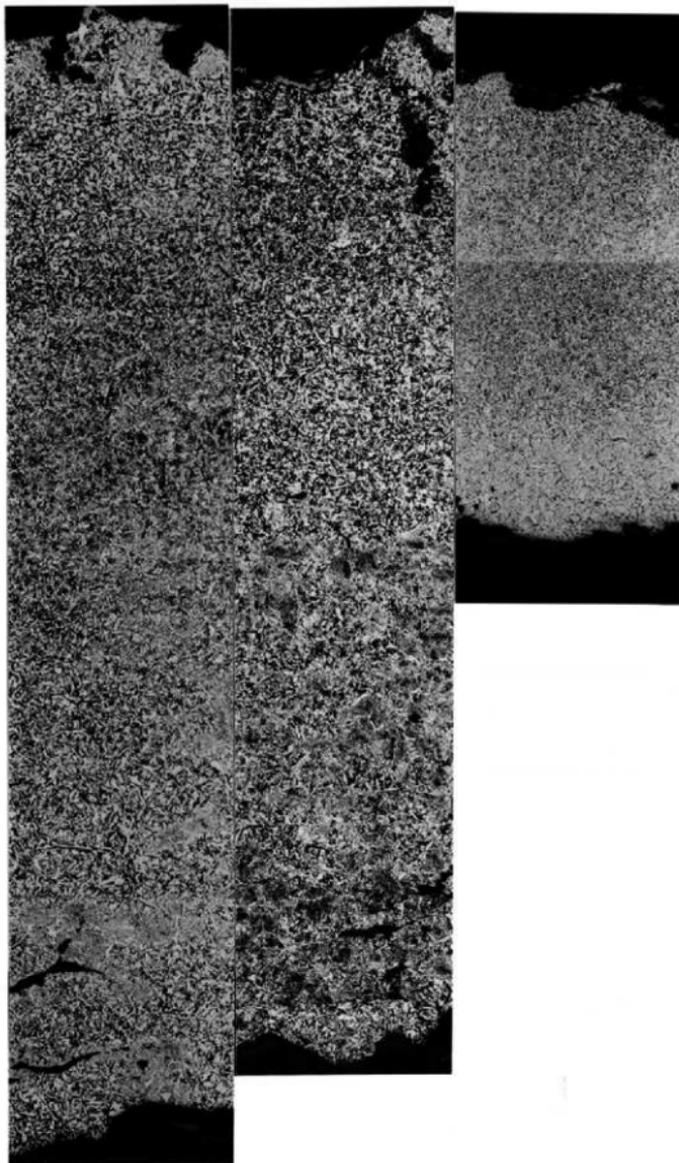
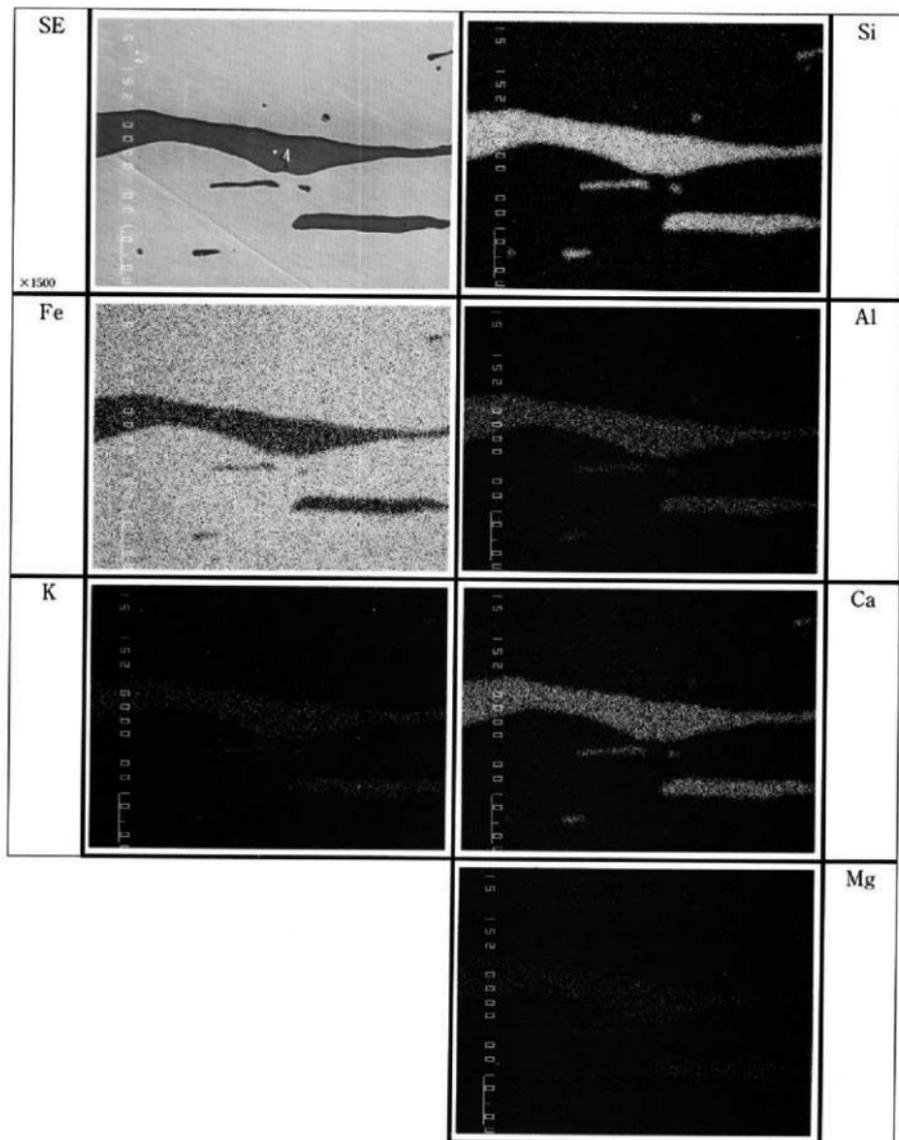


Photo. 4 大刀の顕微鏡組織



	SiO <sub>2</sub>	MnO	S	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	FeO	CaO	MgO	Na <sub>2</sub> O	F	ZrO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	TOTAL
4	37.974	0.182	0.194	7.450	31.150	15.226	1.741	0.497	0.000	0.000	0.290	3.577	0.023	98.304

Photo. 5 三業環頸大刀芯金 (TOK-1) 鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値 (×1500 縮小0.7)

# 图 版



(1) 調査区全景 (南から)



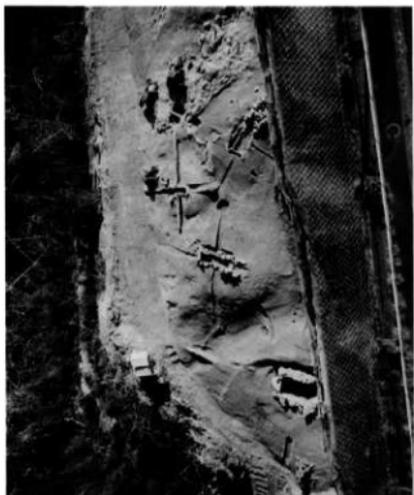
(2) 調査区全景



(1) 調査区遠景 (南西から)



(2) 調査道 (南から)



(3) 8、9、26、28号墳 (西から)



(4) 調査区全景 (北から)



(1) 26号墳付近丘陵依存状況 (北西から)



(2) 26号墳付近地山成形面 (北西から)



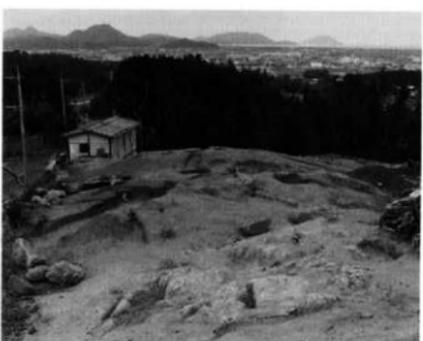
(3) 8号墳付近丘陵依存状況 (南西から)



(4) 8号墳付近地山成形面 (南西から)



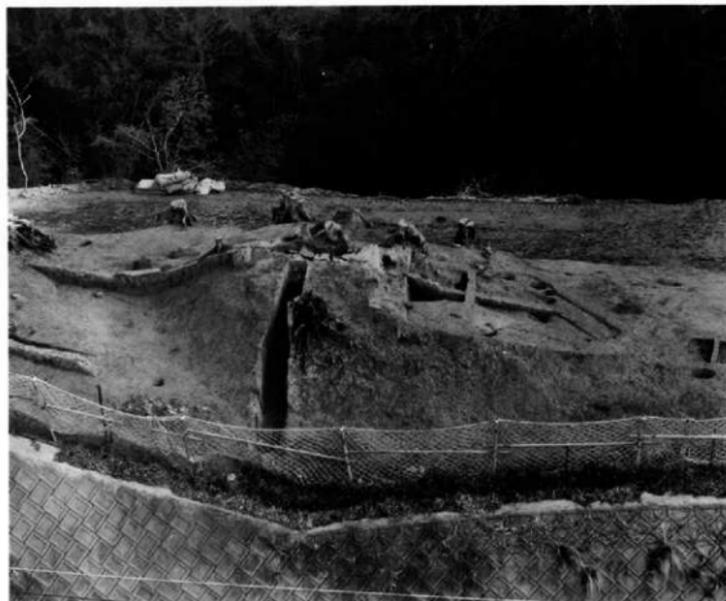
(5) 調査終了後26号墳付近 (北から)



(6) 調査終了後8号墳付近 (南から)



(1) 6号墳地山成形面（西から）



(2) 6号墳墳丘依存状況（東西から）



(1) 6号墳閉塞状況 (南から)



(2) 6号墳閉塞板石 (南から)



(3) 6号墳開口状況 (南から)



(4) 6号墳石室から



(5) 6号墳地山成形成面 (南から)



(1) 6号墳A群 (南から)



(3) 6号墳aトレンチ土層 (北から)



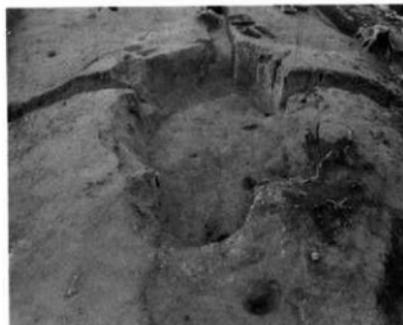
(2) 6号墳左側壁 (東から)



(4) 奥壁 (南から)



(5) 6号墳腰石 (南から)



(6) 石室掘方 (南から)



(1) 7号墳丘依存状況 (南東から)



(2) 7号墳地山成彩面 (南西から)



(3) 7号墳 Chamber 状況 (北から)



(4) 7号墳 Chamber 開口状況 (北から)



(1) 7号墳 Chamber 概観 (東から)



(2) 7号墳 Chamber 状況 (東から)



(1) 7号墳遺物出土状況(北東から)



(2) 7号墳遺物出土状況(北から)



(3) 7号墳C群(北から)



(4) 7号墳A群(東から)



(5) 7号墳D群(北から)



(6) 7号墳F群(北から)



(7) 7号墳G群(南から)



(8) 7号墳I群(南から)



(1) 7号墳奥壁



(2) 6、7号墳地山成形面 (西から)



(3) 7号墳墓道横断土層 (北から)



(4) 7号墳墓道横断土層 (北から)



(5) 7号墳Cトレンチ土層 (北から)



(6) 7号墳腰石 (北から)



(7) 7号墳南東隅腰石 (南東から)



(8) 7号墳石室掘方 (南から)



(1) 8号墳壇丘依存状況 (北東から)



(2) 8号墳地山成形成面 (北東から)



(2) 8号墳直道石壁



(4) 8号墳A層 (南東から)



(1) 8号墳盛土内の礎 (北東から)



(3) 8号墳羨道床面 (北西から)



(1) 8号墳石室南観 (南から)



(2) 8号墳閉塞状況 (南西から)



(3) 8号墳石室 (西から)



(4) 8号墳石室閉塞状況 (西から)



(1) 9号墳墳丘依存状況(東から)



(2) 9号墳地山成形成面(東から)



(1) 9号墳丘保存状況 (西から)



(2) 9号墳地山成形面 (西から)



(3) 9号墳Aトレンチ土層 (西から)



(4) 9号墳Bトレンチ土層 (西から)



(1) 9号墳Dトレンチ土層 (東から)



(2) 9号墳周溝状遺構 (北東から)



(3) 石室左側壁



(4) 石室右側壁



(5) 9号墳B群 (西から)



(6) 9号墳A群 (南東から)



(7) 9号墳石室床石 (北から)



(8) 9号墳石室床方 (東から)



(1) 26号墳増丘依存状況 (東から)



(2) 26号墳地山成形成面 (東から)



(3) 26号墳石室 (東から)



(4) 26号墳入口部 (西から)



(1) 26号墳地山成影画 (西から)



(2) 26号墳石室 (南から)



(1) 26号墳遺物出土状況 (西から)



(2) 26号墳遺物出土状況 (北西から)



(3) 26号墳閉塞状立石 (西から)



(4) 26号墳腰石 (南から)



(5) 26号墳石室掘方 (南から)



(6) 26号墳入口部



(1) 27号墳丘依存状況 (北から)



(2) 27号墳奥壁 (西から)



(1) 27号墳内譚列石出土状況 (西から)



(2) 27号墳石室 (北から)



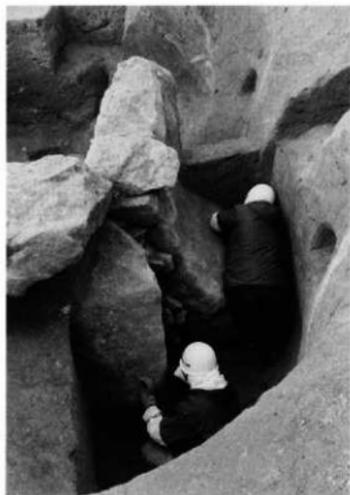
(3) 27号墳墳丘依存状況 (西から)



(4) 27号墳内譚列石 (北から)



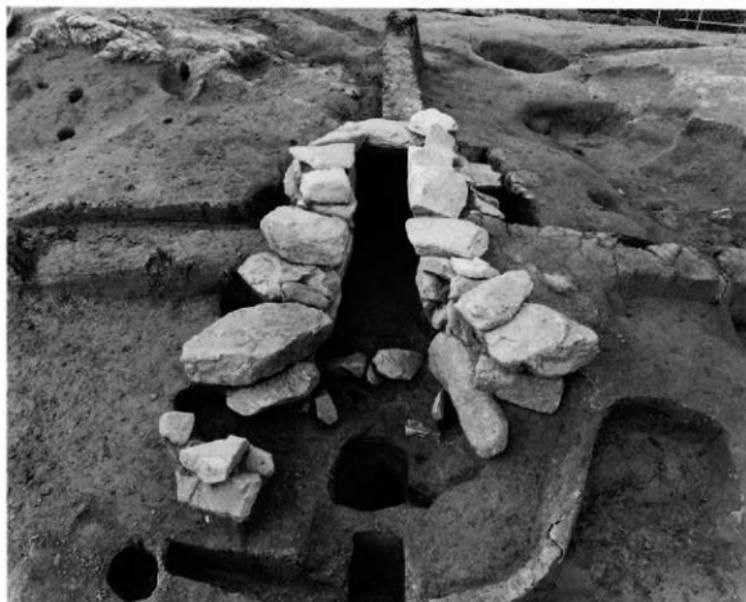
(5) 27号墳Aトレンチ土層 (西から)



(6) 27号墳石室掘方作業風景 (南から)



(1) 28号墳墳丘依存状況（北東から）



(2) 28号墳石室（東から）



(1) 28号墳腰石 (北から)



(2) 28号墳墳丘依存状況 (東から)



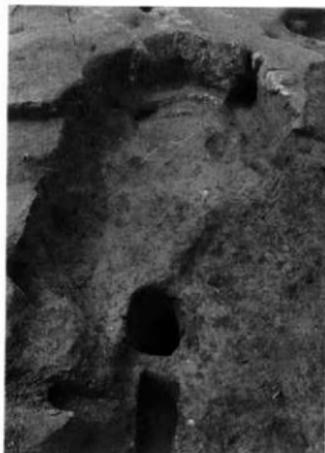
(3) 28号墳B群 (東から)



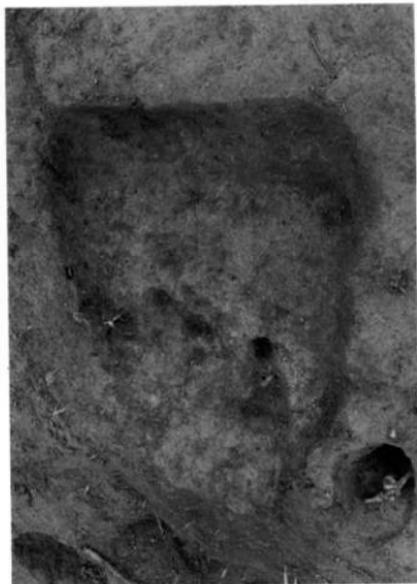
(4) 28号墳B群 (南から)



(5) 28号墳奥壁



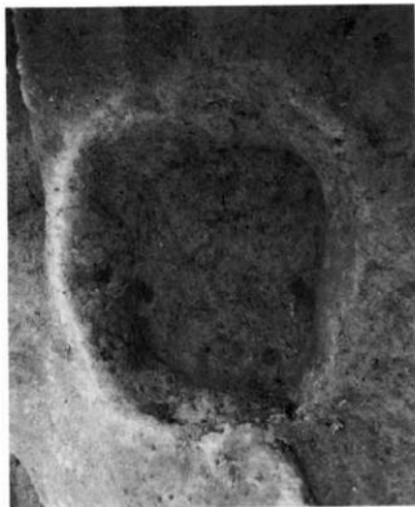
(6) 28号墳石室掘方 (東から)



(2) SK001 土層 (西から)



(4) SK015 (東から)



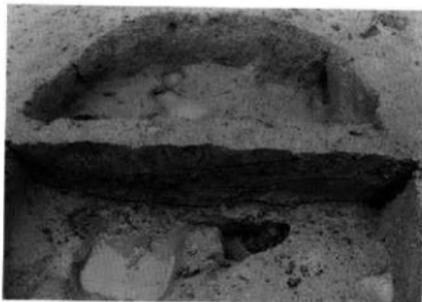
(1) SK001 (南から)



(3) SK014 (北から)



(1) SK010 (西から)



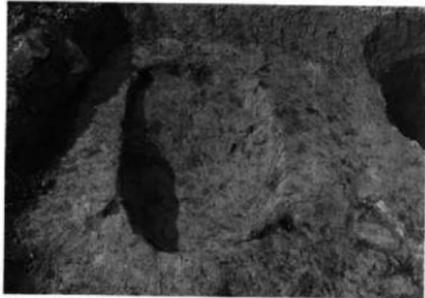
(2) SK011 (南から)



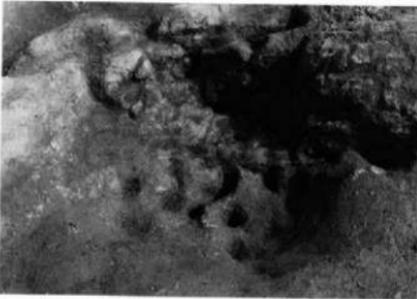
(3) SK016 (南から)



(4) SK016 土層 (西から)



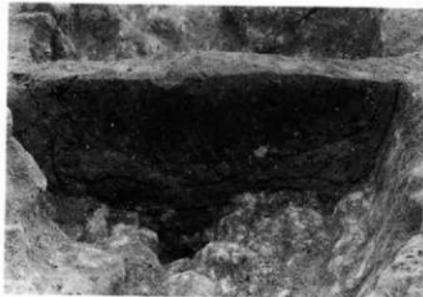
(5) SK017 (北東から)



(6) SK026 (西から)



(7) SK021 (南から)



(8) SK021 (北から)



(1) SX003, 004 (西から)



(2) SX005 (西から)



(3) SX006 (西から)



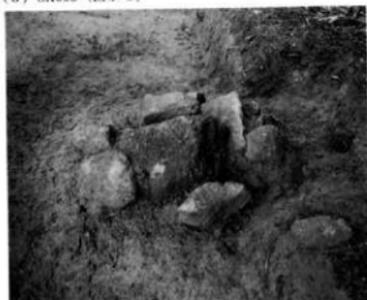
(4) SX007 (西から)



(5) SX008 (西から)



(6) SX009 (北西から)



(7) SX026 (西から)



(1) II区全景 (南から)



(2) II区全景 (西から)

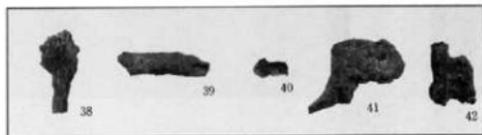
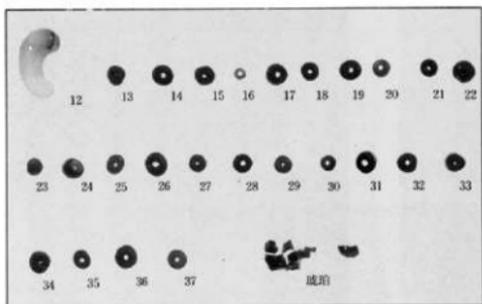
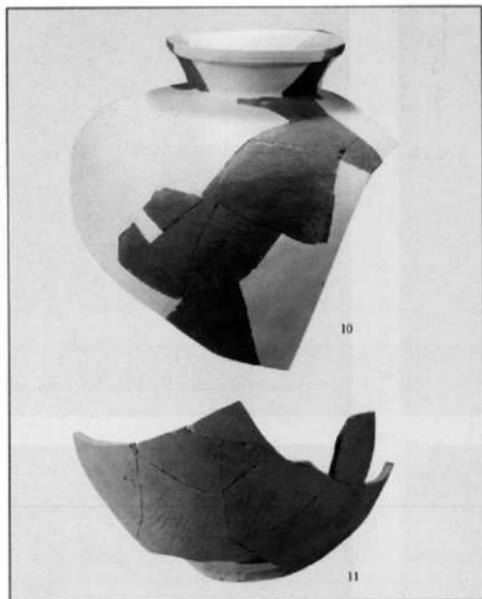
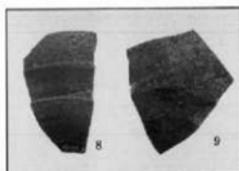
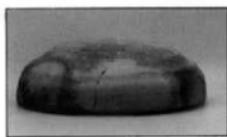
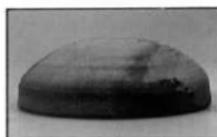
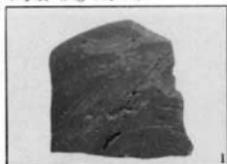


(3) SK023 (西から)



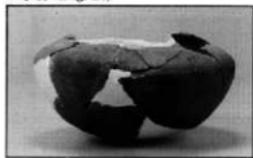
(4) SK025 (北から)

6号墳 (Fig. 14、15)



出土遺物 1

7号墳 (Fig. 24)



1



5



6



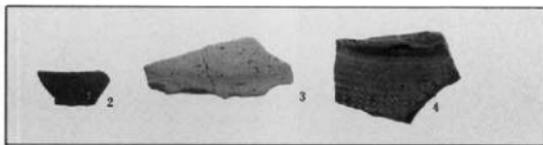
7



12



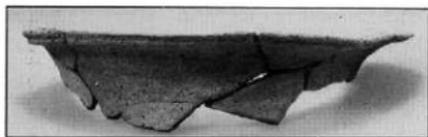
14



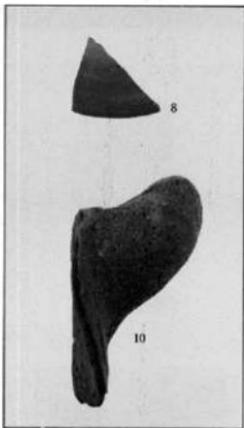
2

3

4



9



8

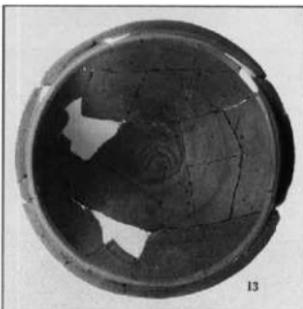
10



11



15



13



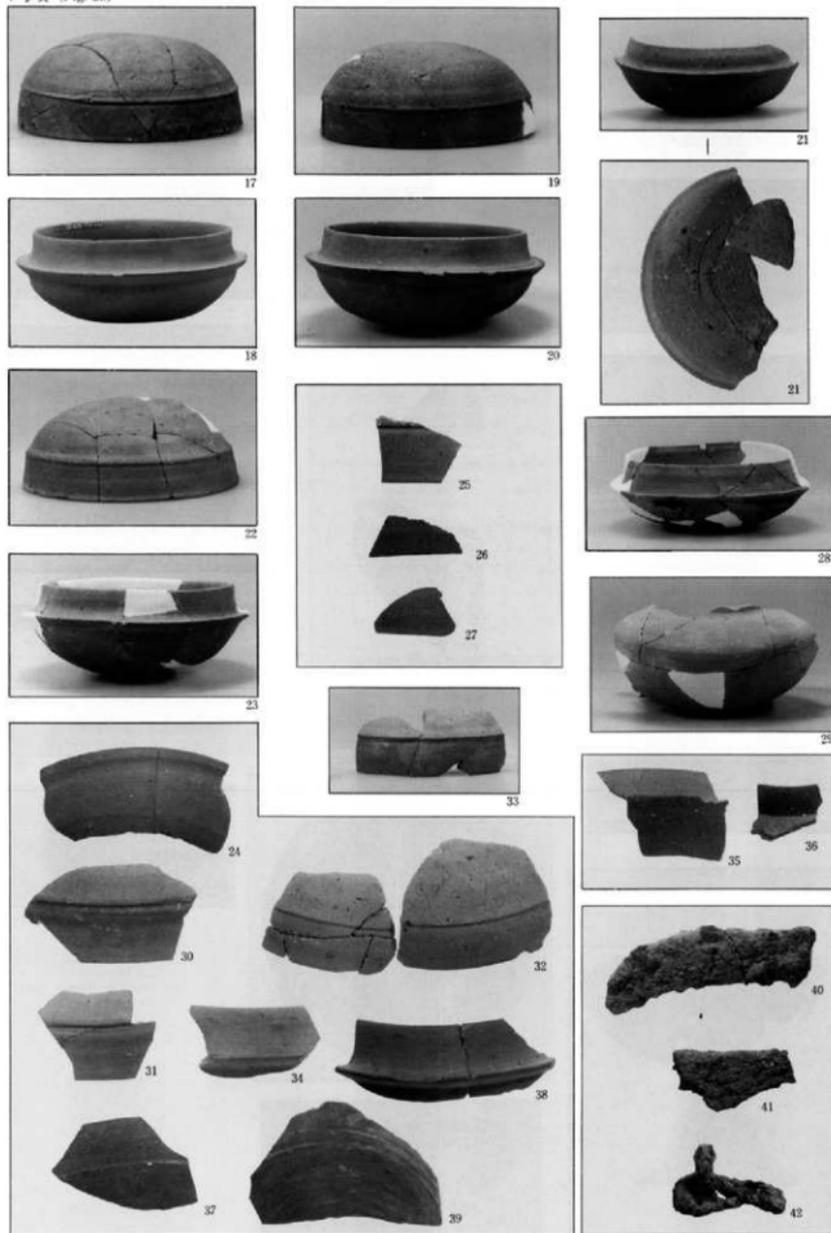
16



18

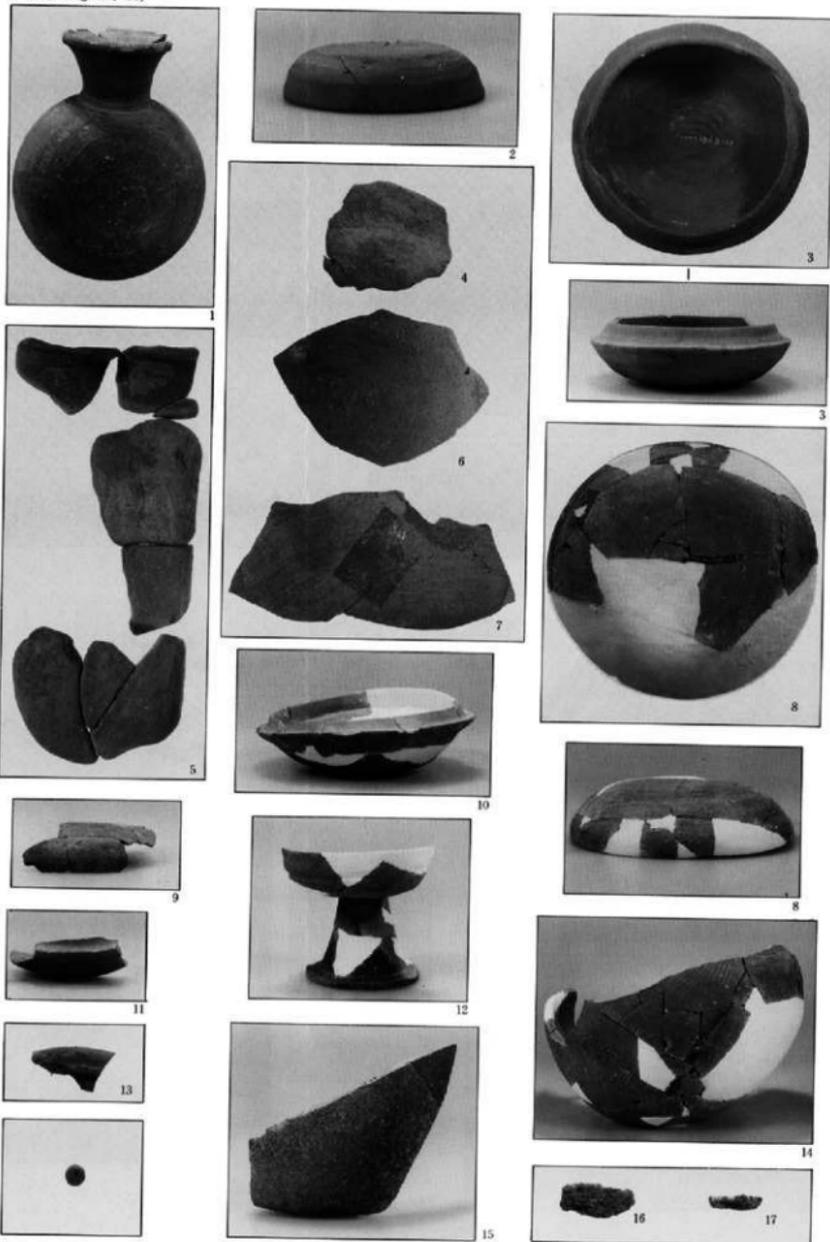
出土遺物 2

7号墳 (Fig. 25)



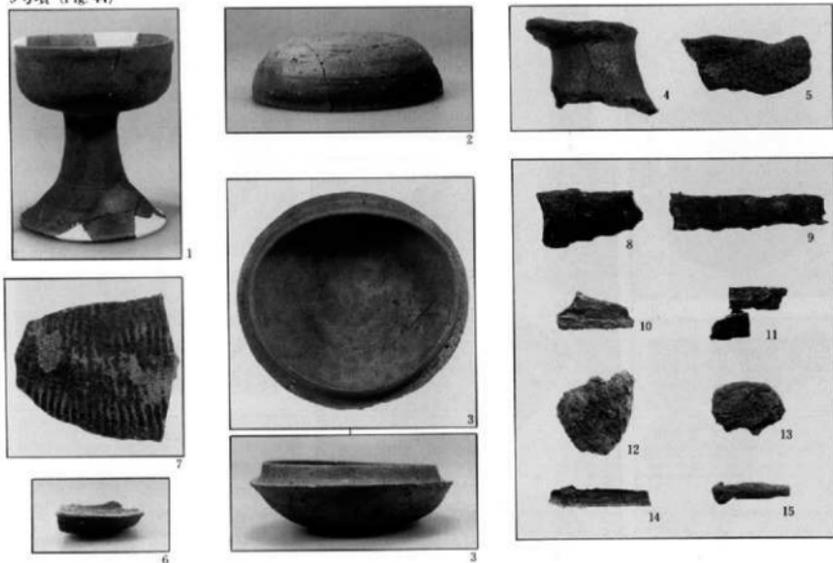
出土遺物 3

8号墳 (Fig. 35、36)

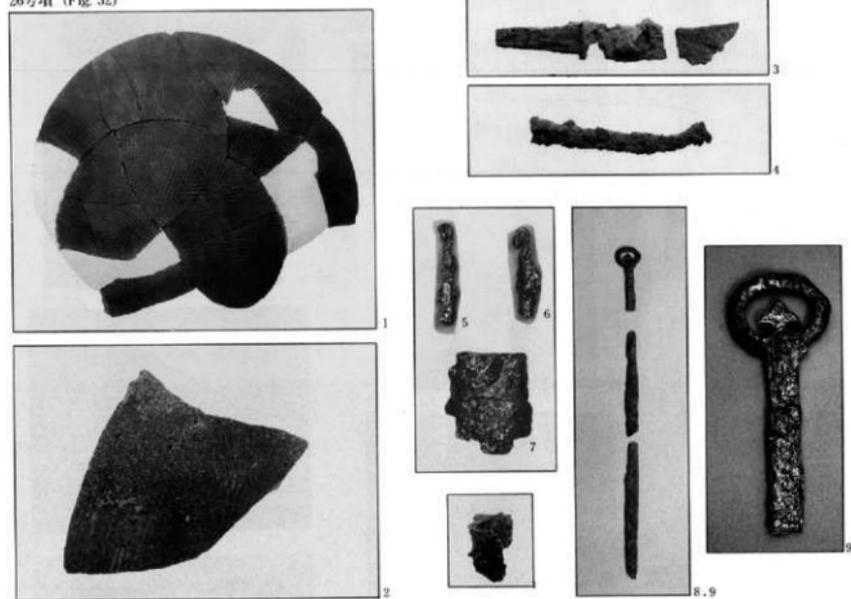


出土遺物 4

9号墳 (Fig. 44)

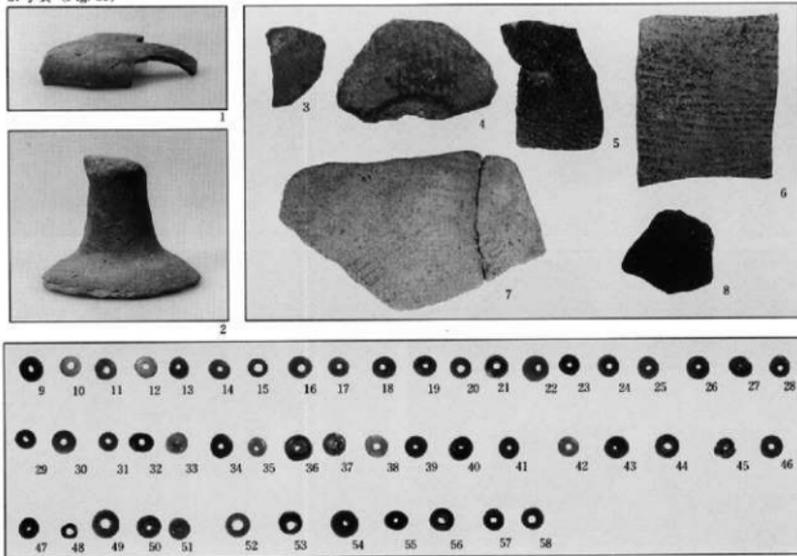


26号墳 (Fig. 52)

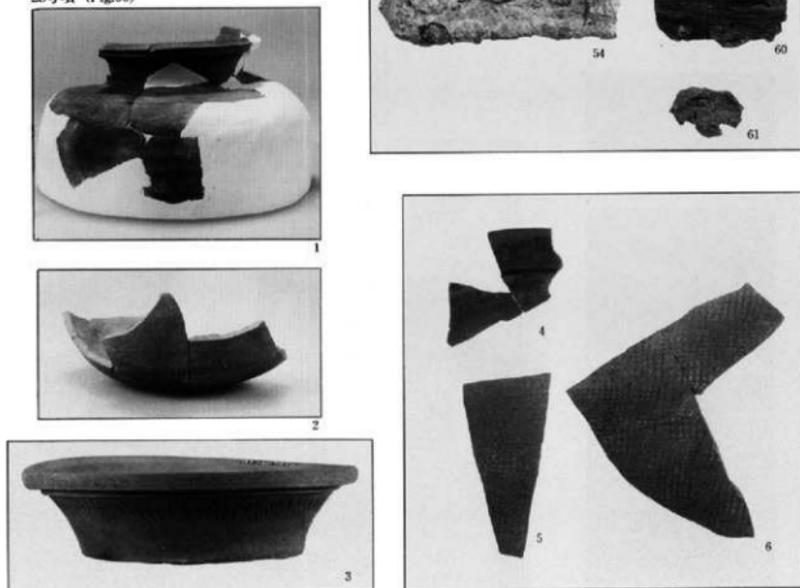


出土遺物 5

27号墳 (Fig. 59)

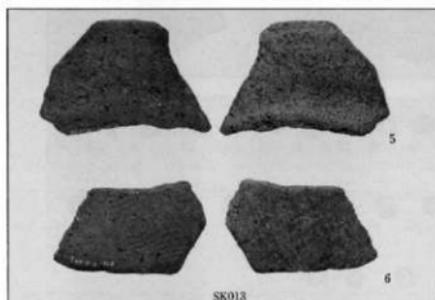
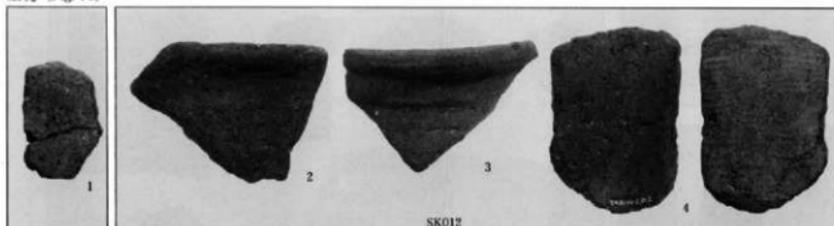


28号墳 (Fig. 66)

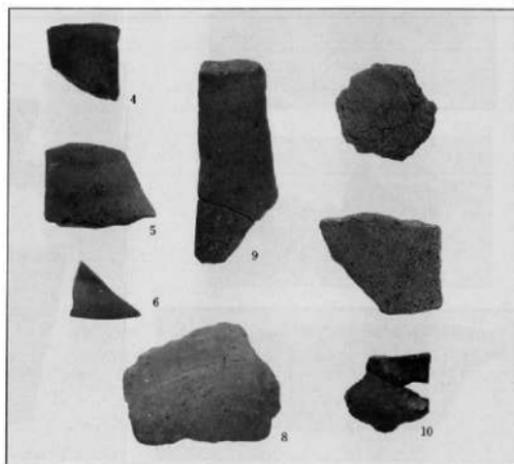


出土遺物 6

土坑 (Fig 70)

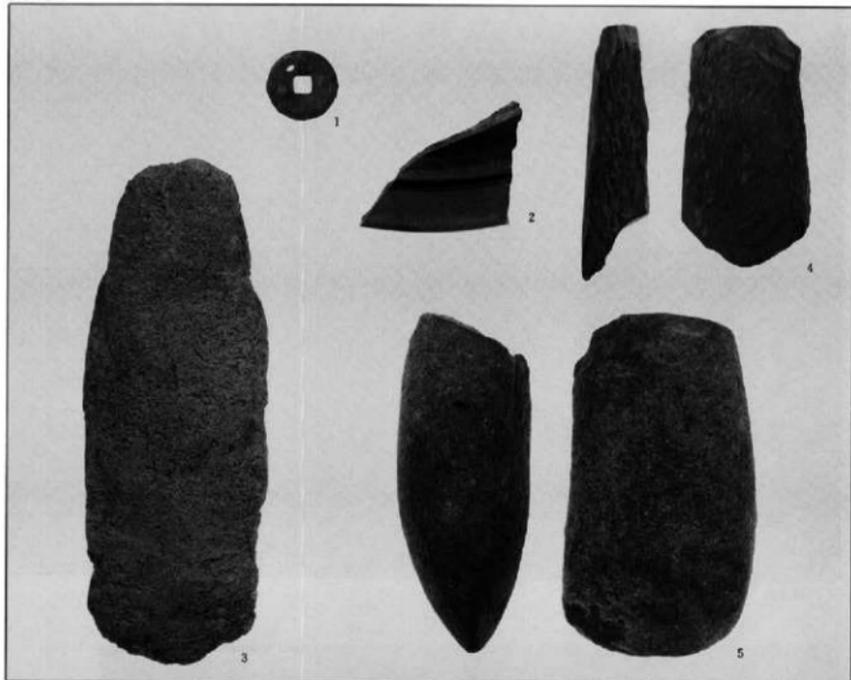
SK025  
(Fig 74)

SK023

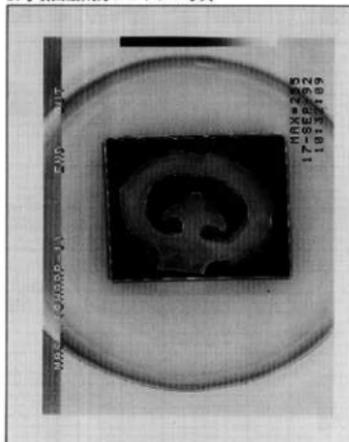


. 出土遺物 7

表探遺物



26号墳出土太刀レントゲン写真



出土遺物 8



(1) 調査前 (北西から)



(2) 調査区全景 (北から)



(1) 調査区全景 (北西から)



(2) SK001 (南から)



(3) SK005 (西から)



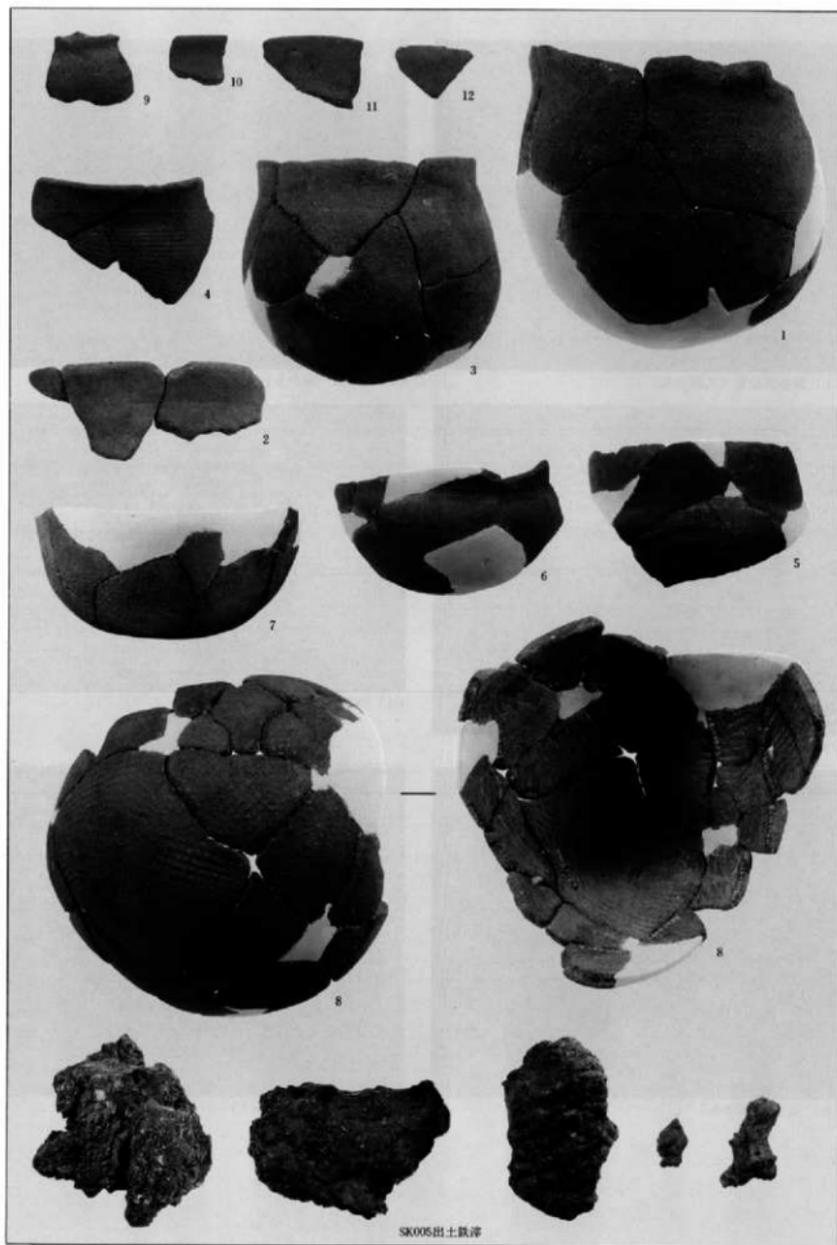
(4) SK007 (南から)



(5) SK009 (北から)



(6) SK009 土層 (北から)



SK005出土鉄滓

出土遺物

福岡市西部地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

徳永古墳群 3  
女原上ノ谷製鉄址

福岡市埋蔵文化財調査報告書第436集

1995年(平成7年)3月31日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 福岡印刷株式会社